



* 0050058000 *

0050058-000

特216-895

中学国文教科書教授備考

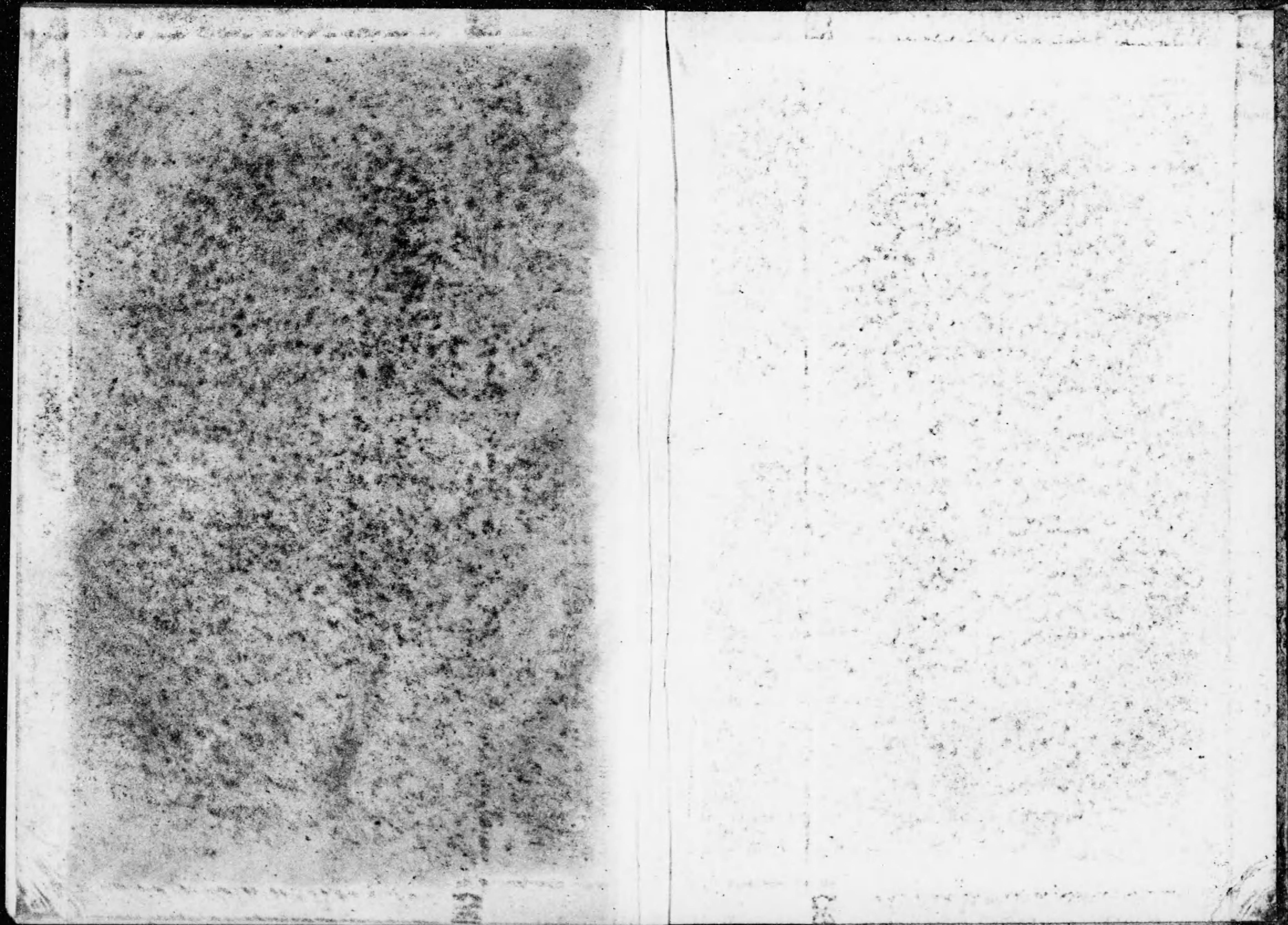
光風館編輯所・編

光風館書店

卷7

昭和10

AHJ



特 216
895



教科書教授備考 卷七

修正二十三版用

東京 光風館藏版



例言

本書は吉田彌平編輯國文教科書修正第二十三版の教授にあられる諸氏の参考に供するために編纂したものであります。

本書編纂の根本方針は、左の諸項に示す通りであります。

一 教授の實際に役立つものでなくてはならぬこと。随つて教授に際して取扱はるべき諸種の問題や各般の事項は、つとめてこれを網羅し、能ふ限りの用意を以てこれが解説を試みました。

一 平易簡明と思はれる事項をもなるべく取上げて一考を拂ふこと。これは現在の教授者諸氏の教授訓練乃至學校學級經營等に關する事務的負荷の誠に多大な實狀に鑑み、その勞力と時間との節約を慮り、以て教授の能率を増進し、且つ教授の効果を一層多大ならしめようとする老婆心からであります。

一 特殊な意見や専門に過ぎる學說等で、實際教授上に關係の少いものには觸れないこと。總じて無駄はつとめてこれを排すこと。

一 新奇に趨らず、所好に偏せず、中正安當正鵠を期すこと。

以上の方針に従つて記述の内容體裁を次のやうにいたしました。

解題

その課の名義由來・出典・原文との關係等について、簡単な解説をあげました。

作者

作者の小傳を記し、更に文壇學界等に於ける位置・作風・學說及び主なる著述等について略述し、殊に教材と關係ある事項の紹介に意を用ひました。

編纂の用意

その教材が讀本組織體系に於てこの位置に据ゑられた所以を明かにしました。

要旨

その一篇の生命とし、眼目とし、ねらひどころと考へられる點、または一篇の大意について述べました。

概説

一篇の構造各節の要領を略記しました。こゝに節といふのは構想上の一段落をさしたものであつて、必ずしも行の改るところが節の改るところであるといふわけではありません。又節と段との區別も殊更に立てませんでした。

取扱上の注意

この項に於ては、一篇の特色や鑑賞批評にわたる事柄、又教授上留意すべき點等を記しましたが、何れもほんの思ひつきの程度で、固より秩序も整はず、説いて精しきを得る所まで到つておません。殊に語句の一々を通しての吟味や教授上の留意事項は煩しくなつて、洩れなく書くことは到底出来ませんので、唯その大體の手法を記したものに過ぎません。それで鑑賞の點については要旨の項をも常に参照せられたいのであります。

設問

およそ教授の際の設問は、極めて大切なことであつて、或は教授の豫備的に、或は教授の進行中に、又はその終了後になど、種々適宜に施さるべきものであります。この項では主として教授の後に試みらるべき種類の問を二三例示したのみであります。(時に豫備的質問も擧げてありますが、それはむしろ例外であります)もしそれ、内容形式の兩方面にわたり、教授の手續段階に應じて、更に鑑賞的に、批評的に、應用的に、試験的に施さるべき問題の一々に至つては、親しく教授にあたられる諸氏の考慮に待つべきもので、唯その際、この設問の項が多少の参考となるなら

ば幸であります。

釋義

語句の解釋並に文法修辭についての吟味を試みました。語句の解題については、先づ語の本義を簡明に記しました。蓋し本義を明かにすることは、解釋上極めて重要なことと考へられるからであります。次になるべくその課その場合に適切な意味をあげるやうにと力を用ひました。またやゝ詳細にわたり、或は参考的に理解して置くべき事項等は、一字下げとして項末に補記しました。

口平易に過ぎると思はれるやうな語句でも一應解説いたしました。これは教授の正確徹底を期するためであります。平易な事項と雖も事前に教授者の一顧が向けられますならば、教授は一層質の向上を來たすものであると信ずる故であります。

ハ語の註釋のみに止まらず、句及び文にわたつた解釋をも施すことに留意しました。

文法修辭の吟味は、餘り深入りはしないで、その箇所を生徒に十分會得させ味はせるのに必要と思はれる程度に止めました。

通釋

擬古文中古文韻文等のうち必要あるものについては、原文を現代文に通釋したものを掲げて、解釋の効果を十分にしようと思ひました。

挿圖

教科書本文中に挿入した繪畫地圖等、並に教授備考中に挿入した各種の圖版について簡明な解説を加へました。

参考

その他、以上の各項で述べべきことながら、やゝ微細に互ること、或は比較的直接緊要ならぬこと等で、教授者の参考となるべき事項を豊富に補記しました。

右十一項は便宜上項目を立てたに過ぎません。各項の間には常に有機的に密接なる關係が存するものでありますから、教授者諸氏はよろしく視野を擴大して、彼此参照しつゝ利用せられたいのであります。

以上が本備考の方針様式の大要であります。併しながら、教授備考は、畢竟教授の資料を提供し、教授上の示唆に任ずるものに過ぎませんので、勿論これが直ちに教授細案になるものでもなく、又これのみによつて教授の完璧が期待出来るものでもあり

ません。殊に國語科の教授は教授者諸氏の教材に對する徹底した理解と熱烈な國語愛の精神と、旺盛な教育力とによつてはじめて見事な成果が結ばれるものと信じます。もし本書の利用によつて、その成果を一層充實せしめて戴くことが出来ますならば、ひとり編者の幸のみではないと存じます。

昭和十年一月

中國文教科書教授備考 卷七

目次

一	櫻と國民性	深作安文	一
二	春の心	〔古今和歌集〕	一五
三	花を惜しむ	村田春海	三
四	見よや春	渡邊華山	四
五	鎮西八郎	〔保元物語〕	七五
六	足摺	〔平家物語〕	一〇三
七	平家の最後	高山樗牛	二九
八	旅人芭蕉	荻原井泉水	一三九
九	青葉		一五三

一〇 奥の細道……………松尾芭蕉 一八一

一一 頼山陽……………朝比奈知泉 二二三

一二 水蓼……………萩原廣道 二三七

一三 千里が竹……………近松門左衛門 二五七

一四 浦の秋風……………賀茂真淵 二六七

一五 江戸時代の文學……………三〇九

一六 光頼卿の参内……………〔平治物語〕 三三七

一七 人臣の道……………北畠親房 三五三

一八 俚諺論……………大西 祝 三七二

一九 四時のあはれ……………兼好法師 三九二

二〇 照る月浪……………〔東關紀行〕 四二二

二一 旅行……………山路愛山 四三三

二二 斑鳩の宮……………三木露風 四五三

二三 日本文化の優秀性……………鹿子木員信 四六三

中國文教科書教授備考 卷七

一 櫻と國民性

1 解題

深作安文著「倫理と國民道德」の中の「櫻と國民性」と題する一篇の一部分を採つた。本課採録の分の前に、神代の木之花咲耶姫の木之花は櫻の意味であつて、櫻は我が國と共に古くあることをのべ、その花が國粹的のもので國華といふべきであるから、國民性との間に親密な關係のあることは容易に想像出来ることを述べて序論とし、又本課採録の分を承けて、その後國民性の缺點を數へてゐる。これは参考欄に原文のまゝ示してある。

「倫理と國民道德」は著者が過去數年に互つて發表した倫理に關する論文十八篇と國民道德に關する論文二十三篇とを集めて一冊としたものである。

大正五年發行。

2 作者

深作安文 フカサク ヤスブミ。
明治七年茨城縣に生れた。明治三十三年、東京帝國大學の哲學科を卒業。現に東京帝國大學教授の任にある。文學博士で、倫理學者としてその説の穩健なのを以て稱せられてゐる。

3 編纂の用意

櫻は我が國の國花であつて、「花は櫻木、人は武士」ともいはれ「敷島の大和心」にも譬へられる。四季折々我が國に咲く花は多いが、櫻ほど國民のあらゆる階級から親しまれ、騒がれるものはない。然らば櫻は何が故に日本の國花であり、日本國民の賞玩を一つに集めるのであら

うか。それは櫻に我が國民性と相共通する特點があるためであるといふことは、誰しも言つてゐるが、この共通點を適確に言つた人はまだ多くない。作者は今、櫻花の性質をつぶさに我が國民性に比較して、國民性の美點を櫻花の美と共に高揚してゐる。時季は正に陽春の候、我が國の都鄙いたるところ櫻花爛漫の美觀を呈してゐる時、本課の讀習によつて、櫻花は益、吾人の精神生活とも深い交渉を持つこととなる。

4 要旨

陽春三月、我が國の天地をかざる櫻花の美しさ。その美しさを人に比しては、古人も「花は櫻木人は武士」といひ、「敷島の大和心を人間はば」と詠じた。作者は今櫻花の性質をつぶさに我が國民性に比較して、國民性の美點を發揮してくれた。殊に櫻が陽氣であり、樂天的であり、淡泊であつて、物事に拘はりなく、又、集團的であつて、その散際のためたいことは、一般國民が結合してよく奉公の事に當り、特に武士が深く君の馬前に死するのと酷似してゐる趣を説いたところが本文の重點である。茲に

於て櫻は愈、吾人の精神生活とも深い交渉をもつことになる。吾人はこれによつて、益、各自の所有する美點を大きくするやうにしなければならぬ。

5 概説

- 第一節（一二頁二行） 櫻の自然美。
- 第二節（二頁三行—三頁一行） 櫻の歴史美。
- 第三節（三頁二行—五頁八行） 櫻の季節と我が國民の行樂。花と人との融合。
- 第四節（五頁九行—九頁） 櫻花と國民性との類似點・一致點の發見。

その一、世間的・樂天的なること。

その二、澹泊であり、物事に執着・凝滞がないこと。

その三、集團的・結合的であること。

その四、櫻は武士の諸美德を象徴するもの。殊にその散際が武士の精神によく相似してゐること。

6 取扱上の注意

冒頭の一節では、櫻花の美を他の花と比較して説いてあ

る。その櫻花の美は理解に難くないが、他花の特徴を東

洋流に漢語で説いたのは、可なり教へにくいと思ふ。梅の「清素」や薔薇の「濃艶」はまだよいが、牡丹の「富貴」、海棠の「妖冶」、菊の「高逸」などになると、單に字に即して訓詁的に説いてもなか／＼生徒には納得されまい。

この種の漢語の教授はどうしたものか。やはり一通りの字義を説いて、それから、それ／＼對象たる花の美の趣を説くより外に仕方があるまい。それも主觀的となり易いので、或處までしかの理解に止まるであらう。とにかく、教授者の豫めの工夫が必要である。

□「巨松の間に錯落する櫻花」の美に就いては、本居宣長の「玉勝間」卷六「花のさだめ」に

松も何も青やかに繁りたるこなたに咲けるは、色はえて殊に見ゆ。

と言つてゐるのが聯想される。一體、右の「花のさだめ」のうち、「花は櫻」の一節（「参考」参照）は本文のこの一節を扱ふに當つて、特に一讀すべきものである。

□平薩州の歌集を託する話については、卷五の二「故郷

の花」を想起せしむべきである。

□吉野朝と櫻花との關係に就いては、卷五の二「吉野山」の末節で學んでゐる。或は小學校でも學んでゐるところがあらう。少くとも「歌書よりも軍書に悲し吉野山」の一句ぐらゐは、生徒に憶ひ起さしめねばならぬ。

□「彼等は純日本の趣味を心から感得する」（五頁八行）の節では、卷五の「國華」に引用されたケーベルの言葉が何よりの参考となる。

□「最後に述べべきは、武士の精神に云々」（八頁五行）の一節である。この一節は、前節の所論と重複するかに見えるが、特に櫻の散際と武士の最期の潔さとの比較の爲に節を改めたものと見ればよい。

□要するに、本課一章は、卷五の第一課「國華」と大體同趣旨、同精神である故に、彼此關聯せしめて扱ふべきである。その具體的例は、前記の外に尙幾らもあらう。但し、あまり同一思想のことを繰返すのは生徒もまたかと思ふであらうし、時には反動的な考も起すであらうから、國民の長所を説くと同時に、また短所を説いて正しい自

覺に導くことを要する。それもこの課の要旨を没却するほどに、短所を強調してはぶちこはしになるので、適度にするのが肝要である。本文作者が、原文に國民の短所を擧げてゐられるのは、「参考」に引用してゐる通りである。

7 設問

- 1 櫻の歴史美といふ意味は如何。
- 2 歴史美を味はふのに都合のよい櫻の名所は何處か。その例をあげよ。
- 3 櫻の歴史美の中に入り来る人物には、どんな例があるか。
- 4 作者の擧げてゐる櫻花と國民性との類似點を數へよ。
- 5 次の語句を解釋せよ。
イ、恍惚として花神に接す。
ロ、勅撰集。
ハ、春風駘蕩。
ニ、一致團結して王の懐に敵する。
ホ、木の下に汗も膾も櫻かな。

6 次の語に略、相反する語をあげよ。(括弧間は反對語) 世間的(出世間的)。樂天的(厭世的。悲觀的)。國民的(個人的)。澹泊(濃厚)。

8 釋義

【櫻花には梅花の清素はない】 梅花は春まだ浅いころ、花の魁をして、寒さを冒して咲くもので、その木ぶり、その花の白い色、その香等は、すべて潔白にして飾りけのない清節の士を思はせる感じがあるが、櫻花にはそのやうな清素の感じはない。

【清素】とは、潔白で飾りけのないこと。

【薔薇】(シャウビ)の濃艶(ノウエン)はない】 薔薇はばら。その花は、あでやかなうつくしさをもつてゐるが、櫻花にはそのあでやかさはない。

【豊麗】ホウレイ。ゆたかなうるはしさ。詩經には、「桃之夭々、灼々其華。」とあつて、妙齡の女子のみづ／＼しい美しさを桃にたとへてゐる。桃花にはどこやらさうした感じのうつくしさがあふ。之を豊麗といつたのである。

【富貴】フウキ。フキ。周茂叔の愛蓮説に、「予謂、菊華之

隱逸者也。牡丹華之富貴者也。蓮華之君子者也。」とある。牡丹のあの大きな厚い花瓣、それを構成するあの大輪には、如何にも富貴の感じがある。

【海棠】カイダウ。薔薇科の落葉喬木。幹の高さは丈餘、葉は長卵形、縁は鋸齒狀、嫩葉は赤味を帯びて美しい。



四月紅色の美しい花を開くので、庭園に栽培して觀賞せられる。支那では殊にこの花を賞し、蜀の地などでは花王とまで稱せられてゐる。花は數花相むらがり、無柄の繖形花序に配列して垂下する。

【妖冶】エウヤ。なまめかしい美しさ。

【妖】も「冶」も、共になまめかしい意。妖艶、妖妍、妖媚、妖靡など、皆同意の熟語である。

謝靈運の詩に「鄙生無文章。西旋整妖冶。」

【高逸】カウイツ。俗氣を離れて高くすぐれてゐること。

愛蓮説には「菊華之隱逸者也。」とある。

【咲きも残らず散りも始めぬ】 満開のさまである。「咲き残らず散り初めぬ。」といふのに、詠嘆の助詞「も」を挿んだ言ひ方である。

【爛漫】ランマン。(一)花の咲き亂れたさまにもいひ、又(二)光の輝くさまにもいふ。こゝは(一)の意。

「爛」は鮮かに光る義。

天神記卷一に「爛漫と花開け、匂ひ四方に芬々たる。」王延壽の文に「流離爛漫。」

【快哉】クワイサイ。こゝちのよいことだと思ふこと。愉快。

【恍惚】クワウコツ。(一)物事に心を奪はれたさまにいふ語。うつとりとすること。

禮記の祭義に「諭其志意、以其恍惚、以與神明交。」(二)はつきりとせぬさまにいふ語。

老子に「道之爲物、惟恍惟惚。惚兮恍兮、其中有象。」こゝは(一)の意。

【花神】クワシン。花の精靈。又、花を守る神。

高啓の詩に「幾看疎影低徊處、只道花神夜出遊。」

【錯落】 サクラク。入りまじること。

【松はいよ／＼翠に……】 松の葉色と櫻花の色と相映發してその各、がいよ／＼色あざやかに見えるさまである。

【一入】 ヒトシホ。一層。一段。もと染色の方の言葉で、染物を染汁に一回入れひたすことである。一入染といふ言葉もあり、續古今集秋下に「くちなしの一入ぞめのうす紅葉いほの山はさぞしぐるらむ。」などある。

【花は櫻木】 頭註に引いた一休和尚の狂歌は、尤草紙に出てゐる。

【因縁】 インエン。音便でインネンとよむ。縁故。ゆかり。

【粟】 ホコ。蘇軾の前赤壁賦に、「灑酒臨江、橫槩賦詩、固一世之雄也。」とあるのは、魏の曹操が戦場で矛を横たへて詩を賦したといふ風流の故事を述べたものである。本文に、馬上槩を横たへたとあるのは、必ずしも矛とみなくも、言葉だけを借りたものと考へてよい。

【吹く風をの歌】 この歌は、千載集春下に、「みちの國にまかりける時、なこそその關にて花のちりければよめる、源義家朝臣」といふ詞書がして出てゐる。なこそその關の

名に、來るといふ意味をかけて、「この關は、吹く風よ來ると止める關で、なこそその關といふのかと思ふが、風はやはりせき止められないで、道も狭いばかりに、山櫻が一ぱいに散つてゐることだ。」といふほどの意。

【鎮西】 チンゼイ。九州の稱。保元物語に「十三の歳より鎮西の方へ追下すに、豊後國に居住して。」

【勅撰集】 チョクセンシフ。勅命によつて撰ばれた和歌集である。

我が國には、古今和歌集以下二十一の勅撰集がある。これを勅撰二十一代集といふ。

【平薩州】 ヘイサツシウ。平忠度は薩摩守であつたからかういつた。忠度がその和歌の師俊成卿の門を叩いて、歌集を託した話は平家物語卷七「忠度都落の事」にくはしい。本卷第七課に採録してある源平盛衰記の文も同一事を主題とした物語である。

【師】 忠度の歌の師匠たる、五條三位藤原俊成卿。この話は、平家物語・源平盛衰記に見えてゐる。

俊成卿は千載集を撰する場合に、この歌集の中から、「讀人知らず」として、

さゝなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かなといふ一首を採つたのである。

「俊成卿」(シュンゼイキヤウ)は、藤原俊成(トシナリ)。藤原定家の父。世に五條の三位といふ。後白河法皇の院宣を承つて、後鳥羽天皇の文治三年に千載和歌集を撰進した。平家物語には次の如くある。

「その後世しづまつて、千載集を撰せられけるに、忠度のありしありさま、いひ置きしことのは、今更思ひ出でてあはれなりけり。件の巻物の中に、さりぬべき歌いくらもありけれども、その身勸人のなれば、名字をばあらはされず、故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、よみ人知らずと入れられたる。」

「さゝなみやの歌」は、千載集春上に、「故郷花といへる心をよみ侍りける。讀人しらす。」と詞書して載つてゐる。故郷は志賀の都をさす。志賀の都は、天智天皇の御時の都である。天皇の崩後早くも荒廢したので、萬葉集

卷一にも、その荒れたあとを見てよんだ柿本人麿の有名な作がある。「さゝなみ」はそのあたりの古い總名である。「や」は詠嘆の助詞、さゝなみの志賀の都といふのを、詠嘆的にいつたので、萬葉集には、石見の高角山といふのを、「石見のや高角山」といつた例もある。「昔ながら」は、「昔のまゝ」の意を、固有名詞の長等山にかけた。長等山は比叡山から南に走つて、近江と山城との國境をなす山脈の、大津市の西に當る邊の汎稱である。一に滋賀山といひ、櫻嶺・相庭山・明神山・道場山等の諸峯がある。琵琶湖の疏水はこの山の下を穿つて京都に入る。一首の意は、「天智天皇の都であるさゝ、波の志賀の都はすつかり荒れてしまつたが、長等山の山櫻は色も香も昔のまゝ變らずに咲いてゐることだ。」

【三更】 サンカウ。子の刻。即ち午後十二時から午前二時までの間。よなか。丙夜。

杜甫の詩に「江月去人只數尺、風燈照夜欲三更。」
【行宮(アングウ)の櫻樹を削つて一詩を題し】 教科書の頭註参照。

この話は、太平記卷第四「備後三郎高德が事」の條に
はしい。

「勾踐」(コウセン)は支那の昔の越國の王。吳國の王夫
差のために會稽山に破られて堪ふべからざる辱めをうけ
たが、忠臣范蠡(ハンレイ)に助けられて、その仇を復
することが出来た。高德は後醍醐天皇を勾踐に比し奉り、
「天よ勾踐を空しくする——死なす——こと勿れ、(主上
をお守りせよ)、時に范蠡の如き忠臣がないでもないか
ら」と天に呼びかけた詩の句によつて、忠臣の居ること
を主上にお知らせ申し、御心を安め奉つたのである。

「題す」は、書きしるす意。

【春風駘蕩】 シュンブウタイタウ。春風がそよ／＼と吹い
て、快くのんびりした景色をいふ。

【春服】 シュンブク。春さる衣服。はるぎ。

論語の先進篇に「莫春、春服既成、冠者五六人、童子六
七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而归。」

【芳醇】 ハウジュン。かんばしくよい酒。

【欣々】 キン／＼。よろこぶさまにいふ語。

詩經の大雅に「旨酒欣欣、燔炙芬々」
孟子の梁惠王下に「舉欣欣然、有喜色。」

【九十の春光】 三箇月九十日間の、のどかな春景色をいふ。
【行樂】 カウラク。楽しみ遊ぶこと。出あるいて楽しむと
いふのではなく、楽しみをなすといふ意味である。

【百敷の大宮人】 新古今集春下に「題知らず、山邊赤人」と
あるのが、教科書の頭註にある歌である。萬葉集卷十に
野遊と題して、「もゝしきの大宮人は暇あれや梅をかざし
てこゝにつどへる」とあるのを、かへて轉載したもの
で、萬葉では作者不明の歌である。随つて新古今に、山
邊赤人の作としてあるのも、信用し難い。

【百敷の】は大宮の枕詞。もと百石城、即ち多くの石を疊
んで、堅く造つたいかめしい城といふ意味で、大宮即ち
皇城のいかめしさを形容した言葉であるといはれる。

「いとまあれや」は、「暇あればや」といふ意。「ば」をつ
けないでいふのは、萬葉時代の語法である。

一首の意は、皇城にお仕へする大宮人は、暇があるので
あらうか、櫻を頭に挿しかざつて、今日もまた遊びくら

したはい、

今日もといふ所に、昨日も遊びくらししたが、といふ心持
が含まれて、長閑な春の日の有様が思はれる。

【殿上人】 テンジャウビト。四位・五位の人、又は六位の
藏人で、京都御所の清涼殿の殿上の間に昇ることを許さ
れたもの。

【櫻狩】 サクラガリ。山野に櫻を尋ねて遊び歩くこと。
拾遺集、春に「櫻狩雨は降りきぬ同じくはぬるとも花の
かげにかくれむ」

【夜嵐や太閤様の櫻狩】 芭蕉の俳弟國女の句で、其袋の中
にある。「思夜櫻」と題してある。かの有名な太閤の醍醐
の花見はいとも盛大に夜にかけて行はれた。折柄の夜嵐
に櫻吹雪を現じたであらうが、それは絢爛たる豪華の景
に一層の風情を添へたであらうとの意。

【醍醐の花見】 「醍醐」は京都市東山区醍醐にある眞言宗の
大本山なる醍醐寺である。清和天皇貞観十六年に聖寶僧
正の創立した名刹。聖寶僧正、この人は名山靈地を巡つ
て苦行しゐるうち、この山が佛法相應の靈場であること

を知り、山中に老翁が泉水をなめて醍醐の味があるとは

めるのを聞いて、寺を建てようといふ大願をおこし、終
にその一念を果した。醍醐寺といふ名はそれに基くのだ
といふ。慶長三年三月十五日の午後から夜にかけて豊臣
秀吉はこの寺の境内で豪奢を極めた花見の宴を催した。

【國女】 ソノヂ。生れは伊勢松坂の人であるが、岡西惟
中の妻となつて難波に住んでゐた。芭蕉晩年の弟子。芭
蕉の死ぬ半箇月程前、國女の宅で催された句會に、芭蕉
が「白菊の目に立てて見る塵もなし」と詠んだのは有名
な話である。

【木の下にの句】 初五はコノモトにとよむ。櫻の木の下で
花見の酒宴をしてゐると、櫻の花が散りかゝつて、御馳
走の汁も膾も眞白くなつたといふ有様をよんだもの。

【花神の殊寵を蒙る】 花を司る神から特別の寵愛を受け
る。日本が四季その折々に様々の美しい花に恵まれてゐ
ることを言つたものである。


【年々歳々花は相等しい】 唐の劉廷芝の詩の中にある句。

代下悲白頭翁上

洛陽城東桃李花 飛來飛去落誰家
 洛陽女兒惜顏色 行逢落花長嘆息
 今年花落顏色改 明年花開復誰在
 已見松柏摧爲薪 更聞桑田變成海
 古人無復洛城東 今人還對落花風
 年年歲歲花相似 歲歲年年人不同
 寄言全盛紅顏子 應憐半死白頭翁
 此翁白頭眞可憐 伊昔紅顏美少年
 公子王孫芳樹下 清歌妙舞落花前
 光祿池臺開錦繡 將軍樓閣畫神仙
 一朝臥病無相識 三春行樂在誰邊
 宛轉蛾眉能幾時 須臾鶴髮亂如絲
 但看古來歌舞地 惟有黃昏鳥雀悲

【老の將に至らんとするを知らない】古今集卷一に「染殿后のおまへに花がめに櫻の花をさへせ給へるを見てよめる」と題して、さきのおほきおほいまうちぎみ（前太政大臣藤原良房）の「年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思ひもなし」の歌がある。こゝはこれ

を下において書いたものであらう。
 【花や人、人や花】花が人か、人が花かといふので、花と人と分けて考へられないやうになつた心持である。



宮 離 濱

【渾然融合し去る】コ
 ンゼンユウ
 ガブシサ
 る。すつか
 りととけあ
 つて一つに
 なつてしま
 ふ。

【象徴】シャ
 ウチヨウ。
 Symbol of

譯である。表象ともいふ。我が民族の趣味精神は無形のものであるが、それが形をもつてあらはれたのが櫻花であるといふ意味で用ひたのである。

【君子國】淮南子に「東方有君子國」とある。
 【精華】セイクラ。純美な花。最もすぐれて美しいもの。
 【陶冶】タウヤ。「陶」は焼物を造る人。「冶」は鍛冶屋。これから轉じて、陶工の器を造り、鍛工の金を鑄る如く人才を育成する義。
 漢書の董仲舒傳に「或天或壽、或仁或鄙、陶冶而成之。」
 【觀光】クワンクワウ。土地の状態や民の習俗等を視察すること。見物。
 【濱の離宮】東京市京橋區築地四丁目の南に在る離宮。もと江戸幕府の時、徳川氏は別殿を此處に設けて、將軍の遊覽の場所に宛て、濱の御殿と稱した。慶應二年、幕府はこれを海軍所に宛てた。明治維新後官有地となり、明治三年宮内省の管轄として濱離宮と改稱した。その苑池は頗る風致に富んでゐる。明治時代には内外の臣僚を此處に召して觀櫻御會を催された。
 【新宿の御苑】シンジウクのギョエン。東京市四谷區内藤新宿に在る。もと内藤駿河守の下屋敷内に在つた庭で、玉川園と稱した。明治五年大藏省の管轄となり、農事試

驗場となり、その後内務省勸農局の所管に移つた。十二年宮内省の管轄に歸して新宿植物御苑と稱し、三十九年新宿御苑と改稱した。
 【世間的】セケンテキキ。梅の隱逸に對して、社會的なのをいふ。
 【樂天的】ラクテンテキキ。「樂天」は天命を樂しむ心で、世の中を樂觀すること。「厭世」(エンセイ)の反對である。
 【隱逸】インイツ。世の中を通れること。又、世の中を通れる人をいふ。
 後漢書の岑彭傳に「招三聘隱逸與參三政事、無爲而化。」
 【澹泊】タンパク。心があつさりとして無慾な貌。
 揚雄の長楊賦に「人君以三玄默爲神、澹泊爲德。」
 【凝滯】ギョウタイ。とどこほり。
 物事にとどこほるのは、執着が強いため、澹泊の反對である。
 【家族制】カゾクセイ。家族制度とは、社會・國家の構成の單位を家とする法則である。これを類別すると三つになる。

(一)家は單に夫婦及びその子の結合たるにとゞまり、子が成長して婚姻すれば、その原家を離れて更に一家を創立するもの。(フランスの民法はこれを取る)

(二)家を以て永久的結合となし、子は婚姻してもなほその家の家族として存続し、家長が死亡すれば、長子が舊家長の後を承けて新に家長の位置に入り、その弟妹甥姪等の家長となる。これを家長的家族制といふ。普通に家族制度といふのはこれである。

(三)又家の存続は認めても長子の相續を認めず、家長がその子の中から随意に一人を選んで自分の後を繼がせ、他の子は原家から離れて各一家を成す制度。(イギリスの民法はこれをとる)

我が國の家族制度は(二)であり、民法もこれに基いてゐる。

【憤】イカリ。敵愾心(テキガイシン)の憤である。

頭註に引いた句は、左傳文公四年の條にある。諸侯が王の怒る所のものを敵として戦ひ、王のため之を討滅するといふことで、これを引用して、我が國民がよく結合して

天皇の御爲に天皇の怒り給ふ所を敵として、よく戦ふことを言つた。日清・日露その他の戦役・事變等はその好例である。

【挺んで】ヌキんで。「ぬきいで」の音便。

【清廉】セイレン。所行が潔くて貪らぬこと。心が清くて私慾のないこと。

莊子に「諸侯之劍以三知勇士爲鋒、以三清廉士爲鏑。」

【大和魂の體現、武士道の象徴】本居宣長の歌に「敷島の

大和心を人間はば朝日に匂ふ山櫻花」とある。

【體現】「象徴」はほぼ同じ意味の語で、形をとつてあらはれたものといふ意。

【慌しい】アワタましい。

【微塵】ミチン。(一)こまかいちり。(二)極めて微細なもの。極めてわづか。

こゝは(二)の意。

【神州正大の靈氣が凝つて云々】水戸藩の志士藤田東湖の

「和ニ文天祥正氣歌」に

天地正大氣 粹然鍾神州

秀爲不二獄 巍聳三千秋
注爲三大瀛水 洋々環八洲
發爲萬朵櫻 衆芳難與儔

9

挿圖

春圖なる新宿御苑

新宿御苑内の櫻花の咲き亂れたあたりの一景である。特に本書の挿圖として宮内省に御貸下を願ひ出で、許可を得たものである。

新宿御苑については語釋欄を参照せられたい。

墨堤の櫻花 川端玉章筆

原題は墨堤春曉。東京隅田川の左岸、舊稱墨田村附近の堤防内なる櫻の老樹の満開の景である。蜿蜒里餘にわたる老櫻はその間に入りまじる草葺の民屋と好配合をなして、風情が殊にすぐれ、江上波靜かなあたりには、都鳥が浮んでゐる。

筆者川端玉章は明治時代の圓山派の畫家。幼名は瀧之助。敬亭・瑋翁等と號した。京都の人。中島來章・小田海樞等に學んで、畫名が次第に揚つた。維新の頃江戸に來り、天真堂といふ畫塾を開いた。明治の初年、洋畫熱の盛に起るや、率先これを學んでおのれの日本畫中に取り入れた。明治二十九年帝室技藝員に推さ

れた。同四十二年川端畫學校を設立して後進を誘掖した。大正二年卒。年七十二。

10 參考

1 原文の省略

原文には本課に採録した後を承けて左の一章があつて、國民性の缺點が指摘してある。

けれども、一は一非は數の免れない所である。上に言つた通り、第一、我が國民は櫻花に似て陽氣であり、世間的であるが、どうも我が國民性に沈着な所、深奥な所が乏しく、偉大な所、莊重な所の少いのは、一にはこれがためではあるまいか。ともすれば、我が國民に輕佻浮薄な方面のあるのも、亦これと何等か關係がありはしまいか。第二、我が國民は澹泊である。随つて、事を爲すに固執力が少く、耐忍力が乏しく、總じて堅固着實な氣風の少いのは、亦これがためではあるまいか。何事にも早く熱し早く冷める國民的弱點も、亦これに基きはしまいか。第三、日本人民は結合的である。その弊としては徒に依頼心が多く、自主獨立の精神に乏しく、團體としては甚だ強いけれども、個人としては案外に弱く、個性の發展が概して幼稚である。第四、我が國民性の一面は理

想的である。随つて、流れては頭のみ天に向つて、足は地に
つかず、人生の實際を重んぜず、事柄の結果を軽んじ、行く
べき所まで行きおほせすに止むことがあるのである。第五、
我が國民は犠牲的である。ために時としては直進専行、思慮
に乏しく、或は輕舉妄動、更に事態を困難ならしめることが
ある。これ等諸點は我が國民性の體現とも言ふべき櫻花より
聯想せられる貴い教訓である。我々日本民族が、速に富強の
實をあげて國民的生活の内容を充實し、以て世界の激甚なる
競争場裡に立つて能く優者たらんがためには、徒にその長所
に安んじてその短所を省るとを忘れてはならない。

2 櫻についての宣長の所論

花さだめの一節

本居 宣長

花は櫻。櫻は山櫻の葉赤くなりて細きが、まだらにまじりて、
花しげく咲きたるは、またたぐふべきものなく、うき世のも
のとも思はれず。葉青くて花のまばらなるは、こよなくおく
れたり。おほかた山櫻といふ中にも品々のありて、細かに見
れば一本毎にいさゝか變れるところありて、またく同じきは
なきやうなり。すべて曇れる日に見あげたるは、花の色
鮮かならず。松も何も青やかに繁りたるこなたに咲けるは、

色はえて殊に見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見
たるは、匂こよなくて、同じ花とも覺えぬまでなむ。朝日は
さらなり、夕ばえも。(玉勝間卷六)

二 春の心

1 解題

古今和歌集中から、中學校の教材として佳作と思はれるもの十
數篇を選んだ。

古今和歌集について

- (一) 巻數 二〇
- (二) 歌數 一一〇〇首 (八雲御抄)
一〇九九首 (袋草子)
一一二一首 (國歌大觀)
- (三) 部立 四季・賀・離別・羈旅・物名・戀・哀傷・雜・雜體・大歌
所御歌・東歌。この分類法は古今に始まり、以後の勅撰集は
皆この體裁をとつてゐる。
- (四) 撰者 紀貫之 御書所預
紀友則 大内記
凡河内躬恆 前甲斐目
壬生忠岑 府生

(五) 時代 淳仁天皇の天平寶字三年(この年正月二日因幡國
守の館に於て家持が集宴を催した時の歌—十九卷—を以て萬

葉集の最後とする)以後延喜の御代に至るまで、凡そ百四十
七年間の歌を集めてある。

(六) 和歌史上の古今集 萬葉集二十卷は勅撰集ではないけれ
ども、我が國の歌謡中、最も完成された形式としての長短歌
が最高の發達を遂げてゐる。完成の極致(萬葉の素朴を評し
て燕雜と考へるは大いなる謬見である)に達したものが如何
に進展するかは興味ある問題であらねばならぬ。果して長短
歌は一時中絶の形をとつて漢詩の流行となつた。その原因は
いろ／＼あらうが、目先の轉換から外國趣味を喜んだのであ
るといふことも考へねばならぬ。而して

凌雲集 (嵯峨天皇—小野岑守・菅原清公)
文華秀麗集(嵯峨天皇—仲雄王・清公・勇山文繼)
經國集 (淳和天皇—滋野貞主)

などの勅撰詩集を見るやうに至つた。かくの如く漢詩は當時
の文壇を風靡してゐたけれども、國歌の系統も一派の流れを
傳へ、六歌仙(業平・小町・黑主・遍昭・康秀・喜撰)なるものを
生んでゐる。而して一度外國趣味を經た上、更に國家主義に
歸つて、こゝに延喜五年四月十八日勅撰の命が下つた。時の
帝醍醐天皇は未だ廿餘の御弱年で、ほんたうの御志は宇多法

皇に出てゐるわけである。四人の撰者はみな卑官であつたけれども、この大任を委せられ、撰者も集中に自家の歌を多数に入れて、その所信を示した。かくて古今集は、ともかくも以下の勅撰集の座頭を占めるに至つたのである。

2 作者

便宜上歌の解釋の欄に記すこととした。

3 編纂の用意

本教科書短歌教材の體系中、本巻には古今集の和歌を据ゑた。短歌教材の編纂體系を見通すと、古今集は、その和歌史的次序からいつても、又その難易の點、及び他の教材殊に擬古的文章との相關の點から見ても、本巻に置くのが適當と考へられたからである。

4 要旨

古今集は勅撰集の第一として、古來和歌史上に特別な意義を有するものであり、苟も歌道に志すものはこの集を宗とし範として、その修業に努めたものである。本課は特に人口に膾炙する二十首足らずの例歌を擧げたのであるが、これによつて、上の如く重要視せられる古今集の

歌風の如何なるものであるかに就いて大體を知らしめ、又、これが平安朝文學のすべてに通ずる情趣の基調をなすものである等の點に關しても、適宜指導したいものである。古今集歌風の特徴は、一口に言へば優美純雅である（素樸雄健な點はない）。七五調で、句法に曲折があり、智巧的で理窟に走つた點も認められるが、自然に對し人事に對して、よく純化された優雅な趣味を歌つてゐるのである。（尙、古今集に就いては、「参考」を見られたい）

5 取扱上の注意

【本課は「古今集の和歌」と題してはないが、やはり古今集を教へる心組でかゝることが必要である。

【本課を學ぶ生徒は、既に和歌に就いても相當に數多く學習してゐるわけであるが、なほ和歌史的概念は言ふに足るほど發達してゐるのではない。それに、古今集の歌風と言つても、これを前後の歌集のそれと比較して教へるのは無理である。故に、教授者が、本集の特徴を心得てゐて、成るべくその特徴を強調して説いてやるやうにするのが第一であらうと思ふ。

【「春の心」といふ題については、特に前課の第三節と關聯

して説くのが有意義でもあり、便宜でもある。

又、この詞を含んでゐる業平の歌については、「のどけからまし」といふ七文字に注意させたい。

【何れの歌の釋義にあつても、先づ意を拂はせたいのは助詞と助動詞との意義・用法に就いてである。それらの辭をおろそかにするときは、的確な理解や十分な鑑賞は望まれないことをよく納得させたいと思ふ。

6 設問

1 次の句を特に文法に注意して説明せよ。

イ、いろこそ見えね香やはかくるゝ。

ロ、ぬるが内に見るをのみやはゆめといはむ。

ハ、しづごころなく花のちるらむ。

2 「のどけからまし」の「まし」を「まじ」と濁つてはなぜわるいか。又、「まじ」と濁つても文法上不都合なしとするためには、他の部を如何に改めたらよいか。（但し、業平の歌意と關係なしに考へること）

3 次の二首の歌の、特に面白いと感ずる點を言へ。

イ、ひさかたの光のどけき春の日に……の歌

ロ、秋來ぬと目にはさやかに見えねども……の歌

4 次の語について説明せよ。

有明の月。むらさき。ひさかたの。足びきの。

5 この内で、各自の最も好きな歌を言つて見よ。

7 釋義

西大寺のほとりの柳をよめる 僧正遍昭

あさみどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

【西大寺】 七大寺の一。奈良縣生駒郡伏見村大字西大寺にあつた律宗の名刹。古の奈良、右京一條三坊四坊に當るといふ。天平神護元年孝謙天皇の勅願によつて創立された。

【僧正遍昭】 素性法師の父。俗名良岑宗貞。仁明天皇に仕へて、左兵衛佐、兼左近衛少將、ついで藏人頭に補せられたが、天皇の崩後、哀慕の餘、出家して遍昭と改め、遂に僧正となつた。



中群を抜いてゐる。

【あさみどり……】 卷一、春歌上。

「あさみどり」は浅緑色。「ぬける」は「貫ける」。「柳か」の「か」は感動詞。

一首の意は、「薄萌黄の色絲により、をかけて、それに白露を玉としてマア貫いたとでも形容すべきであらうかナア、あの春の柳の美しいこと！」

春の夜梅の花をよめる 凡河内躬恆

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ

【凡河内躬恆】 オホシカウチノミツネ。醍醐天皇に仕へて

和泉大掾になつた。天皇が嘗て躬恆を階下に召されて、

「月をもて弓張に比する義はいかに、歌を作りてこれに

こたへよ。」と仰せられたとき、躬恆は「照る月を弓張と

しもいふことは、山べをさしていればなりけり」と詠ん

で奉り、御衣を賜はつたとかいふ話がある。歌風は貫之

に似て、貫之よりも、より細かい所に及んでゐる。いは

ゆる繊巧な方である。

躬恆の歌は、集中に最も多い。

回 氏の上に「オホシ」を附けることは、氏の本宗である

ことをあらはすのである。オ(大)・オシ(太)・オホシ(凡)

の類皆これである。これに對し、支族をあらはすには、ワ

カ(稚・若)・チヒサ(小)・サ(小)・ニヒ(新)などを用ひる。

【春の夜の……】 卷一、春歌上。

「あやなし」は、道理がたぬ、やぼである、わからぬ。

一首の意は、古今集遠鏡に「春の夜の闇といふものは、

わけの立たぬものちや、なぜといふに、梅の花が、暗う

て色こそ見えね、香がかくれるか、香はなんぼくらうて

も隠れはせぬ。色は隠れて香はかくれねば、隠れるでも

なし、隠れぬでもなし、どちらともわけの立たぬ闇ぢや

は。さて。」

渚の院にて櫻を見てよめる 在原業平

世の中にたえて櫻のなかりせば春のころはのどけからまし

【在原業平】 アリハラノナリヒラ。阿保親王の第五子。在

原朝臣を賜はつた。貞觀年中、右馬頭に任ぜられ、又渤海

海國の使を勞した。元慶年中、右近衛中將に進み、尋いで

相模美濃守を兼ね、同四年(一三四〇)五月卒した。年

五十六。世に在五の君、又は在中將などとよばれる。

國史に「體貌閑麗、放縱不拘、略有才學、善作和歌。」

と見えてゐる。その和歌は人麻呂以後の第一人者と稱せ

られる。

又膂力にすぐれ、曾て宇多天皇の御少時、共に殿上に相

撲ひ、天皇を御椅子に投げかけて、その勾欄を折つたと

傳へられてゐる。

【世の中に……】 卷一、春歌上。

「渚の院」は、河内國(大阪府)交野郡にあつた。文徳天皇の皇子惟喬親王が常に出遊なされた處である。

「たえて」は、「なかりせば」にかゝる副詞。絶対に、一向に、決して。

「春の心」は、春に於ける人の心の意。春そのものの心ではない。

「のどけからまし」は、「のどけくあらまし」の約。穩かで悠長なことであらうとの意。

一首の意は、若し世の中に櫻といふものが絶対に無いものであつたなら、春の頃の人の心はさぞ穩かで悠長なものであらう。(なまじつか櫻があるばかりに、早く咲けかしと願つたり、咲いた花の散るのを惜しんだりして気がかりで、心が落着かぬことであるよの意をこめてゐる)。

櫻を愛する心の強さを逆説的によみ出したものである。

伊勢物語には「昔惟喬のみこと申すみこおはしましけり。山崎のあなたなる水無瀬といふ所に宮ありけり。

……今狩する交野の渚の院の櫻殊に面白し。……右馬頭なる人のよめる。」として、この歌をあげてある。

櫻の散るをよめる

紀友則

ひさかたの光のどけき春の日にしづこゝろなく花の散るらむ

【紀友則】キノトモノリ。仕官して土佐掾となり、少内記に進んだが、延喜の初大内記に轉じ、六位に敘せられた。古今集の撰者の一人。但しまだ撰了しないうちに卒去したと見えて、哀傷の部にその悼歌が見えてゐる。

【ひさかたの……】 卷二、春歌下。

「ひさかたの」は、もと天の枕詞であるが、轉じては、日・月・雨・雲・星など、すべて、天象の物の枕詞に用ひられる。

一首の意は、「大空の日の光のゆつたりとした春の日であるのに、何故に、花は、このやうに落着いた心もなく、そはく／＼とせはしく散るのであらう。」

春の日の長閑けく静かな情趣がよくあらはれてゐて、古

今集中の絶唱といはれてゐる。

寛平の御時皇后の宮の歌合の歌 紀貫之

夏よのふすかとすれば時鳥なくひとこゑにあくるしのめ

【紀貫之】キノツラユキ。延喜の御代の歌人。延長中に土佐守となり、承平中任滿ちて京に歸つた。土佐日記はその歸る時の紀行である。後、木工權頭となり、天慶九年（一六〇六）、六十五歳で薨じた。或は七十九歳ともいふ。かつて勅を奉じて、紀友則・凡河内躬恆・壬生忠岑等と和歌集を撰した。有名な古今集がこれである。その序文が又貫之の筆に成つた名文である。

貫之は、當時の歌人の代表者といふべく、歌聖に列してもよいといふ位であるが、強ひて言へば、その歌風に雄大の氣分が乏しく、言葉巧みに、往々理に落ち過ぎたやうな點がある。

明治二十七年四月、從二位を追贈せられた。

【夏よの……】 卷三、夏歌

「夏よの」の「の」については、宣長は「はの意なり」と解し、景樹は「いかにしてもこのまゝにては聞えず。顯本に『は』とあるぞ正しき」といひ、廣蔭は「結句の『しの、め』へかゝる『の』にて、體言を連続せしむる意の辭ならむ」といひ、金子元臣は「夏の夜がと解して『明くる』に係けて見るが穩かであるといつてゐる。しかしこゝでは宣長・景樹等の説の如く『は』の意と解するのが自然のやうに思はれる。

「ふすかとすれば」は、寝るかと思へばすぐに。「しの、め」は、「明く」の枕詞、轉じて夜明方。一首の意は「夏の夜は、寝たかと思ふと忽ちに、時鳥の鳴く聲が一響きこえて、もう夜明けの空になつてゐるよ。」

月の面白かりける夜曉方によめる 清原深養父
夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ

【清原深養父】 キョハラノフカヤブ。歌人。豊前介房則の

子。延喜中内匠允に任ぜられ、延長の初内藏大允に進み、從五位に敘せられた。

【夏の夜は……】 卷三、夏歌。

「明けぬるを」のをは、感歎の助詞。

一首の意は、「夏の夜は短いもので、まだよひのまゝに、もう明けて了つたこと！ さてもこの夜の月は良い月であつたにマア、こんなに早く夜があけて了つては、あの月もまだ西の山の端に入つて了ふまでにはゆくまいが、さ、曉雲のどの邊に宿つてゐることやら。」
言外に餘情がある。

秋立つ日よめる

藤原敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

【藤原敏行朝臣】 富士麻呂の子。從四位上、近衛中將となつた。歌人で、能書家。延喜七年（一五六七）歿。（或は昌泰四年（一五六一）歿ともいふ）

【秋立つ日】 立秋の日。前の「春立つ日」の條参照。

【秋來ぬと……】 卷四、秋歌上。

一首の意は「秋が來たと、目にははつきり見えもしないけれど、風の音が俄にかはつてサ、これは秋が來たとびつくりした。」

いかにも立秋といふ特徴がよく詠まれてゐる。

「風の音にぞおどろかれぬる」について、文法殊に係結法を生徒に聞いて見たい。

題しらす

よみ人しらす

しらくもにはねうちかはしとぶ雁のかすさへ見ゆる

秋の夜の月

卷四、秋歌上。

「はねうちかはし」は雁と雁とが互に羽を相交へること。

一首の意は「はるか高い白雲のある大空のあたりを、羽と羽とを打ち交へて、つれだつて飛び渡る雁の一系列の、その鳥の數さへよく見えるほど、よく澄んで明らかな秋の夜の月であることよ。」

仙宮に菊をわけて人の到れるかたを 素性法師

ぬれてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年をわれは經にけむ

【素性法師】 ソセイホフシ。僧正遍昭の子。姓は良岑、名は玄利。清和天皇に仕へて左近衛將監に任ぜられた。後父に勤められて兄と共に出家し、雲林院及び石上の良因院に住した。昌泰元年宮瀧遊覽の時、良峯朝臣を改めて良因朝臣と賜はつた。住所名に因んだのである。延喜六年二月、召されて襲芳舎に於て御屏風を書し、同九年十月、召されて御前に於て御屏風を書いた。光榮の極みである。歿年未詳。

【仙宮に云々】 「仙宮」は仙居。仙人の住みか。「かた」は、こゝでは「形」ありさまの義。題の意は、仙人の住まふ處へ菊の花をおしわけていつたありさまを詠んだ、といふのである。

【ぬれてほす……】 卷五、秋歌下。

「山路」とは仙境に到る道。

一首の意は「わしは今、ちよつとばかり仙境に入つて來

たので、その道すがらおしわけた菊の露で濡れた衣服を

干してゐるやうな事だが、さて、その露の間即ち暫時の間に、いつとなく人生の千年も経てしまつたのかしら。まあ、何といふ、あつけないことやら。」

述異記に「信安郡石室中、晉時樵者王質、逢三童子棋。與質一物。如棗核。食之不飢。童子曰、汝斧柯爛矣。質歸郷閭、無復時人。」

とあるによく似た想である。

題しらす

讀人しらす

ふる雪はかつぞ消ぬらしあしびきの山の瀧つ瀬おとまさるなり

【ふる雪は……】 卷六、冬歌。

「かつ」は副詞。事の彼此に互れるときにいふ語。かくかくである一方にかく／＼であるといふ場合に用ひる。

「足びきの」は山の枕詞。

一首の意は「山は雪が降つてゐるやうだが、それが一方では消えてしまふらしい。それでこそ、その雪どけの水

でこんなに山の瀧つ瀬の音が一層高まつてくるのだ。」

大和國にまかれりける時に雪の降りけるを

見てよめる

坂上是則

あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里にふれるしらくゆき

【坂上是則】 サカノウエノコレノリ。父祖は詳かにわからぬ。延長二年從五位加賀介となつた。

【あさぼらけ……】 卷六、冬歌。

朝のひきあけに、有明の月が照つてゐるかと思はれるほど、吉野の里には雪が眞白に降つたこと！ 何といふ美しさだらう。

「有明の月」とは、まだ空にありながら夜が明けける月といふ意で、夜明けの空に残つてゐる月をいふ。

年のはてによめる

春道列樹

昨日といひ今日とくらして飛鳥川流れて早き月日なりけり

【春道列樹】 ハルミチノウツラキ。傳は詳かでない。大日本

人名辭書には、古今集打聽を引いて、次のやうに記してある。

「新名宿禰の子なりといへり。また、延喜二十年壹岐守に任ぜらる。時に文章生なりきと。西海道の掾には、文章生のなれる例なり。殊に壹岐守は六位のなれる例なれば、さもあるべし。春道宿禰は貞觀六年九月、右京の人因幡權掾正六位上物部門起に姓を春道宿禰と賜ふ。今も大和國何郡とかやに春道村ありて、そこに春道といふ社もありといふ。その地より出でし氏なるべし。列樹は古今集作者の一人なり。」

【昨日といひ……】 卷六、冬歌。

「昨日・今日・明日と、うか／＼暮してゐるうちに、もうはや年の暮になつてしまつた。まるで飛鳥川の流れの如く早くたちゆく月日であるなあ。」

「飛鳥川」の川の名に明日を言ひかけた語。そして隱喩法をも兼ねてゐる。

「飛鳥川」は大和國(奈良縣)にある川。源を同國高市郡高市村大字畑の山中に發し、大字祝戸(イハヒド)で細州

を合はせ、北流して飛鳥村を過ぎ、北葛城郡河合村に至つて大和川にそゞ。淵瀬の定めなきを以て聞え、古來多く和歌に詠せられてゐる。

人の馬のはなむけにてよめる 紀貫之

をしむからこひしきものを白雲のたちなむのちは何ごちせむ

【馬のはなむけ】 昔は人の旅立つ時には、親しい人たちが酒食を調じて來て別れのさかもりをし、さてその人を馬にのせ、馬の鼻をこれから出立つ方角にむけてやる慣はしであつた。それからして「馬のはなむけ」又は「はなむけ」といふのが、旅立つ人に對する餞別の意、又は餞別を贈る意に用ひられるに至つた。こゝの「はなむけ」は別れの酒宴の席上における「はなむけ」である。

【をしむから……】 卷八、離別歌。

「をしむから」の「から」は、「故に」「ために」の意。

「白雲の」は「たち」にかゝる序の詞。

一首の意は「あなたとの別れを惜しく思ふが故に、今すでに戀しく思はれてならないのであるが、いよくこゝ、

を出發して遠方へ行かれた後に、私はどんな心持がするでありませうか。さぞや寂しさにたへぬことでせう。」

大江千古が越へ罷りける馬のはなむけによめる

藤原兼輔朝臣

君がゆくこしの白山しらねどもゆきのまに／＼あとはたづねむ

【藤原兼輔】 フヂハラ カネスケ。右近衛中將利基の六男。從三位中納言に至つた。承平三年(一五九三)二月薨。年五十七。加茂川の堤にゐたので、堤中納言といふ。堤中納言物語は、彼の著といはれてゐたが、近時その誤なることが認められてゐる。

【大江千古】 オホエ チフル。古今和歌餘材抄に「千古は音人(オトノド)の男なり。」とある。その傳未詳。音人は博學重文、清和天皇の御代。累進して從三位、參議、左衛門督を兼ね、檢非違使別當に補せられた。

【君がゆく……】 卷八、離別歌。

「越」(コシ)は、越路(コシチ)、越の道、越の國の略、

北陸道の稱。但し、おもに越前(越の口)、越中(越の中)越後(越のしり)の三國を總べていふ。

古今集、釋旅に「消えはつる時しなれば、越路なる白山の名は雪にぞありける」

「白山」(シラヤマ)は、普通にハクサンといふ。加賀飛驒の國境に跨る高山。白山火山脈の主峯をなす休火山で、富士山・立山と共に日本三名山の一。火口壁の上には、大汝(オホナムチ)嶽・劍ヶ峯・御前嶽の三峯が環狀に相連る。中にも御前嶽は最も高く(八九一七尺)、頂上に國幣中社白山比咩神社がある。火口原には綠ヶ池、千蛇池等の火口湖がある。彌陀ヶ原は御花畑の美を以て知られてゐる。一首の意は、「君が行かれる越の國には、音に聞えた白山といふがあるさうだが、どんな山か知りはしないけれども、ともかく、雪の多い國だと聞いてゐるからには、君が行かれたその雪の跡を尋ねつゝ、私もおあとから参りませうはい。とても別れが惜しいゆゑに。」

「しら山」に「知ら」をかけ、「雪」に「行き」をかけた。

題しらす

讀人しらす

都いでて今日みかの原いづみ川かは風さむしころも
かせやま

【都いでて……】 卷九、釋旅歌。

【都】は、京都。

【みかの原】は、瓶原と書き、山城國相樂郡泉河の北岸。
この地は元明天皇以來離宮を置かれたといふ處。

【いづみ川】(泉川)は、山背川ヤマシロガハの一名。後世専ら木津川といふ。水源は伊賀にあつて、伊賀川・名張川といふ。二水は相樂郡の東境大河原で相會し、西に流れ、木津の北に至つて北折し、綴喜郡八幡に至つて淀川に會する。

【かせ山】(鹿背山)も山城國相樂郡木津村・加茂村の間にある一座の丘陵で、泉川に臨んでゐる。

一首の意は「今日都を出て、瓶の原・泉川のほとりを通つてゐると、なか／＼川風が寒い、何と、向ふに見える鹿背山上、着物を一枚貸しては呉れまいかね。」

【かせ山】は山名に「貸せ」の義をかけたのである。

あひ知れりける人の身まかりにける時によ

める

壬生忠岑

ぬるがうちに見るをのみやはゆめといはむはかなき
世をもうつゝとは見ず

【壬生忠岑】 ミブノタマミネ。安綱の子。初め藤原定國の隨身、後左近衛番長・右衛門府生・御厨子所預・攝津大目に累進し、六位に叙せられた。

【みまかる】 この世を去ること。死去。

【ぬるが内に……】 卷十六、哀傷歌。

一首の意は「寝てゐる間に見るのばかりが夢といはれようか、このやうにはかない世は現實とは思はれぬ、全く夢の如くである。あゝ何某さんの逝去だとして、實に夢といふより外はないではないか。」悲哀の情が溢れてゐる。

題しらす

読人知らず

むらさきのひともとゆゑに武藏野の草はみながらあ
はれとぞ見る

【紫のひともとゆゑに……】 卷十七、雜歌上。

【紫】は草の名。紫草科、紫草屬の多年生草本。高さ二尺



餘。葉は長卵形で互生。花は莖の上方に咲く。小形で白い。根は乾かして紫色の染料に供する。

【武藏野】は、廣義では關東平野の總稱、狹義では武藏

國多摩・入間兩郡に跨れる府中・川越間の地。こゝは狹義の方であらう。(尙、奈良の春日野をも武藏野といふとか。但しこの歌は、それを詠んだのであるまい。)

【みながら】は、皆ながら、皆ことごとく。

一首の意は「紫草の一本をあはれゆかしく思ふほどに、廣い武藏野に生えてゐる草の有りたけが皆あはれゆかしいものに思ひなされる。」といふので、ゆかしみの深い歌である。

餘材抄には「紫は色のうるはしき草、武藏野は限りもなく廣く、縁も多き所なれば、思ふ人ひとりかゆゑに末々までもむつまじといふことをたとへてよめるなり。」とある。

題しらす

読人知らず

われみてもひさしくなりぬすみのえのきしの姫松い
くよへぬらむ

【われ見ても……】 卷十六、雜歌上。

【すみのえ】は今の「住吉」(スミヨシ)で、大阪市住吉區なる、墨江津の地。「姫松」は、通例は小松・若松をいふのであるが、こゝはたゞ美稱的接頭語として「姫」を添へたまでであらう。

一首の意は、古今集遠鏡に「この住江の岸の松どもは、おれが見きたつても、もう久しうなるが、それよりまへ、始めからはいかほど年を経たことやら、さだめて、きつう久しいことであらう。」とある。

こんな老松であるに、なほわか／＼しい姫松ともいふべく見るといふ義に取つてもよからう、さすれば姫の字が一層生きてくる。即ち、増鏡の「おどろの下」にある、「あり経けんもとの千年に古りもせで、わが君ちぎる嶺の若松」の「若松」の如き意味に見てよいかと思はれる。

8 参 考

古今集の歌風

(一)主として萬葉集・新古今集との比較の上から、

昔から萬葉・古今・新古今といつて我が國和歌の主な類型を示すものと考へてゐる。この考へは大體に於て誤りのないものであるが、その三つの各々の本質と三者の間の關係相違が分明になつてゐない憾がある。萬葉の素朴を評して蕪雜と考へるのは既に謬見である。(この點に關しては國語と國文學第二卷第十一號以下所載、齋藤清衛氏の論文「爛熟期の藝術としての萬葉集を參考されたい」)それかといつて、古今集乃至は「新古今集」を完璧洗煉の詠藻であると考へることも謬見といはねばならぬ。然らば萬葉・古今・新古今の三つの上の本質的相違はどこにあるか。私は之を

(イ)主觀のあらはれ方

(ロ)主觀と對象との關係(うたひ方見方、感じ方)

(ハ)美觀の相違

(ニ)外的リズムと内的リズム……表現の方法

などの諸點から考へて見ようとおもふ。

(イ) 主觀のあらはれ方に就いては、萬葉は直接的・無意識的で

あるに反し、古今は間接的・有意識的である。新古今は古今から萬葉に歸つて行かうとする傾向があるが、兩者は似て非なるものである。主觀とは、歌はうとする感じである。有意識的主觀とはその感じをまづ心のうちに有して居り、それを如何に表現しようかと考へることである。それゆゑこれを間接的といふのである。萬葉に於ては感じと意識とが二分してゐない爲に、その表現も直接的となるのである。即ちある感じを自分で意識して之を掌中に弄ぶことがないから、感じと表現との間に不純なものがないことを稱して素朴といふのである。萬葉にはこの意味の素朴はあるが、未完成蕪雜といふ意味の素朴はない。人麿の歌は字句の豊富なのと用語の自在であるとの點に於て、赤人の歌は洗煉に洗煉を重ねた感じ方と表現の方法とに於て爛熟といふ意味があつて、決して蕪雜といふ意味はない。

次に古今集は先づ遊離した感じがあつて、それを色々に弄んだ擧句、表現するといふことになつてゐる。氣持を弄ぶといつても、遊離といふ意味ではなく、いつも優越しがちな主觀に立て籠つてゐて、何事もそこから感じるといふのである。要言すれば、沈潛といふことである。新古今になると、その沈潛は一見消失し、遊離した主觀はなく、専ら外象美と形式

美とをねらつてゐるやうであるけれども、新古今に特有な名詞止めは、その實沈潛に外ならぬのである。かく一方に沈潛の氣持を持ちながら、他の一方に力めて外象美を探して行くところに、萬葉・古今とはちがつた形相的なところがあるのである。

(ロ) 主觀と對象との關係に就いていへば、主觀を直接表現することにあせつてゐる爲に、外象の描寫が疎略になるか、觀念的となるか、又は非存在的な構圖になつてゐるかすることがあるし、反對に外象の表現に忠實なことが即ち主觀の雄辯的表現になつてゐることがある。この兩者の相違は、(イ)主觀のあらはれ方の問題から出發してゐるのであつて、そこに又萬葉主義と非萬葉主義との儼然たる區別がある。即ち寫生主義を以て萬葉と非萬葉とを分つ原則となすことになるのである。しかし、對象は必ずしも外面的事相に限らず、内面的事相も立派に歌の題材となる。随つて、寫生といふことも花鳥風月に對してのみ存するわけのものではない。たゞ内外の事相に即して忠實に表現するといふ態度の最も純粹無垢なもの、それを萬葉主義といふべきである。然るに古今集に於ては、優越した主觀の爲に外象が累され、新古今集に於ては、既有的主觀の満足を第一とするために、外象そのものの生命

が失はれてゐるために萬葉主義とちがつたものがある。

次には意識と對象との距離の問題、兩者の間の引力度、兩者の面接面などが重要な條件となつて、萬葉主義と非萬葉主義とを區別するのである。

(ハ) 美觀の相違に就いて著しい事柄は、現象そのものの無味無臭の表現に無限の美を感じるものと、現象といふよりは材料の配合に美を感じるものとが、萬葉と非萬葉主義との差別になる。又感じの歌と意味の歌といふことも考察して見ねばならぬことである。意味とは、事件といふ意味よりはむしろ作爲的美をいふのである。

(ニ) 外的リズムと内的リズム。萬葉が隱喩・疊語・反覆語・頭韻など音楽的要素を多量に持つてゐるに對し、古今が主觀の流れたリズムを持ち、新古今が材料の配列模様の上にリズムを持つてゐることは、三者を區別する有力な條件となつてゐる。

○ 註釋書

古今餘材抄	釋 契沖
古今集打聽	賀茂眞淵
續萬葉論	
古今集遠鏡	本居宣長

古今集正義 香川景樹
古今集評釋 金子元臣

9 挿 圖

傳記實之筆蹟

いしやまへまうでけるととき、おとばやまのもみぢをみて
きのつらゆき
あきかぜのふきにしひよりおとばやまみねのこずゑもい
ろづきにけり

〔いしやま〕石山。石山寺。西國三十三所第十三番の札所。滋賀
縣大津市石山にある。天平勝寶年中僧良辨の開基。本尊は如
意輪觀世音。承曆二年（一七三八）火災にかゝり、建久年中再
興した。後、淀君が更に修築を加へた。主要の建築物は、本
堂・多寶塔・大門・鐘樓等である。本堂の東方なる源氏の間
は、紫式部が源氏物語を書き始めた所だと言傳へてゐる。觀
月の名所。その秋月は近江八景の一。

〔おとばやま〕音羽山。京都市東山區にある。逢坂山以南の大嶺
で東は笠取山に連なり、山城と近江との國境をなしてゐる。
名高い歌枕の地。

一首の意は「秋風が吹きはじめたその日から、音にきこえて

ゐる音羽山の峯のこずゑも、いろづいてきたはい。」

三 花を惜しむ

村 田 春 海

1 解 題

作者が二三の雅友と伴つて、文靈の友羽生田氏の邸をおとづ
れ、相共に歌をつくして散る花を惜しむの情を飾した文で、「琴
後集」卷十に、「花を惜しむ記」と題して掲げてある。

琴後集 コトジリジフ 十五卷

琴後の翁村田春海の歌文數千百篇を編輯次第したもので、卷一
から卷九までは歌、卷十以後は文である。文化七年（二四七〇）
庚午十月の自序、同月清水濱臣の序、同九月陸奥葛賀の漢文の
序が巻頭に掲げてある。

なほ琴後の名の由來を知るため、作者の自序を左に示さう。

自 序

昔父の世にいますがりし時は、遊の道にふかう心よせたまへ
りしまゝに、吹きもの、弾きもの、なにくれの器ども、家に
あまた傳へたるを、としごろたび／＼火に逢ひて、今は多く
うせもてゆきて、たゞあづま一つなむ、これをのみ昔しのぶ

るくさはひには思ひたる。今年、草の庵をあらためつくり
て、小さきふせやを、おのが常に住みならさむところと定む
るにつけて、おもひけるは、かのあづまこそおのが家の實な
れ。いかでそれに所えさせて、そのかたはらにこそおきふし
すべけれ。われ琴ひくことはならはねど、絲なきをまさぐり
て思をやりしためしもあるばとて、これをわがかたはら人に
て、さてことがみに、硯一つ、火とり一つ、琴しりに、づし
一よろひをすゑて、年ごとのことはどもを入れたり。この
ごろおのが心知りの人々、詣で来ていひけらく、年ごろもの
したまへる言の葉どもはいかにしたまふぞ、かきあつめたま
はましかば、われら筆たすけまらせむといふ。そはうれし
きことなり。さるはつたなき言の葉を、人なみに世にのこし
はべらむことは、はづかしきわざにははべれど、あまた年お
もひをよせ心をこめしものを、いたづらになしはべらむはほ
いなし。ともかくもしかるべからむやうにとりなし給はむこ
そうれしけれと答へければ、人々かのづしより取りいで、か

きあつめもてゆく。さて名をばいかにといふに、すなはち琴後とこそいふべけれど、それまきのはしつかたにぞかきつけさせたる。

文化の七とせかみな月ついたちの日

琴じりの翁

2 作者

村田春海 ムラタ ハルミ

近世の江戸の國學者。姓は平、通稱は平四郎。字は大觀、錦織家（にしごりのや）又琴後翁と號した。春道の次子。兄春郷と共に賀茂真淵に従つて古學を修めた。和歌をよくし、近世和歌史上、加藤千藤と共に江戸派の代表者と稱せられてゐる。又心を漢籍に潜め、好んで詩文を作つた。初め服部仲英に學び、後鶴澤士寧に従ひ、京都に出づるに及んで、皆川淇園を師とした。性豪放、財利に淡泊で、遂に家産を失ふに至つたが、毫も意に介せず、ひたすら心を學問に用ひ、老いて益々その精を研めた。眞淵の古言の教を奉じながらも、その道とするところには必ずしも服せず、獨創の見を持してゐた。又筆札をよくした。その詩文等を録する筆致は來元章に髣髴たるものがあつたといふ。文化八年（二四七一）二月十三日歿した。年六十六。著書に假字拾要・歌語・和學大觀・五十音辨誤・假字大意抄・字鏡考證・琴後集前後篇・神道志・不問語・織錦雜記・仙語記・筆のさが・椿太詣記などがある。

3 編纂の用意

時は今仲春、落花の續紛として枝を謝する頃である。たとひ風流の心なきものも、これを見て惜春の情を催し、散る花をなつかしむ思なきを得ない。本課をこゝに採つたのは、これが精讀によつて、生徒各自の心中に潜在せるかゝる風雅の情を誘發し、以て彼等の精神生活に必要な修養をつましめんが爲に外ならぬ。若しそれ本課の文に至つては、純雅にして平明、眞に擬古文の粹ともいふべきもの。上級學校に入らうとする生徒に取つては、どうしても一讀再讀しておかねばならぬ佳章である。本課を採擇した他の一面の理由は、實にこゝにある。よろしくこれを味讀心解せしめて、如上の目的に副はしめられたい。

4 要旨及び概説

長雨の霽れた或夕、花の名残を見ようと友に誘はれて、かれこれ何處に出かけようかと話しあひの上、互の親友である羽生田氏の住居を叩かうといふことになつて、打

連れゆく。その住居は、木立・庭山・任せ水・垣の外の景色までまことにめづらからで、わざとならず植ゑられた花の木も名残を見せがほで、すべてが結構である上に、あるじの歡待も一方ならぬものがある。かくて家路を忘れるまでに、浮世を外なる心地に主客打語らひ、晝に歸る鳥に別れを惜しみ、入相の聲に逝く春を感じつゝ、月の出を待つて、なほも木かげで花の散るまで見ようといふのである。

5 取扱上の注意

例の擬古文であるが、筆は自在を極めて達者なものである。最初、友の來訪を受けて、出かけて行く場處について互に意見を言ひあふところが、一寸生徒には取りつきにくいかも知れない。けれども、落着いて讀んで見ると、意味がよく透徹してゐることがわかる旨を豫め告げて、讀解に努めさすべきである。

いよゝ／＼羽生田氏の住居へ行くことになるが、文の上には段落なしで、直にその住居の敘景に筆が進んでゐる。それから主人の喜んだ様子を一言し、楽しい主客の語ら

ひを描き、一首の歌を添へて文を結ぶまで、やはり一続きである。けれども何等の無理を感じしめないのみか、寧ろその短い行文に内容が豊富に盛られてゐることを思はせられる。

6 設問

- 1 「我が相思ふ人々」とあるが、作者の友は幾人くらゐ來たと思はれるか。（二人か三人）
- 2 「かのやむことなきはの云々」の「かの」は前にある友の言葉の何れを指してゐるか。
- 3 「かの世離れたるあたりは」とは、どこを指したのか。
- 4 「羽生田のぬしの住居」といふは、大體どんな處にあると思はれるか。どうしてそれがわかるか。
- 5 「葎生」の如く、「生」を下につけた語をあげよ。
- 6 次の語の意義を問ふ。
心ゆくかた。情おくるゝかた。そのの河づら。つきづきし。入相の聲。いさ給へ。

7 釋義

【つれづれと】 爲すこともなくてさびしいさまにいふ語。徒然。

枕草子卷二に「おのがつれづれと暇あるまゝに。」

【降りくらす】 雨や雪などが降りつゞいたまゝで日の暮れること。

源氏物語の帚木の巻に「つれづれと降りくらすして、しめやかなる宵の雨に。」

【長雨】 ナガメ「ナガアメ」の略。

蜻蛉日記の中巻に「五月……ながめになりぬれば、草ども生ひこりてあるを。」

【やうく】 「やうやく」の音便。しだいに。漸次。

枕草子卷一に「春は曙やうくしるくなりゆく。」

【霽間】 ハレマ。雨や雪などの止んでゐる間。

新六帖卷二に「しづのをは茂る稲葉の五月雨にはれ間を見てや田草ひくらむ」

【かゝるゆふべをたゞにやは過ぐすべき】 かやうな夕をむだに過ごしてよからうか、むだに過ごすべきではない。

「たゞ」は徒。何の意義もないこと。無意義。いたづら。あだ。無益。むだ。

【春のゆくへをも偲（シノ）ばむ】 春の暮れて行つた方も慕ひなつかしまう。

「ゆくへ」は、行方。進み行く先。行つた方。

萬葉集卷十五に「さ夜ふけてゆくへをしらに。」

【偲ぶ】とは、思ふこと。慕ふこと。

【春のゆくへ】は教科書の頭註にある歌の一句を採つたもの。この歌は

古今集の春下に「心地そこなひて煩ひける時に、風に

あたらしとて、おろしこめてのみ侍りけるあひだに、

折れる櫻のちり方になれりけるをよめる 藤原のよる

かの朝臣」といふ詞書がして見えてゐる。

【垂れこめて】は簾や几帳などを垂れて、内にこもつて。

一首の意は「自分は病氣ゆゑに、簾や几帳など垂れこめて、引つこもつてのみゐて、春の月日の過ぎゆく方も一向知らぬ間に、かねてから咲いたら見ようものと、折

角たのしみにして待つてゐた櫻さへも、はやこのやうに

散り方になつてしまつたはい。」

【藤原のよるか（因香）の朝臣】は、高藤の女と傳へられてゐる。貞觀中從五位下に敘せられ、寛平九年十一月從四位下掌侍となり、後、典侍に進んだ。古今集・後撰集の作家。

【花の名残をも見ばや】 散り残つてゐる花を見たいものぢや。

【名残（ナゴリ）は、（一）物事が過ぎ去つた後、なほその氣（ケ）の残ること。又、その氣。（二）物事の残つてゐること。又、その物事。もれ。残り。残餘。こゝは散り残つてゐる花をさしていふ。

【いざ】 人を誘ふとき、又は心がいさんで物事を爲しはじめようとするときに發する聲。いで。さあ。どれ。どりや。



伊勢物語に「栗原のあねはの松の人ならば都のつとにいざといはましを。」
【葎生の門おどろかす】 むぐらの生ひしげつてゐるあばらやをたづねて来て、その

主人をおどろかす。

【葎生の門（ムクラフのカド）は、むぐらのしげつてゐる貧しい家。

【むぐら】は、山野に自生する雜草の名。かなむぐら・やへむぐらなどの總稱。

萬葉集卷四に「いかならむとときにかいもを葎生のいやしき宿に入りませなむ。」

後拾遺集の春上に「櫻花さかりになれば古里の葎の門もさゝれざりけり。」

【相思ふ人々】 互に親しみあつてゐる人。互に氣の合つた人々。

【いづこか心ゆくかたならむ】 どこが氣のすゝむ方だらう。どこへ行つたらおもひがかなふであらうか。

【心ゆく】は、氣がすむこと。心に満足すること。氣がすむこと。

源氏物語の紅葉賀の巻に「かしこまりたるさまにて、御いらへも聞えたまはねば、心ゆかぬなめりと、いとほしくおぼす。」

【御館】ミタチ。オンヤカタ。身分ある人の邸宅の稱。

【御園生】ミソノフ。身分ある人の庭園の稱。

「園生は」、蔬菜・果樹又は花卉などを植ゑる一構の地。園。には。

新編古今集の雜下に「代々經ぬる末葉なりとも吳竹の園生の色はかはらずもがな」

【けはひ】おもてにあらはれるやうす。けしき。そぶり。枕草子卷二に「人のけはひあれば、きぬの中より見るに。」

【見どころ】見るべき點。見るぬうち。見甲斐。

源氏物語の帚木の卷に「おのがじし、怨めしき折々、待顔ならむ夕暮などのこそ見どころはあらめ。」

【河づら】川面。(一)河のおもて。(二)かはべ(河邊)。ここは、(二)の意。

宇津保物語の俊蔭の卷に「釣り、……いとほしげなる兒の大なる河づらに出でてするに。」

【散りのこる陰をや尋ねまし】散り残つてゐる花の陰をたづねて行かう。

【いで】人を誘ひ促すとき又は思ひ立つときにいひ出づる聲。どれ。

【やむごとなききは】高貴の御身分。

「なむごとなし」は、たいそう貴いこと。高貴なこと。

「きは」は、身のほど。身分。分際。

源氏物語の桐壺の卷に「いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」

【塵もするじとおきてたらむは】塵一つも散らすまいとして掃除のよくゆきとゞいてゐる庭は。

「おきつ」は、「掟つ」の字をあてる。おきてをたてること。定めること。

宇津保物語の國讓の卷下に「みづしどころ、大殿の具、いとよくしおきてたり。」

【春風の心もたどらで】春風のきもちを考へないで。

「たどる」とは、物事のすぢみちを知らうとして尋ね思ふこと。その事をさぐり知ること。穿鑿すること。

源氏物語の朝顔の卷に「物の心を深くおぼしたどるに、いみじう悲しければ。」

【あながちに】強ひて。無理に。一概に。むやみに。

【かき拂ひなどすめるが】はらひ除きなどするやうだが。

「かき拂ふ」とは、とり去ること。拂ひのぞくこと。

源氏物語の蓬生の卷に「じげき草、蓬をだにかき拂はむものとも思ひより給はず。」

【目やすきわざ】見苦しからぬわざ。見にくからぬこと。

「目やすし」とは、見て難のないこと。見ぐるしくないこと。

宇津保物語の嵯峨院の卷に「いと目やすき人にぞありける。」

【かへりては情おくるゝかたや云々】却つて、おもむきのおとるやうなことが、どうして無からうか。(反語)

「情(ナサケ)は、風情(フゼイ)。おもむき。趣味。興(キョウ)。」

徒然草に「雨にむかひて月を戀ひ、垂れこめて春の行方知らぬも、なほあはれになさけふかし。」

【世離れたるあたり】浮世から遠くかけはなれてゐる奥山里など。

「世離る」とは、世間を遠ざかること。浮世を離れること。

「あたり」は、邊。地方。

源氏物語の帚木の卷に「深き山里、世離れたる海べりなどに這ひ隠れぬかし。」

【春のあはれ】春のおもしろみ。

「あはれ」は(一)物に感じて歎息する聲。あゝ。(二)感賞にあたりすべきこと。喜怒哀樂に通じていふ。こゝは(二)の意。

徒然草に「もののあはれは秋こそまされと人ごとにいふめれど、それもさるものにて、今ひとときは心の浮立つものは春の景色にこそあめれ。」

【多かめれど】「多くあるめれど」の約。多くあるやうに見えるけれども。

「めれ」は、推量の助動詞。めり(終止)、める(連體)、めれ(已然)と活用する。

【霞隔つる道のそら】霞をへだててゐる遠い道中。

「道のそら」は、道の中途。途中。赤染衛門集に「玉ぼこの道のそらにて消えにせば、う

き事ありと誰か告げまし」

【暮れかけては云々】最早日が暮れかけてゐる今となつては、どうして、(そんな遠いところへと)思ひたうぞ。(反語)

【あひむつばへる】互に睦びあつてゐる。互に親しみあつてゐる。

【むつばふ】は、「むつぶ」の延音。むつまじくすること。親しむこと。仲よく交ること。

【羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ】羽生田氏の住居こそまことなつかしい。

【羽生田のぬし】は、名は貴長。傳未詳。

【ゆかし】は、何となく慕はしいこと。なつかしいこと。

【いざ給へ】さあ、共に行きたまへ。さあ来たまへ。枕草子卷五に「いざ給へかし、内へなどいふ。」

【うちつらねて】うち連れて。連れだつて。

【處せき巷の塵】トコロせきチマタのチリ。狭苦しい町の通りから立ちあがる塵。

【處せし】は、「處狭し」の義。場處のせまいこと。

【巷】は、(一)道のわかれるところ。つじ。(二)みち。町どほり。(三)ところ。場所。こゝは(二)の意。

【中垣】ナカガキ。兩家の中間にある垣。中の隔ての垣。土佐日記に「中垣こそあれ、一つ家のやうなれば。」

【奥まりて】奥深くて。

源氏物語の若紫の巻に「奥まりたる山住もせで。」

【木立ものふりて】立ちならんでゐる樹木が何となく古びてゐて。

【木立(コダチ)】は、生ひ立つた木。たちき。

源氏物語の明石の巻に「作りなしたる心ばへ、木立・立石・前栽などのありさま。」

【ものふる】は、何となく古びること。ふるくなること。

源氏物語の若紫の巻に「年ごろよりもこよなう荒れまさり、廣うものふりたる所。」

【霞のたゝすまひたゝならず】霞の様子が、尋常一様でない。い。

【たゝすまひ】は、立つた様子。轉じて、やうす。ありさま。おもむき。

源氏物語の桐壺の巻に「もとの木立、山のたゝすまひ、面白き所なるを。」

【たゝならず】は、なみならず、普通のさまならず、様子ありげなり、などの意。

【みやび】「雅」の字をあてる。優にあてやかなこと。風流。風雅。

伊勢物語に「昔人はかくいちはやきみやびをなむしける。」

【なべて】おしなべて。ひつくるめて。すべて。一般。

古今集の冬に「梅の花それとも見えす久方のあまぎる雪のなべて降れよば。」

【島好みてふ人】庭の泉水や築山などをいちりまはすものすきの人。

【島】は、(一)四方を水で囲まれた土地。(二)ある区域をなす土地、(三)泉水や築山などのある庭。こゝは(三)の意。

【てふ】は、「といふ」の約。

伊勢物語に「おもしろき石……島好みたまふ君なり。この石を奉らむ。」

【心ならひ】心習。心の習ひとなること。ならばし。習慣。

源氏物語の夕顔の巻に「かのさしつどひたるすまひの心ならひならむとをかくおぼす。」

【はひりの方】家の入口の方。

【はひり】は、邸宅の入口。門から家までのところ。はひりぐち。

宗良千首の春の部に「我が門のはひりに立てる青柳の絲はなびけどくる人もなし。」

【さながら】(一)そのまゝ、そつくり。(二)みなながら。すべて。まるで。こゝは(二)の意。

宇津保物語の菊宴の巻に「四位五位數多く、はらからの公達さながら参りたまへり。」

【なづな】薺。十字花科、薺屬に屬する草。葉はたんぽ

ぽに似てゐる。春の頃四瓣白色の小花を開き、穂状花序



に排列する。初生のものは七草の一に數へられ、食用に供せられる。ぺん／＼ぐさ。さみせんぐさ。

【いとつき／＼し】たいそう似合はしい。

「つき／＼し」は、似合はし、似つかはし、ふさはし、相應してあり、などの意。

枕草子卷一に「いと寒きに、火など急ぎおこして、炭もてわたる、いとつき／＼し。」

【垣根】垣の根もと。轉じて垣。

萬葉集卷十に「うぐひすのかよふ垣根の卯の花のうきことあれや君が來まさぬ。」

【田處】タドコロ 田のあるところ、田地。

【堰き入れたる水】流れをせきとめて充たした水。

源氏物語の帚木の卷に「中川の家なむこのごろ水堰き入れて涼しきかげに侍る。」

【時知り顔】我こそ時を知つてゐるぞといふやうに得意なかほつき。時を得がほな様子。

風雅集の雜上に「おもふことはるとも身にはおもはぬに時しり顔に咲ける花かな」

【をかしく】こゝは「おもしろく」の意。

【畔傳ひの道】田の畔をあちこちと傳つてゆく道。

「畔」(クロ)は、田の中の境界。あぜ。

夫木抄卷六に「誰れならむあら田の畔にすみれつむ人は心のわりなかりけり」

【かた／＼に】あちこちに。あなたこなたに。

【花の木】花の咲く木。花木。花樹。

古今集の春下に「花の木も今は掘り植ゑじ春たてばうつろふ色に人ならひけり」

【わざとならず】ことさらめかぬこと。わざとらしからぬこと。自然のまゝらしく見せて、故意にしたやうでないことにいふ。

【夕日にもてはやされたる色香】夕日に照りはえてゐる櫻の花の色やかをり。

【雨のなごり覚えて】雨後のおもむきを帯びて。雨後の餘情を含んで。

【心ありげに】いかにも心に思ふことがありさうなさま。仔細がありさうな様子。心ありがほ。

謡曲、弱法師に「いひ捨つる言の葉までも、心ありげに聞ゆるぞや。」

【今日來すばとぞ見えたる】今日來て花を見なかつたら、明日はもう雪と散つてしまふだらうといふやうに見えた。

「今日來すば」は、頭註にある歌の一句を取つたもの。この歌は、古今集の春の部に「櫻の花のさかりに、久しくとはざりける人のきたりける時によみける。讀み人知らず。あだなりと名にこそたてれ櫻花年にまれなる人も待ちけり」の「かへし」として、在原業平朝臣のよんだもの。「雪とぞ降りなまし」は、雪のやうに降つて散つてしまはう。「消えずはありとも」は、たとひ、消えうせないで存してゐようとも。「見まじや」は、見ようか、見はしない。(反語)

一首の意は、「私が、今日尋ねて來たからこそこの櫻を花と見ることが出來たのだ。若し今日來なかつたら、明日はもう雪のやうに散つてしまはう。それもまことの雪でないから、假令消えずにあるとしても、もとの花と見え

ようか、見えはすまい。」

「在原業平」は平城天皇の皇子河保親王の第五子で、行平の弟。果進して右近衛中將となつた。よつて世に在五中將といふ。藤原氏の專横を憤り、惟康親王を立てようと謀つて成らなかつたと傳へられてゐる。歌に堪能で、東國に遊んだをりの一名にしおはばいさことはん都鳥、わがおもふ人はありやなしや」の歌は人口に膾炙してゐる。伊勢物語は業平の詠歌をもととして出來た歌物語であるといふ。元慶五年(一五四〇)薨。年五十六。

【待ちよろこべるけはひしるくて】われ／＼のおとづれたのを喜んだやうすが明白にわれ／＼の目にも見えて。

「けはひ」は、そのやうに見えるやうす。そぶり。

【しるく】は、「著しく」の字をあてる。きはだつてゐること。いちじるしいこと。顯著。明白。

【年にまれなるなど口ずさみつ】「まあめづらしいお方々が、ようこそ。」といふほどの意を、古今集の歌に假つていひいでたもの。この歌の詞書は前の「今日こそすば」の條に見えてゐる。

「あだ」は、かはり易くて頼みがたいこと。人の上では薄情の意に用ひる。「名にこそ立てれ」は、評判になつてゐること。「年にまれなる」は、年内に稀なること。

一首の意は、「櫻の花は散り易くてたのみにならぬといふ評判になつてゐるが、どうして、そんなことは決してない。その證據には、一年の中にも、たまさかしか来ないやうな水くさい人をさへも、このやうに散らずに待つてゐるではないか。」

但しこの文では、たゞ引歌の一句「年に稀なる」に重きをおいて、「年に稀なる珍客さま、ようこそ〜」といふほどの意味と見るべきであらう。

「口ずさむ」は、「口吟」「口遊」「口號」等の字をあてる。ふと心に浮んだ詩歌などを唱へること。

源氏物語の若菜の巻上に「なほ残れる雪と、しのびやかに口ずさみ給ひつゝ。」

【おりて】 下におりてゐて。こゝは、庭におりてゐて。

【市のかたへ】 まちのかたほとり。まちの一部分。

【家路】 イヘヂ。家にかへる路。

萬葉集卷四に「うはへなきものかも人はしかばかり遠き家路をかへすおもへば。」

【晴】 ネグラ。鳥の寝るところ。とや。

源氏物語の梅枝の巻に「霞だに月と花とをへだてずばねぐらの鳥もほころびなまし」

【入相の鐘】 イリアヒのカネ。暮れがたにつく鐘。

「入相」は、日の入るとき。くれがた。たそがれ。黄昏。伊勢物語に「今日の入相ばかりに絶え入りて。」

「春をとちむるこゝち」 春にとどめをさすやうなきもち。「とちむ」は、「綴む」の字をあてる。事を成し終へること。はたすこと。しとげること。すますこと。

源氏物語の柿の巻に「しはすの二十日のほどなれば、大方の世の中とちむる空のけしき。」

【夕闇の空も猶ふりすてがたしや】 夕闇の空もやはりなつかしくて、ふりすてにくいことよ。

「や」は、感歎の意を示す助詞。文法學者の中には、これをその職能の上から感動詞の中に入れるものもある。

【かくながら花の木かげに云々】 「かくながら」は、このままで。一首の意は、「このまゝで（座敷にもあがらずに）花の木かげで月の出るのを待つて、さあ、いつしよに櫻の花の

散つてしまふまで見てゐようではないか。

8 通釋

つれづれとさびしく降つては暮れ、降つては暮れしてゐた長雨も次第にあがつて、霽間があるやうになつたので、「このやうな夕をどうしてむだに過されよう。春の暮れて行つた方をもたづねて見よう、花の散り残つてゐるのも見たいものぢや。さあ」といつて、むぐらの生えてゐるわがあばらやをたづねて來たのは、日ごろ氣のよくあつた二三の人々である。「それなら、どこへいつたらめい〜のおもひがかなふだらう。」といふと、「あそこのおやしき、こゝの御園生のこのごろのこやうすは、どんなに見どころが多いだらう。いつて拜見したいものだ。」といふものもあり、「何の山里、その川づらなどになほ散り残つてゐる花の陰を見たいものぢや。」といふものもあつた。すると、一人が「あの上つ方の御園生の塵一つ積らせまいとしてお掃除のよくゆきとゞいてゐるあたりは、春風がわざと花を散らしたきもちも察しないで、むやみにこれをかき拂ひなどしてあるやうだが、これは、場所から見ぐるしからぬわざとも見えるけれど、見ようによつては、却つておもむきがおとつてゐるやうに感ぜられることがどうしてなからう。又、かの世はなれたあた

りは、暮れゆく春のおもしろみもさぞかし多からうけれど、何しろ、霞をへだてた遠いあなたの奥山里だから、日の暮れかけてゐる今、どうしてそんなところにいで立たれよう。だから、皆のものが日頃親しく交つてゐる羽生田のうしの御住居がよいではないか。さあ、來たまへ。」といつたので、皆それに賛成してつれだつてゆくと、狭い町の通りにたちあがる塵はたゞ中垣一つをへだててゐるに過ぎないけれども、そのやしきが、づつと奥まつて靜かな方を占めてゐるので、庭の樹木も何となく古色を帯び、立ちこめる霞のやうすもなみ一通りでない。まして、主人羽生田氏は古の風雅の道を慕ふ人だけあつて、世間普通の庭や泉水などをいぢる物ずきの人のやうにわざとらしいことはせず、たゞ山里の自然の有様をありのままにうつし出し、入口の方をばそのまゝ畑につくりなしてゐる。その畑に生えてゐるなづなの花などが、露にうち亂れてゐるさまは、いかにもその場所に似つかはしい。垣根のぐるりは、田地が廣くうちかへしてあつて、たいそう清らかな水がそこに堰きたためである。そのたまり水に蛙が時知りがほに鳴いてゐるのもおもしろく、あぜづたひの道のあちこちにわかれてゐるところには、櫻をはじめ花の咲く木などをことさらめかぬやうに植ゑわたしてある。さういふわけだから、夕日に照りはえてゐる花の色香が、雨後

の餘情を含んで心ありげに散りのこつてゐるさまは、かの古今集に見えてゐる「今日こそすばあすは雪とぞ降りなまし、消えずはありとも花と見ましや。」といふ歌の風情そのまゝのやうに見える。主人羽生田氏は、われ／＼のたづねていつたのを非常に喜んだやうすがあり／＼とその顔にあらはれて、同じく古今集に見えてゐる「あだなりと名にこそ立てれ櫻花、年にまれなる人を待ちけり。」といふ歌を口ずさみながら、ひたすら歡待にとめられた。かくて、一同、夕の涼風を待の間、木の下において、よもやまの物語をしてゐると、おのつと浮世を遠くはなれたやうな心地がして、だれ一人まちのそばにゐるやうな氣はしなかつた。そして、家へ歸る路をさへ忘れてしまひさうであつた。やがて日が西山に入つてしまふと、噂に歸る鳥の聲も、わかれを惜しむかのやうに聞え、かすかに聞えてくる入相の鐘の音も、行く春にとどめをさすやうに思はれて、夕闇の空までが、やはりふりすてにくいやうになつた。そこで、次の歌をよんだ。

かくながら花の木かけに月待ちていさもろともに
散るまでは見む。(釋義参照)

9 挿圖

村田 春海

東京帝室博物館藏。筆者不明。

簾

かくながら月ややどさむ夕立のなごりとむるた

まさゝの露 春海

「かくながら」は、このまゝで。

「たまさゝ」は玉簾で、簾の美稱。

「簾」は(一)禾本科くまささ屬に屬する矮小な竹類の總稱。通例葉が大きくて、幅も比較的廣い。(二)小さい竹の總稱。

一首の意は、「夕立のなごりをとどめて庭の玉さゝの葉の上にたまつてゐる白露は、多分このまゝで、散りもせず消えもせず」に、あの美しい月影をば玉のやうに美しいおのが姿の上に宿す(とまらせる)ことであらう。」

四 見よや春

1 解題

渡邊華山發憤の手記である。題は「見よや春大地もとほす虫さへ」(二三頁)とある句によつて、假につけたものである。

本文は華山全集第一卷所載の「退役願書稿」の一部を採つたもの。これは、天保九年(時に華山四十六歳)に、藩主が華山をして藩政を執らせようとしたとき、華山が大いに感ずる所あつて、藩の家老にさし出したもので、終の「左様に御座候へば、畫事も治道も一理にして二理はこれなく、畫道を以て治道に試み申すべしとあらんには、随分試み申すべく候。」とあるのも、畢竟その故である。なほ教材に省略した部分は「参考」の條に載せておいたから、参考せられたい。

2 作者

渡邊華山 ヲタナベ タツザン。
三河國田原藩、三宅氏の世臣。名は定靜、字は子安、又は伯登、幼名は虎之助、通稱を登といふ。

渡邊華山

華山の外に、寓繪堂・金樂堂・昨非居士・金敬居士・隨安居士等の別號がある。

人となり至孝、しかも慷慨にして大志があつた。少時江戸に留學し、藩儒鷹見爽鳩に經史を修め、傍ら洋書を鷹見泉石に學んだ。後、佐藤一齋に就いて文學を究め、藩に仕へて年寄格に班し、祿百石を食んだ。乃ち力を用ひて民政を改革し、沿海の防備に力を竭した。

華山全集第一卷の附録にあるその略傳に、次の如く見えてゐる。先生は三十二歳の頃より心を深く洋學に傾く。然れども自ら原書を讀まず。但し當時洋學と稱するものは、唯阿蘭陀國の書冊あるのみ。而してその書を讀解するものは、江戸に小關三英・高野長英・畠中善良等の數子あるのみ。先生常に小關・高野の二代を招きて、地志・歴史の類を讀ましめ、聞くに隨つて譯言を筆記し、編冊をなす。然れども、二氏等洋文の義理を解するに頗る苦澁にして、通じ難き所多し。然るに先生その譯言を聞き、筆記するところ二氏の未だ及ばざる義理に通じ、速にその文意を明辨し、能く原書の要旨を得たり。故に二氏共に案を拍つてその敏捷に歎服す。以てその才識の非凡であつたことが察せられる。

天保八年の頃、再び江戸に來り、専ら海外の事實を講究し、高野長英・伊藤玄朴・江川英龍・立原杏所等と交り、屢々時事を談じた。九年尙齒會を設けて外國の事情を討究した。當時洋學嚴禁の際として、稍々幕府の注目する所となつた。

英使モリソンが我が漂流民を護送し來るや、幕府は理非を問はずしてこれを撃退した。華山はこれを見て、その不可を論じ、缺舌小説・憤機論等を著して世人を警醒了。當時同志者中に南洋無人島渡航の議が起り、その風評が世に傳はつた。幕府の監察島井羅藏はこれを探知して、俄かに黨獄を起し、長英等を禁錮した。華山は時勢を諷刺した廉を以て死罪に擬せられたが、曩に歎歳に當つて生民を救恤した功に因つて、一等を減じ、天保十年一月、終身藩地禁錮の刑に處せられた。

華山は憂世の念已まず、囹圄中も、常に有志と書信を往復してゐた。この事遂に幕府の知るところとなつた。よつて幕府では藩主を責むるに緩急を以てした。華山はその累の藩主に及ばんことを恐れ、子を戒むるに忠孝を以てし、親戚知友に永訣の書を遺し、天保十二年(三三)十月十一日を以て自刎した。年四十九。

華山は又畫を白川芝山・金子金陵・谷文晁等に學んで、その蘊奥に達した。その技術の精絶に至つては、我が國古今にその比がないと稱せられ、今に至るまで内外に珍重されてゐる。

明治三十四年十二月、特旨を以て正四位を追贈せられた。

3 編纂の用意

渡邊華山は、幕末の志士として、はた畫家として、國民の忘れることの出來ぬ偉人である。本課はこの偉人の書翰を通してその生ひ立ちと人となりとの一斑を知らしめ、且その發憤の動機と畫に志した顛末とを明らかにし、併せて書翰の讀解力を養はしめる目的を以て、こゝに採録したものである。

4 要旨

支那の或人は「王侯將相寧ぞ種あらんや。」といひ、「舜何人ぞ予何人ぞ。」といつて發憤した。渡邊華山は、備前侯の御先供に打擲せられて、「同じ人間にて、天分とは申しながら、その御先供に當りて打たるゝ事發憤に堪へず。」と言つた。偉人には逆境に育つたものが發憤してなつたものが多い。偉人渡邊華山もまたその例に洩れなかつた。今その自敘傳ともいふべき本課の文章を讀んでは、困窮悲惨そのものの中にあつた少年時代に、よく志を立てて苦闘したその心に感奮させたい。中學校に通つてこの文を讀む者は、まづ華山以上の困窮の中に居るものは

あるまい。自己の幸福を考へると共に、自己を反省して、發憤驟起する所あらしめたい。

5 概説

第一節(一八頁—二二頁二行) 發憤の動機と家庭の窮狀。

備前侯の御先供に打擲せられて發憤し、儒者にならうとした。だが父は病氣、兄弟は七人もあつて皆幼少、貧窮甚だしく、弟妹は他所に奉公に出したが、多く非業同様の病死をしてしまつた。

第二節(二二頁三行—二三頁一〇行) 畫工志願の理由とその苦しき修業。

儒者では金にならぬから、貧を救ふ道として畫工となる。附届のとどかぬため初の師芝山からは斷られ、金陵に入門、初午燈籠の畫を賣つて紙筆を調へ、朝飯の焚火で讀書する。

第三節(二三頁一行—二五頁一行) 學問修業の蹉跎と繪畫への専念。

門限の問題で儒學斷念、天下一の畫工となつて忠孝の

道を立てようと決心する。

第四節(二五頁二行—二六頁) 畫道と治道。

總身が畫になるやうにせねば、立派な畫は出來ぬ。上下皆治安に志さなくては、國は治まらぬ。畫道は、畢竟治道の精神に一致する。

6 取扱上の注意

この文は形式上から生徒が近寄り難いやうに感ずるかも知れないが、努めて反復朗讀させるやうにし、成るべく原文の形のまゝで内容を受取らせるまでに導きたいものである。

華山は十二歳の時發憤して儒者にならうとした。が、それは遂げられず、十六歳の時からは家計のために畫家にならうと決した。しかし、最初の志である學問の研究を捨てた譯ではない。かく仕候間にも學問は仕度存候へども、何分閑暇これなく候へば、冬に相成候へば朝七つ時に起出で、飯を焚き、その焚火にて讀書仕候。」とあるのを見て、學問に對する熱情が知られる。當時學問といへば普通には儒學であつて、これらの人にとつては、儒

學は今の法科・政治科等の意味も含められてゐるものであつたのである。

【さて二十六歳の春、深く感じて學問をしようとしたが、門限の問題で遂げられず。以後畫に専念する決心をしたのであるが、そこにも、「上にして君に忠、下にして親に孝、皆是學問中より出で來り候儀にこれあり、殊に上へ忠と申す事は無學無術にては叶ひ難し。」といつて、學問の必要を述べてゐるのを見なければならぬ。かくて今は術の方、即ち畫を以て忠たらんと決したのであるが、學問の方も心にはかけてゐたに相違ない。これ、峯山が畫家でありながら、單なる畫家でない所以の一である。

【碧瑠璃園作の『渡邊峯山』と題する歴史小説は峯山の一生を小説風に書いたもので、悉くが事實とも言へないが、多少の脚色を伴ふにせよ、よくその一生を寫し出してゐる。畏くも明治天皇の乙夜の覽を辱くしたものである。その苦辛多難なる生ひ立ち、眞に鬼神をも泣かしめ、儒夫をも起たしめるものがある。これを生徒の課外讀物として與へられたならば、本課の徹底を助けて大

いに有益であると思ふ。「参考」を見られたい。

7 設問

- 1 「私十二歳の時」の一節で、最も強く各自の胸を打つ文句をあげよ。
- 2 「私十四歳の時」の一節は、一言にすれば何を語つたものであるか。その悲惨の狀は特に如何なる文字に表れてゐるか。
- 3 峯山は學問を如何に重んじてゐたか。
- 4 峯山は繪の事に於ては、如何に悟るところがあつたか。
- 5 「發憤」の眞の意義は如何。
- 6 次の語句はどういふ意味であるか。
- イ 合口。客死。仕合。非業の死。
- ロ 明窓淨几は書の合。風雨撥雜は書の乖。
- ハ 見よや春大地もとほす地蟲さへ。

8 釋義

【十二歳の時】 光格天皇の文化五年（二四六八）の春。

【日本橋通】 ニホンバシドホリ。江戸の日本橋通。

大阪の日本橋筋は「ニッポンバシスチ」といふ。

【備前侯】 ビゼンコウ。備前岡山藩主（三十一萬五千二百石）從四位少將池田齊敏。薩摩藩主島津齊彬の弟、上總介齊政の養子となつて岡山藩をついだ。

【先供】 サキトモ。さきに立つ供人。こゝは備前侯の通行する行列の先に立つてお供するもの、即ちお先拂ひの従者をいふ。

夕霧阿波鳴渡の中段に「旦那のおかへり、先供はしる黒羽織。」

【打擲】 チャウチャク。打ちなぐられること。毆打（オウダ）されること。

「ダテキ」などと讀まぬやう注意したい。

源平盛衰記卷十八、文覺高雄勸進の條に「打擲刃傷に及ぶ條、希代の不思議なり。」

【大息して】 ためいきをついて。

史記の高祖紀に「喟然大息曰、「大丈夫當如レ此也。」

【横行】 ワウカウ。わがまゝかつてにおしあるること。

史記の伯夷傳に「盜妬聚黨數十人、橫行天下。」

【天分】 テンブン (一) その人の天からうけたもちまへ。天性。(二) 天からうけた身のほど。自然にその身にそなはつてゐる分限。(三) 天から命ぜられた職分。こゝは、(二)の意。

【發憤に堪へず】 どうしても發憤せずにはゐられない。

【發憤】 (ハッパン) とは、精神をふるひおこしてその目的に邁進すること。奮發。

論語の述而篇に「其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。」

【高橋文平】 三河國田原藩士。藩主三宅康明(康直の義父)の祐筆をつとめて深く康明に信任せられた。峯山は幼少よりこれと親交を結び、大いにその提撕を受けた。峯山が畫家としてその名を成すに至つたのは、文平の忠言に耳を傾けた結果である。峯山は彼の恩に感じて、後日その像を描き、日夕これを禮拜したと傳へられてゐる。

【祐筆】 イウヒツ。右筆とも書く。貴人の側に侍して筆札を掌る役。かきやく。

江戸時代に至つて職名となり、奥右筆・表右筆等の稱が生じた。

【日頃】(一)幾日かの日。多くの日。數日。(二)平生。ふだん。つね。(三)この頃。近頃。數日來。こゝは(二)の意。

【合口】アヒクチ。(一)話の互によくあふこと。又、その人。(二)轉じて仲のよい友達。親友。仲よし、こゝは(一)の意。

當時爽鳩は六十四歳に垂んとする名儒、峯山は十七八歳の青年で、年齢には大差はあつたが、兩者は互に相許して、いはゆる忘年の友ともいふべき状態であつた。

狂言、對馬祭に「酒屋の亭主が、とつと話好きで、その上、身どもとは合口でござる。」

【爽鳩先生】サウキウセンセイ。姓は鷹見、名は正長。一名星阜、字は子方、通稱は三郎兵衛、爽鳩はその號である。本姓は石川氏であるが、田原藩の大夫鷹見定重の養嗣子となつたので、鷹見姓を冒すに至つた。年十六、始めて仕へて藩侯の近侍となつた。二十一歳のとき江戸に

赴いて荻生徂徠の門に入り、好んで詩を作つた。やがて志を經濟(經世濟民)の學に留め、和漢の政治・法律・刑名より儀制の類に至るまで、精通せざるは無きに至つた。はじめ田原侯は國用が乏しくて、藩士に對する給與が頗る不如意であつたが、爽鳩が宰臣となるに及んで、處置最もその宜しきを得、爲に遂に富藩の名を致すに至つた。文化八年(二四七一)十月歿。年六十一。このとき峯山は十八歳であつた。

【儒者】ジュシャ。儒學を講ずる人。

儒學とは、支那に於ける孔子・孟子の説を奉じ、四書・五經等を經典とする學問をいふ。

孟子の滕文公上に「儒者之道、古之人若^レ保^レ赤子。」

【持病】チビヤウ。その身に持つて、常になやむ病。宿病。宿疾。

【看病】カンビヤウ。病人を看護すること。みとり。介抱。

雜阿含經に「佛自往看病。」

古今著聞集卷六に「あたりに六七人ゐたりける看病の

ものどもを次第ににらみけり。」

【按摩】アンマ。醫術の一種。手からだをもみさすつて病を治療すること。

これを行ふことを「按摩をとる」といふ。

【退食】タイシヨク。君公の前より退いて休息すること。退朝して、家に歸つて食事する義から起つた語である。

詩經、國風、召南、羔羊篇に「退食自^レ公、委蛇委蛇。」

【奉公】ホウコウ。(一)おほやけに仕へまつること。(二)君國のために力をつくすこと。(三)主人に仕へること。こゝは(三)の意。

狂言、三本柱に「頼うだ御方は何事もわつさりとして、御奉公がいたしよいの。」

【餘裕】ヨユウ。餘りがあつて、ゆたかなこと。餘地があつて、窮屈ならぬこと。ゆつたり。ゆとり。こゝでは生計のゆつくりしてゐることにいふ。

孟子の公孫丑下に「吾進退豈不^レ綽々然有^レ餘裕哉。」

【貧窮最も甚だしく筆紙に盡くし候處にはこれなく候】そのひどい貧乏の有様はとて文字に書きつくされること

ではございませぬ。「筆紙」は文字といふかはりに、それを書く道具を以ていつたのである。

【出家】シュツケ。家を出で佛門に歸すること。僧侶となること。轉じて、僧侶。

古今著聞集卷十一に「少年のとき出家したりけるが、後に還俗したるものなり。」

【旗本】ハタモト。江戸時代に、知行一萬石以下で、御目見以上の者の稱。「御目見」とは、幕臣で將軍に謁見することを得るものをいふ。

【板橋】イタバシ。今の東京市板橋區板橋町。舊中仙道の第一驛。江戸四宿の一。今は鐵道赤羽線の一驛があり、町の東方には陸軍火藥製造所がある。人口四萬五千。

その昔峯山は弟の定意を板橋の札の辻といふところまで送つたといふ。今中仙道の街道の路傍に「縁切榎」といふ榎の老木がある。こゝが峯山兄弟の訣別の場所だと傳へられてゐる。

【見も知らぬ荒男】一面識もない荒くれ男。

「見も知らぬ」は「見知らぬ」の意をつよめるため、間に詠

歎の「も」を挿んだものである。

「荒男」は、荒々しい男。亂暴な男。

曾我會稽山に「岩角荒き荒男。」

【目前に髻髻仕候】まぼろしのやうにちら／＼と眼前に見えます。目の前にちらつきます。

「髻髻」(ハウフツ)は、彷彿とも彷彿とも書く。(一)さも似たるさま。さながら。(二)はつきり見えぬさま。ぼんやり見えるさま。かすか。ほのか。

こゝは二の意。

史記の司馬相如傳に「縹乎忽々、若神仙之彷彿。」

源平盛衰記卷二十八、仙童琵琶の條に、「髻髻たること明月の薄雲をへだてたるが如し。」

【定意】 畢山全集に載せてある渡邊家の系圖に「次男定意、年十三にして上州館林の善道寺に薙髮、僧となり、文政十三年七月二十六日武州熊谷驛釜屋晋次郎方にて客死す。東京小石川餌差町善雄寺に葬る。年廿八。」と見えてゐる。

「定意」の訓はよくわからぬ。碧瑠璃園堀江氏はテイイと

音訓してゐるが、それは穩當でなからう。それは畢山の名定靜をサタシツと訓むことでわかる。一本にはサダモトと訓んである。

【熊谷宿】クマガヤシユク。今の埼玉縣熊谷市。舊中仙道の一驛。秩父街道・忍街道の要衝に當る。鐵道高崎線の主要驛で、上野から六十一杆。秩父鐵道の接續點。町の北方なる熊谷寺は熊谷直實が晩年草庵を結んだといふ處、今寺内にその墓がある。町の南方の熊谷堤は櫻樹を以て名高い。

【客死】 カクシ。他郷で死ぬこと。「客」は旅の意。萬葉集には「客」を「タビ」とよませた所が多い。

史記の屈原傳に「身客死於秦。」

【雷之助】 ライノスケ。渡邊家系圖に、「三男喜平次、初名雷之助、改木村又藏。水野伯耆守家來堀田又左衛門の養子となる。文政十一年六月十三日歿す。東京市牛込區神樂坂獅子寺に葬る。」とある。

【青松寺】 セイシヨウジ。曹洞宗の巨刹。東京市芝區愛宕山の南を占めて東面し、三縁山増上寺に隣接してゐる。

文明年間太田道灌の草創。雲岡俊徳の開山。はじめ麴町貝塚の地にあつたが、天正・慶安の頃今の地に遷つた。江戸時代觸頭(フレガシラ)三寺の一。

【御旗本屋敷】 水野伯耆守家來堀田又左衛門の邸をいふ。前の「雷之助」の條参照。

【丸裸】 マルハダカ。着物を着ないで、肌をあらはすこと。あかはだか。

狂言、手負山賊に「着てゐるものをぬいで進じては、丸裸になります。」

【親不知】 オヤシラズ。生れて間もなく他人に養はれ、又は孤兒となつて、父母の顔を見知らぬ子。

【仕合】 シアハセ。爲合の義。通常、めぐりあはせ・幸運などの定に用ひるが、こゝでは、「ありさま」といふほどの意に見てよからう。

【先方里方を侮り候を心外に存じ】 養子先の方で里方を輕侮するのを氣にくはぬことと思つて。

「里方」(サトカタ)は實家。嫁・娉・養子の實家をひつくるめてこふ。

「心外」(シングワイ)は、(一)一心の外、心の外。(二)思ひの外。案外。意外。(三)思の外なることを恨みいきどほること。こゝは(三)の意。

曾我扇八景の下に「最後の供にはづるゝこと、屍の上の心外。」

【出奔】 シュッポン。出ではしること。逃亡してあとをくらますこと。かけおち。逐電(チクテン)。

左傳の桓公十年に「夏虢公、出奔虞。」

江戸時代では、徒士以上の逃亡してあとをくらますことといふ。足輕以下の逃亡を欠落といふに對して。

記事條例、十七に「諸家家來之内、徒士以上出奔與唱、足輕以下欠落與唱來候事。」

【主人】 こゝも、養父堀内又左衛門をさす。

【辛苦】 難儀。難澁。困苦。艱難。

史記の吳太伯世家に「勾踐爲人能辛苦、今不滅後必悔之。」

【かの地】 養子先なる堀内氏の住んでゐた土地。

【歸府後】 江戸に歸つた後。

【妹兩人】 イモウトリヤウニン。

渡邊家系圖に、「長女もと、上州桐生岩本家に嫁す。孝行を以て聞ゆ。慶應三年七月二十六日、年七十三にして病歿す。次女まき、永井左衛門の家來佐藤藤助に嫁し、年三十二にて歿す。東京麻布徳用寺に葬る。」とある。

【遠方】 エンバウ。上野國桐生。前の「妹兩人」参照。

【貧家】 ヒンカ。佐藤家。前の「妹二人」参照。

【至貧至困】 シヒンシコン。たいそう貧乏なこと。至つて貧困なこと。

【無策無術】 ムサクムジュツ。こゝは貧困から免れる手段術策を心得ぬことにいふ。

【非業同様の病死】 悪業を犯さないのに、これを犯したものと同じむくいをうけて病死すること。

【非業(ヒゴフ)とは、罪のむくいにあらぬこと。業(ゴフ)にあらぬこと。非命。

太平記卷二十六、芳野炎上の條に「冥途に赴きたまふといへども、非業なれば蘇生すべし。」

【蒲團】 フトン。又布團とも書き、「しとね」とも訓ずる。

褥・臥褥・臥被等の字に當る。フトンと讀むは唐音である。元來僧家で用ひるところの蒲(ガマ)の葉で編んだ圓座の稱。我が國ではこれを轉用して専ら「しとね」の意に用ひる。

辭源に「蒲團坐具。僧人坐禪及跪拜所用也。織蒲爲之。厥狀團圓。故曰蒲團。」

【夜具】 ヤグ。原文では夜着に作る。「衣具」は衣着(ヨギ)・搔卷(カイマキ)、敷蒲團など、夜の寢具の稱。

蕪村句集、秋に「西行の夜具も出てある紅葉かな。」

【ごろ寝】 寢どころに入らず、着のみ着のまゝにて假寢すること。

【火燵】 コタツ。上に槽(ヤグラ)をおき、蒲團をかけて足などをあたためる小さなろり。「巨燵」とも書く。

【ふせり申候】 ねました。「ふせる」は、臥すに同じ。

伊勢物語に「月の傾くまでふせりて。」

【高料の藥種】 カウレウのヤクシユ。ねだんの高い藥劑の種類。

【藥種】は、藥の材料。藥劑の種類。

庭訓往來、十一月に「渡唐之船依中絶、藥種高直之間。」

【藥禮】 投藥の謝禮として醫者に贈るもの。醫師に報酬する藥價。くすり代。

【日食の麵類】 ヒグヒのメンルキ。毎日たべる饅飩や素麵の類。「麵」は麪を正字とする。

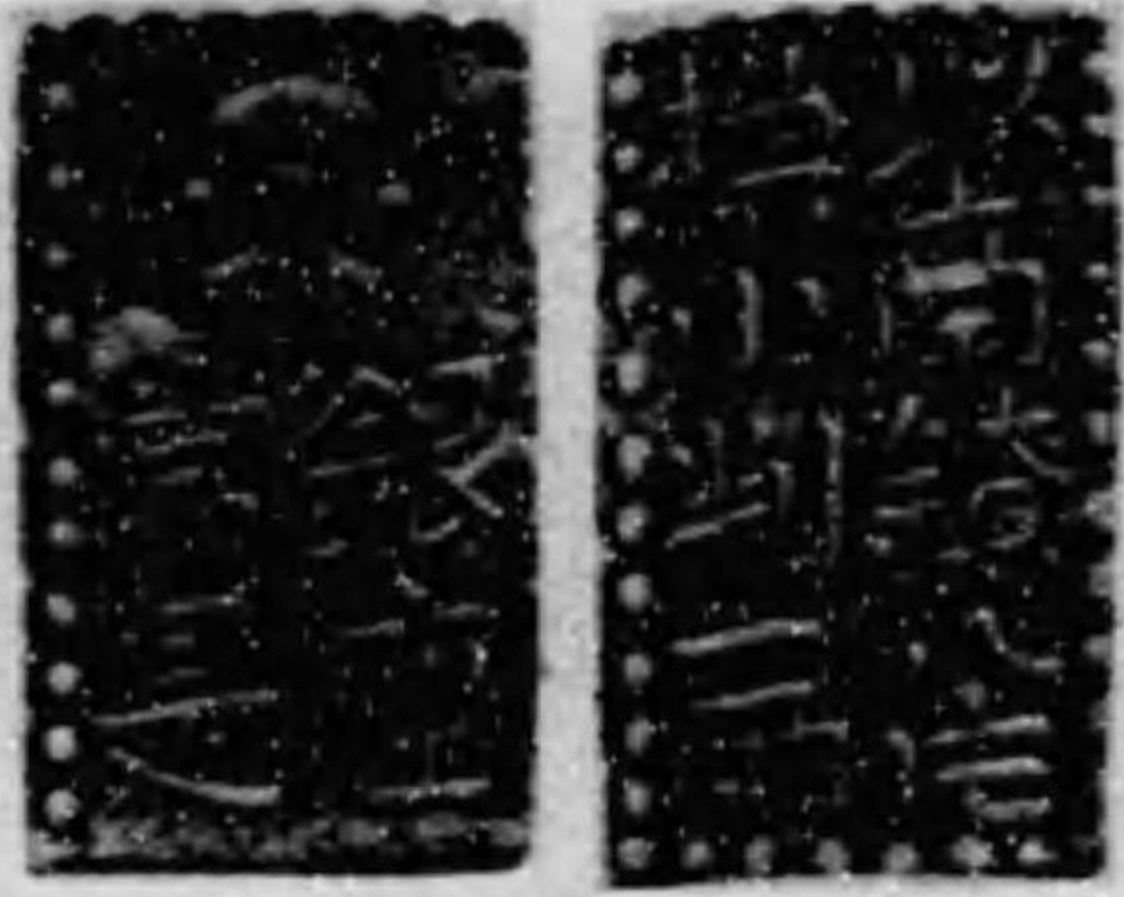
【質物】 シチモツ。借金の擔保として貸主に預けおく物品。質ぐさ。

【南鐐一片の儀にて】 南鐐一片を手に入れるために。

「南鐐(ナンレウ)は江戸時代に二朱銀の異名。一朱は一兩の八分一。ここでは二朱ばかりのお金に不自由して借りにいつたのである。

「南鐐」はもと上等の銀のこと。爾雅の釋器に、「白銀謂之銀。其美者謂之鐐。」とある。「南」は支那の

荊州(今の湖北・湖南兩省の地)、揚州(今の江蘇省揚



州府の地)を指す。この地方は金銀の名産地である。

よつて銀のことを南鐐と稱するに至つたのであらうといふ。

【身内】 ミウチ。みより。しんみ。親族。親類。一門。同族。

【山伏】 ヤマブシ。「山臥」とも書く。佛道修行のために山野に起臥する僧のことであるが、特に修驗道の行者、即ち修驗者をいふ。普通、すどかけ・袈裟・兜巾(トキン)をつけ、太刀をはき、金剛杖をつき、法螺の貝を吹いて諸國の神社・佛閣を巡拜する。

【修驗道】は仁明天皇の承和年中に役行者がはじめたといふ一種の教法。修驗宗ともいふ。教理上の研究には餘り力を用ひないで、山野に起臥して修行し、呪法を修得して神驗を證得することを目的とする。

【本所一丁目】 今の東京市本所區一丁目橋の通なる千歳町。昔は兩國から龜戸に通じてゐる東西の堀割に架設した橋が五つあつた。兩國の方から數へて一の橋から二の橋…五の橋といふ。その一の橋の南北の通を一丁目とい

ひ、順次二つ目……五つ目といった。

【存生】 ゾンジャウ。いきながらへること。生存。存命。運歩色葉に「存生(ゾンジャウ)」と見えてゐる。

【助右衛門】 渡邊氏系圖に「四男助右衛門、岡崎中山氏を繼ぐ。」とある。

【洗足の湯】 よこれた足を洗ふための湯。

史記の鄭生傳に「沛公方踞^レ床、使^二兩女子洗足^一。」

【これに依つて】 衣服をこがしたからといふのではない。上に述べたやうな至貧至困の状態であつたからといふのである。

【猶又高橋文平に相談仕候處】 前に儒者にならうとして爽鳩先生に入門したのも高橋文平と相談の結果であつた。(教科書十八頁末行参照)

【芝】 今の東京市芝區地方。

【白芝山】 ハクシザン。白川芝山を支那風にいつたのである。芝山、名は景皓、玉蕉庵と號し、書及び畫に秀でてゐた。孝明天皇の安政年中(二五一四—二五一九)歿。年九十。

【畫工】 グッコウ。繪をかくことを業とする人。ゑかき。ゑし。畫家。

傾城反魂香の上段に「跡絶えず傳はる家や、畫工のほまれ。」

【附届】 ツケトツケ。謝禮などに時を定めて贈る金品。

浮世床卷二上に「相應の附届をして預けて置いたのさ。」

【師家】 師匠の家。師門。

世説、政事に「從^レ師家^ニ受^レ書^ヲ還。」

【金陵】 キンリョウ。江戸の畫家。金子氏、名は允圭、字は君璋、日南亭と號した。谷文晁に學んで殊に花鳥に巧であつた。文化十四年(二四七七)二月九日歿。

【少々は出來候様に相成候】 少しは畫がかけるやうになりました。

【手段】 シュダン。てだて。方法。しかた。てだん。

【初午燈籠】 ハツウマドウロウ。「初午」とは、陰曆二月の第一の午の日に行ふ稻荷神社(祭神は倉稻魂命)の祭禮をいふ。この日社頭に幟をたて、繪燈籠をかけ、小兒等



は集つて太鼓を打ちならして嬉戲する。この繪燈籠を初午燈籠といふ。

「初午燈籠」は掛行燈式

で、表には戲畫をゑがき、地口・川柳などを書きそへる。よつて又地口行燈ともいふ。

三養雜記に「江戸にて稻荷祭には地口行燈をつらねともすならはしなり。この地口といふは、土地の口あひともいふことにて、たとへば地張きせる。地本繪冊子。地酒などの類、いづれもこの地といへるは、江戸をさしていふ詞なり。」

【二貫】 イックワン。錢一千文(今の十錢)をいふ。錢九百六十文を一貫といつた事もあるが、この頃から明治の中頃までは、今の十錢を一貫といつた。昭和の今日に至つても、故老の中には往々十錢を一貫といひ、二十錢・三十錢を二貫・三貫といつてゐるものもある。

【麴町天神】 カウチマチテンジン。麴町區平河町にある天満天神。祭神は菅原道眞。太田道灌が武州川越の三芳野

天神を移したものの。今もなほ府社として祭られてゐる。

【たこや】 風屋。同天神の社頭にあつた風店。

【閑暇】 カンカ。間暇とも書く。いとま。ひま。

孟子の公孫丑に「賢者在^レ位、能者在^レ職、國家間暇^ニ」

【朝七つ時】 今の午前四時。昔は一晝夜を十二分して眞夜中を九つとし、順に八つ・七つ・六つ・五つ・四つと數へ、又眞晝を九つとし、同様に數へて四つに至る。

この法は日出・日没を基として明け六つ、暮れ六つと定めるので、晝夜の伸縮によつて時間に長短が出来る。

その八つ・七つといふやうな數は、古、漏刻で時をはかり、鼓を打つてこれを知らせるに當つて、九(易の陽數)からはじめて、時毎に二倍し三倍して撃つたのが、實は二九十八なら八つ、三九二十七なら七つといふやうに、各、十位の數をすてて、その餘を撃つたのに起つたといふ。

【文晁】 ブンテウ。徳川時代の畫家。谷氏。名は正安、通稱は文五郎、また直右衛門。外に寫山樓・書畫齋等の別號がある。麓谷の男。江戸の人。壯年にして畫を加藤文

麗に學んだ。中年北山寒巖に就いて清人の畫風を修め、後、宋の牧溪、本朝の雪舟・探幽等の筆意を追慕し、自ら一家を立てた。人物・山水・花鳥・蟲魚に巧で、特に水墨山水に妙を得た。田安家に仕へて繪師となり、松平定信の知遇を得て集古十種及び石山寺縁起の増補を畫いた。

本朝畫纂・日本名山圖會・歴代名公畫譜・畫學大全・寫山樓畫本・松島眞圖等の名著がある。

天保十二年(二五〇一)十二月十日歿。年七十八。

【内職】 ナイシヨク。本業の餘暇に私になす職業。家務の暇になす賃仕事。

【稽古】 ケイコ。物事を學び習ふこと。學習。修業。

後漢書の桓榮傳に「今日所_レ蒙稽古之力也。可_レ不_レ勉哉。」

平治物語、信賴・信西不快の條に「在所にこもりみて、偏に武藝をぞ稽古せられける。

この語は、古の事を稽(カンガ)ふる意から轉じた。

尙書の堯典に「日若稽古帝堯……」

【恩澤】 オンタク。めぐみの澤(ウルホヒ)。めぐみ。

史記の律書に「恩澤加_二海内_一。」

【見よや春云々】 見なさい、世は方に春だ。生々の氣は鬱勃として天地に満ちてゐる。今まで寒さを恐れて地中に蟄伏してゐた蟲さへも、今は地中を出て活動をはじめてゐる。何で自分一人空しくこの青春を過すことが出来ようぞ。

「大地」はダイチとよむ。「大地をとほす地蟲さへ」といふ言葉は如何にも深く感ずるところのあつたことを思はせる強い言葉である。

「地蟲」はヂムシとよむ。一に「すくもむし」といひ、園圃の土中に生ずる。芋蟲の形をした、色の白い、首の赤い蟲で、よく草根を食ひ、苗を害する。

嵐雪の句に「下闇や地蟲ながらの蟬のこゑ。」

これは地蟲が蟬になるものと考へて詠み出でたのである。

【これに依つて】 深く感ずるところがあつたによつて。

【一齋】 イッサイ。佐藤氏、名は坦、字は大道、通稱は捨

藏。一齋はその號。又愛日樓・老吾軒などの別號がある。美濃の岩村侯の家老たる佐藤信由の子。安永元年(二四三二)十月二十日江戸の濱町に生れた。幼にして學を好み、又書をよくした。長ずるに及んで斷然頭角を顯し、天下に名を成さんとして心を聖賢の學に潛めた。寛政二年岩村侯の近侍となり、林述齋と共に學事を研鑽した。同四年述齋の勸によつて大阪に遊び、中井竹山の教を受け、同五年江戸に歸つた。後、述齋が林家をつぐに及んで、師弟の名を正しくしてその門人となつた。その學は、陽に朱子學を奉し、陰に王陽明の理氣同一論を採つた。一齋は名聲の高まると共に門人も日に多くなつたが、文化二年十月に林氏の塾長となつてその門生を監督するに至つて、入門するものが愈々多くなつた。後、一齋が輔導した岩村侯の世子が、文政九年に國を承けた時、一齋は老臣の列に加はり、國政に參與した。天保十二年十一月、擢んでられて幕府の儒官となつた。こゝに至つて、諸侯は或は聘して講説を乞ひ、或は駕を官舎に枉げて學んだ。弟子は無慮三千に達したといはれる。幕

末の國家漸く多事なるに際しては、林祭酒を助けて外交文書を作り、また幕府の需に應じて時務策を上り、益々その優遇をうけた。安政六年(二五一九)六月感冒を患ひ、同年九月二十四日、八十八歳を以て官舎に歿した。「愛日樓文詩」「言志録」等、數十種の著書がある外、一齋點といふ經書の調點法を創案した。大正四年十一月、從四位を追贈された。

一齋の傳記は、高瀬代次郎氏の著「佐藤一齋と其の門人」に詳細を極めてゐる。崑山が二十六歳の正月は、文政元年(二四七八)にあたり、一齋は五十六歳、林氏の塾長たりし時代である。

【御門制】 「門制」とは、夜、門を閉ぢる刻限。又、門を閉づる時間等をもいふ。御門限。

【村松六郎左衛門】 田原藩家老の筆頭。田原藩と紀州藩と隙を生じた時、六郎左衛門は崑山をしてこれを處置せしめたが、崑山の調停その宜しきを得たので、無事に落着いたといふ。

【沙汰】 サタ。指令。指圖。「沙汰」の字は、宛字で、もと

「さだ」といひ 事を定め處置すること、論ずることをいひ、轉じて議定・裁斷・訴訟・官令・報知・音信・評判等さまざまの意に用ひるに至つた。

【上にして君に忠、下にして親に孝】 上にして、下にしては、次の急にしては、緩にしてはと同じく、「一には……一には……」といふ所を、も少し意味のある言葉をもつて言つたままで、君と親と比較した位置の關係から、君に對して上にしてといひ、親に對して下にしてといつたのである。随つて、君に忠なるべき身分の者、親に孝なるべき身分の者に對していつてゐるのでないことはいふまでもない。

【落なく】 洩れ落つるところなく。

【やたけに】 「彌猛に」の字をあてる。いよ／＼猛く。勇みに勇んで、などの意。

太平記卷十、長崎次郎高重最後合戦の條に「やたけに思ふとも叶ふべからず候。」

【胴體】 ドウタイ。動物の身體の首と手足とを除いた部分。胴。からだ。

一代男卷四に「頭は女、足鳥の如し。胴體は魚にまぎれず。」

【四肢】 シ、四支とも書く。兩手と兩足。

韓詩外傳に「佚四肢、全耳目、平心氣、而百姓理。」【明窓淨几は書の合】 メイサウジヤウキはシヨのガフ。「日當りがよくて明るい窓の下におかれた清淨な机（座一つ積もつてゐない机）は、書物を讀むに最も適してゐる。」といふ意。「几」は机。

【風雨擾雜は書の乖】 フウウゼウザツはシヨのクワイ。風が吹き雨が降つて心のかきみだされてゐるときは、讀書に不適當である。」との意。「乖」は、そむく、もとの、たがふ、さかふ、などの意味をもつた字である。

【身外のものすら此の如し】 「明窓淨几・風雨擾雜はいづれも身外のものである。それにもかゝはらず、その影響がかほどまでに甚だしい。」との意。

【まして總身のうち云々】 前の「身外のもの云々」に對していつた語。「まして身内のもの、即ちわが心身の狀態の外界に及ぼす影響に至つては、はかり知るべからざるも

のがある。」との意。

【總身】 はソウシンともよみ、又ソウミともよむ。からだちゆう。全身。

川中島合戦、一に「總身の力、腕に入れ、なぐりたる減多うち。」

【諸侯にして國を治めずして……】 國全體を一箇の身體とみれば、その主たるものは心にあたり、家中・百姓は手足にあたるわけ、その心が立たないでは、手足が十分働くことは出来ぬ。

【家中】 カチュウ。武家で、家來(ケライ)の總稱。

丹波興作の upper 段に、「この御家中にて番頭伊達の興作。」

【百姓】 ヒヤクシヤウ。(一)四民の總稱。一般人民。(二)特に農民の稱。こゝは(二)の意。

【出精】 シュツセイ。精を出すこと。事を勵みつとめること。勵精。

【奉行】 ブギヤウ。命を奉はりて執り行ふ義。徳川時代各種々の職の長の稱。寺社奉行・勘定奉行・書物奉行などの類。外に町奉行・長崎奉行・奈良奉行などがある。こ

れは町又はその地方の長官である。

【足輕】 アンガル。足輕く驅走する義。平時は驅使・雜役に供し、事あるときは戰陣の歩卒となるもの。かちどうしん(歩同心)。歩卒。雜兵。

参考保元物語、正清が爲朝の陣に向ふ條に「足輕ども四五十人を、馬の口、前後 左右にとりつかせ。」

【治安】 チアン。世の中を治めて安寧ならしめること。國家社會の安寧秩序を保持すること。

漢書の賈誼傳に「因陳治安之策。」

【治道】 チダウ。國を治むる道。政治の方法。治術。禮記の樂記に「審樂以知政、而治道備。」

【畫事も治道も一理にして二理はこれなく】 これは崑山自身の斷定ではない。崑山自身は「治道の事は如何哉、審かに辨へ申さず候」といつてゐるのである。即ち、これは「試み申すべしとあらんには」のとうける言葉の中のものであつて、「畫事も治道も一理にして二理はこれなしとあらんには」とつゞく心持で解釋すべき所である。

【隨分】 ズキブン。こゝでは、身分相應に、自分の力の及

ぶだけ、などの意。

9 挿 圖

渡邊華山像 椿椿山筆

華山の門人椿椿山が、その頃華山をうつしたもの。

筆者椿椿山(ツバキチンザン)は徳川時代の畫家。名は弼、字は篤甫、忠太と號した。椿山はその號である。別に琢華堂・休庵等の號もある。江戸の人。人となり温厚・謹慎、言に訥に、行に敏であつた。畫を金子金陵・渡邊華山に學んだ。後、清人張秋谷の風を慕つて特に人物・花鳥・蟲獸・山水に巧であつた。又軍法を平山子龍に學んでその蘊奥を極めたといふ。安政元年(二五二四)歿。年五十四。

邯鄲の快夢

邯鄲(支那古代、趙の都)の邸舎で、道士呂翁が少年盧生に人生窮達の途を説いてゐるところを圖したもの。参考の爲、その故事を左に掲げよう。

唐の開元七年、道士呂翁、神仙の術を得たり。邯鄲に遊ぶ。道中の邸舎に息ひ、少年盧生を見る。短褐を衣て青駒に乗り、翁と言笑す。盧生その衣裝の敝れたるを顧みて、乃ち歎じて曰く、「大丈夫世に生れて諸はず、困することは是の如し。」

と。翁曰く、「子談諸方に適して、その困を敷するは何ぞや。」と。生曰く、「吾常に學に志す。自ら惟ふ、青紫拾ふべしと。今已に壯に過ぎて猶吠畝に勤む、困にあらざして何ぞ。」言訖りて目昏み、寐を思ふ。時に主人方に黍を蒸す。翁乃ち囊中の枕を探り、之に授けて曰く、「子吾が枕に枕せば、當に子を榮適志の如くならしむべし。」と。その枕青磁にして、その兩端に窠あり、生、首を俛してこれに就く、その窠を見れば、漸く大に明らかなり。即ち身を擧げて入る、遂にその家に至る。數月にして清河の崔氏の女を娶る。女の容甚だ麗しくして、生質愈厚なり。明年進士に擧げられて登第す。褐を釋きて涓雨の尉に轉ず。俄に監察御史に遷り、起居舍人知制誥に轉ず。それより累遷して、同中書門下平章事となる。同列又邊將と交結して不軌を圖ると誣ふ。制獄に下さる。中官これを保することをなして、死を減じて驩州に投ず。數年にして帝憲を知りて復進めて中書令となす。燕國公に封せらる。五子を生む。孫十餘人あり。後、年八十を逾ゆるを以て、病みて薨す。盧生欠伸して寤むれば、その身方に邸舎に偃し、呂翁その傍に坐し、主人黍を蒸して未だ熟せざるを見る。生驟然として興きて曰く、「豈これ夢寐なるか。」と。翁生に謂つて曰く、「人生の適も亦是の如し。」と。生慨然として良

久しくして謝して曰く、「それ寵辱の道、窮達の運、得喪の理、死生の情、盡く之を知る、これ先生吾が欲を望く所以なり、敢へて教を受けざらんや。」と。稽首して去る。(沈既濟の「枕中記」に據る。)

10 参考一

渡邊華山の「退役願書稿」の中、教材に省略した部分を左に掲げて参考に供へよう。

私退役之義に付、先達而御内々申上候處、段々御懇切に御手書に付、猶又相勤辨仕候得共、何分近來癩火相募、日夜わくわく仕、心氣落付不し申、今日も長英相談仕候處、公私にも、唯今之處は氣保養ならでは藥餌之届候處には無之、脈もぶよぶよと浮緩にて線緯ノリ無之、草木にたとへ候得ば水草之様なるものと申候。右は此通之次第を以長英に御問合被下候得者相分り申候。

一、私病を以退役奉願候次第、段々厚き御思召にて、有體申上候。御聞分奉願候。先御役願仕候心定に是非を考候に、古人四十にして仕へ、七十にして致仕仕候事に候得者、御奉公之數、中三十年に御座候。私八歳にて御伽被召出、今四十六歳、其間三十七八年に御座候。八歳より十五歳迄は日勤之御

奉公仕、十六歳より三十三歳迄は隔日にて日勤同様繁多に相勤候。其間和田倉御番所へ四年越勤番仕、又は三十七八歳の頃、御用人被仰付候已來、又々繁多相成、出生候より四十六年之間、中五六年ならでは人並之義も出來不し申者に御座候。右之通唯粟を喰ひ、生て罷在候のみにて御座候。近來各様御當職に御就被成候より、當殿様へ被仰上方も御虛稱被下候事哉、御家督四五年後、始て御側近くも罷出、追々格外之御仁憐を賜り候義、銘骨難有仕合、全く各様方之御庇蔭と奉在候得共、右大御恩に奉報候義も無之義は、前書之通繁勤、犬馬之節相積、何程御鞭撻を受候而も、縛磨不仕鈍劍之如に御座候。縱令利劍に御座候而も、平日小刀にも鉤丁にも用候時は、終に大用には相立不し申候。まして不練之刀、有は有、なければ無きまゝに、骨かぎり用ひ來候驚馬に御座候得ば、能々病身罷成候次第、御憐可被下候。抑私十二歳之時(以下教材一八頁より二三頁)全く前爽鳩先生之恩澤に御座候。其頃は家中風儀不し宜、心得不し宜もの、若もの頭と相成、勤番ものを勧め、遊所通ひ致させ、又は御役相勤候ものは威光を借、上下を恣に仕り、又は奥向不取締り、又は古道具など世話を致、又は他の婚禮慶庵様の事を内食に志し、又元締共奢侈に相成、又は御家中之もの申合、強情の願事仕、

又歌三味せん之稽古仕、果は出奔御暇人など出来、必竟御政事漫弛致、御困窮之あまり、御家中之者如何様にも動きへすれば宜敷との事より、上役家おどしたりすかしたり致、下を取あつかひ被レ申候より、かくは相成候に而、誠に淺ましき御事にて御座候ひき。右之通之間、かれこれ八九十年計にても有レ之や、私二十六歳文政己卯也正月元日、鈴木孫助宅にて打寄致、私申候は、何分 上如此御困難、各方も拙者も今より心がけ候はば、御政道を扶植可レ致道可レ有レ之と、契約致候其節

見よや春大地も亭す地蟲さへ
と申句仕候。以下教材 二四頁より二五頁初行まで) 一事に思を定め申候。かくては御奉公仕候而は出来がたくと存、内内親共へ惣領のぞきの事内願致候處、以之外之義と被レ申候、かくても止がたく、とても此有さまにて、一助可レ相成二藝は出来がたく、ましてや天下第一人と相成候事出来不レ申、何も眼前小孝を盡し候よりは、古人游學の例にならひ、後後孝養を盡し可レ申、大道に於てさほどの間違ひも有レ之間敷と、ひそかに長崎表へ出奔之志を起し申候。其節書置之ためと存つまらぬ詩を作り、日記有レ之間、左に書し入二御覽一候。御笑可レ被レ下候。

莫嘯鶴試三鷗雲、決起槍檢初見分。
游子固知風木歎。花朝月夕何忘君。

小鳥の大鳥を學び候は、分限を不レ知ごとくなれ共、又志は滿べからずともいひ、つれづれ草に、物を思ひ立んには、事傷るゝをも顧るべからずとも存、行く所迄は行ても見たく、乍レ去家語に、子養んと欲れども親とまらず、木定らんと欲すれども風止まずと申事もあれば、一旦學び得たらんには、早歸府致、孝養仕度と申を、詩に致今や出んと存候。親父早く此様子をさとり心痛仕、太白堂・萊石・堀備後などへ相頼、私之心を解き候よし、其頃私夜中遅く歸り候處、親父病を抱へ途中迄迎ひに出候を、私早く相察し候得共、私に不知様に歸宅致、しらぬ顔にて私へ挨拶致候時、私も胸塞竊に兩袖を濕し申候。此一時に感じ、又々志もくだけは、其後親父御年寄役被レ仰付二間もなく大病に及、隱居仕候後は、引續大病に罷成、二ヶ年程は晝夜看病、萬事打捨申候。死後借財等之爲に、千辛萬苦申計も無レ之、家督後は又々世事逆境のみ相踵、終今年四十六歳之夢路をたどり、世に生れ出てより、前書之通心勞多慮之艱難を經、終に難治之病身ものと相成候。乍レ去老母義、右之通苦節を凌ぎ候故、他人之母とは拔群之勞、私ありて老後をも相養ひ候事、申迄にも無レ之、于レ然私

一昨年より益々疲勞仕、何分にも不慮の病にても生じ可レ申様に存、昨年弟死後は猶更之儀に御座候。萬一母より先に一大事トても出来候而は、死候而も游魂天に歸し不レ申、せめて御役義にても相願候て一年にても保養仕度候。畢竟萬一を存立涕敷願仕候にて御座候。其上右之仕合故、何ひとつ御政事の御裨益に可レ相動二道筋心得不レ申、重き御役に尸位罷在、恐怖至極に御座候。乍レ去其義は御勸辨をも賜り候而も、御大政扶持可レ仕學文出来不レ申、是迄心得候義は、晝事内食計に御座候。たとひ憤發仕候とも、日暮道遠く、其上病身相成致方無レ之候。

一、唯繪事にて推謀り存候に、(以下教材二五頁より終まで) 随分試み可レ申候。乍レ去其心より手足履背爪髮迄、皆一途存込候哉、其證據無レ之候而者、手を取て畫はか、せられ不レ申候。よしや一枚二枚はか、せ候とも、年百年中左様に可レ參様無レ之候。申さば寢て居、我を歩行かせて呉ろと申様なるものに御座候。右之通御家中中間に至る迄、何卒上を奉三存上二候様相成候時は、前に申惣身皆畫に相成候故、病身ものは病身だけの義も出来可レ申、又病身と惣身の内に付、剪て逃されも不レ仕候。或は右申様に、中間迄も左様に、殘なく 上を奉三存上二候様には不三相成二と被レ仰候半が、水を引ものは源

を不レ濁と申通、いかやうなる至愚なるものとて、己が呑み候水源を思はざるもの可レ有レ之哉、上の宜敷ければ己も宜く、影の形に従ふ如くに御座候。右之通三歳の童子にても、能々相分り候事の、左様に相成と不レ申は、各其歸する所愚昧には無レ之、風俗の然からしむるにて御座候。風は勢ひに生じ、勢ひは一致より出申候。一人悪く有レ之候得者、風俗を破り候は顯然なることにて候。然ば善といへども右之通に御座あるべく、恐多くも 上御一人より、御一途に御治安被レ思召一候得者、下は破竹の如く御座候。右御一途之被レ思召一候事は、いと御心易きことにて、却而道ならざることを御志被レ遊候得者、御思慮多難に相成、種々様々之御苦心生じ、御心安き日は更に無レ之、下たるものも、一二人道理之相分り候道理を解し候て、上合候得者。跡は又破竹の如に御座候。若従はざるも憂ふるに不レ足候。然らば上下一體、内外一致、即座相定り可レ申候。其證も至て見し易かるべし。右之通に存候得共、今諸侯、左様なる御事は更に承りも不レ及、さすれば其職に當り、前の並合出来合にて、天下と申大なる箱、諸侯と申小なる箱、士と申内のしきり、活物世界を死物にて治め候世の中に御座候故、帳面例書の繁多なるにても、能ありさまは相分申候。然る上は、割れ物は下の道具に遣ふ

べく、無疵ものは客前に卸し遣ふべし。病身ものは官散へ用、丈夫なるものは大職を授るがよいと申ものに可有之候。右世上之事に及候も、私此度其内願之通奉願こと故、何卒退役之後、此趣は誰れもく存候様に仕度と、太早計ながら申上候。唯々病氣快方之上は、何卒 御寸補にも相成度、差當保養仕、老母令終を心願仕候。何卒格別之 御仁慈を以、偏に御取計奉願上候。

11 参考二

碧瑠璃園作の歴史小説「渡邊峯山」中、本文の手紙にあはれて来る事實と關係あるもの二三を左に掲げよう。

○備前侯の御先供に當り打擲を受け。

虎之助は一圖に辰刻までに上邸へ歸りて若殿に今一椀の御業を參らせんと、それにのみ心を奪はれて、足早に歩み行く時、不圖出會ひたるは行裝美はしき諸侯の通行なりき。この大名は備前岡山の藩主池田内藏頭殿なりき。今日は何事かの佛事ありて、上野東叡山へ御參詣の途次と見ゆ。虎之助は慌てて道を渡らんとしたるが、如何したりけん、雨後の泥濘劬ねあがりて、前供の袴の裾にしとどかゝりぬ。「免させられ」と駈け寄りて言葉を掛け、「えらう疎忽を致しまし

た。「やい／＼」と前供に立ちたるは眼をみはりて、「おのれは目は無いか。このお行列が其の目へ入らぬか。」「思ひがけもない疎忽、平に御免下さりませ。」と、大地に手をつかんばかりにいふ。「これ、あやまつて濟むか。おのれ武士の魂に泥を塗つたぞ。これこの佩刀のこじりを穢したぞ。泥はねて佩刀のこじりにかゝり居たりき。」平に御免を願ひまする。「武士の魂に泥を塗つて、それであやまつて濟むと思ふか、これへ出え、これへ……。」「ハッ」と大地に跪いて、「誠に不調法を致してござる、平に御容赦を願ひまする。」供廻りの人数はばらばらと駈け寄つて、虎之助を取圍みぬ。この中に十三四と見ゆる前髪の少年一人交り居たるが虎之助の前へすつと進みて、「やい、おのれ兩刀さして居るな。何處の家來ぢや、名を名乗れ／＼。」と威丈高に罵りぬ。

かゝる處にて名を名乗らんは、家の恥辱、身の恥辱、主君の御恥辱と心にこらへて、「御免しを願ひまする。私名乗る名は持ちませぬ。」なに名を持たぬといふか、おのれ杉本殿の御佩刀を穢しながら、名乗る名も無いといふか、怪しからぬ奴ぢや。」と彼の少年は又口を極めて罵りぬ。

「姓名持たぬ程なりや、此奴主人も持つまいぞ。」杉本と呼ばれたるも、又、尾につきて、「主君持たぬ素浪人ぢやぞ。」とお

お素浪人か、みぢめな奴な。」と少年は虎之助の顔を覗き込んで「素浪人の顔御覽なされ。どこともなく勢がない。どこともなくひだるさうなは。」「え、ひだるさうな……。」と杉本は嘲るやうに、「昨夜から食ふ物に有りつかぬと見える。いとしい奴ぢや、この鐵拳喰はしてやらうか。」「お、」と少年は躍り上つて、「まづ拙者から振舞うて遣る。」

いふ言葉も終らぬ中に、堅めたる鐵拳を虎之助の頭上に加へられぬ。二つ、三つ、終りには牛手に頬を打搦えて、「どうぢや、ちつと腹が膨れたか。」虎之助は無言なりき。打たれても叩かれても、たゞ爲すがまゝに任せたりき。「いや、河村氏、まだ欲しさうな顔でござるぞ。」この情知らぬ少年の苗字は河村といふなりき。池田殿身内に河村某といふ者なりき。

「いかさま、さらば今度は貴殿のその硬いのを振舞はるゝかな。」「いや我等は。」と杉本はしたり顔に「別の物振舞ひする。」「えつ、別の物とは……。」「河村氏は鐵拳を振舞はれた。さるによつて我等はこの肥え太つた臍の肉喰はして遣るは。」と早や足を上げてハッと蹴ぬ。

されど虎之助は無言なりき。前齒に噛みたる唇より、たらたらと血の流るゝまでは彼は無念を堪へ忍びき。「は……。」と其處に群りし家人どもは高く笑ひて、「是でち

と腹が膨れたぢやらうな。」「欲しければもそつと遣る。どうぢや。」と河村は白い眼で見入つて、「まだひもじいか。」

虎之助は何を言はれても無言なりき。心は絶えも入る如くに堪ふれども、無謀に喧嘩するほどの小智にてはなかりき。大地に跪きたるのみ。手を出さず、口も開かず、宛ら影像の如く寂然たりき。

「さすがの浪人、もう腹が膨れたと見ゆるぞ。杉本・河村を先に立てて、前供の八九人はがや／＼と行き過ぎぬ。虎之助は蒼い顔、血走りたる眼、わな／＼と木の葉の風に揺ぐが如き唇、じつとこの一群の後姿を見送る時、池田侯の乗輿は近づき来りぬ。虎之助は道の側へ身を避けて、見るともなく視上ぐれば、黄金色したる銀、金物の燦然たる駕の窓を開けて見遣られし乗輿の主は虎之助と同じ年比なるべき若殿なりき。虎之助は今更ながら無念の涙に暮れたりき。彼の若殿とて神の御胤にてはあるまじく、我とても同じ人間に生を受けたり。しかもその懸隔は此の如し。上野へ御參詣の御途次ならん、供廻りの美しさ。さすがは幾十萬石の御主人たるべき態は見えたり。御年はまだ十二歳と見ゆるに、幾十人の御供に取りまかれて大道狭しと乗物を行り給ふ。我も亦同じ人間、しかも同じ程の年齢ながら、唯一椀の御業を我が君に參

らせたさに雨の暗夜を御下邸に辿り、朝の泥濘を御上邸へ歸る。身分の高下は生れぬ先よりの約束なれば己むを得まじきも、今の家人の振舞は何事ぞ。河村と呼ばれし少年、杉本といひたる前供、我を犬畜生の如く打擲して足蹴になしぬ。あはれこの恨み、あはれこの無念。……

虎之助は思はずも拳を握りぬ、拳を握りて奮然と立上りぬ。池田侯の乗物は早や上野の御門に近づきたり。「おのれ」と口の中に繰返して後を追ふべく一步進み出でし時、彼は鋭然として覺りぬ。彼のさとき心は何物かに觸れたる如く動きぬ。

「大名ばかりが尊くはない。大名の頭抑ふるものはいくらもある。大名の頭抑ふるものは……」……虎之助は血走るとる眼に遠く彼の乗物を見入りたりき。

○洗足の湯を沸し候とて衣服をこがし云々。

御前勤め終りて虎之助が家に歸るは初更なり、外にはちらちらと雪降りて、内には細き燈火消えんとす。襖もなく障子もなければ、庭の寒さは壁を穿ちて、家の中にも北風は漸瀝たり。一枚の破れ蒲團に瘦せやつれたる病苦を包みて淋しく横はる市郎兵衛(峯山の父)の側に五人の子供は枕を並べて打臥し、母は乳呑兒の助右衛門を懐に抱きて蕭然と坐り居たりき。

「虎之助か。」と重々しく呼びて、「今お歸りかの。」御前のお首尾かはる事もなく、今日も無事に退りました。「それは嬉しい事、さぞ寒からう。」と縁のとれたる火鉢を突き出して「此處へ来て當りやいの。」「いえ」と凛とした聲で、「私寒いことはござりませぬ。」それでも今日は甚う冷える。「お父様、御容態はどうござりますか。」相變らず良くなうて、私もとんと困り切つた。「と、お體は太い息を吐いたが、それに就いて、今日はそなたに話がある。」「えつ、私に……他でもないが、私は是から本所まで行かうと思ふ。」「え」とびつくりして、「お母様、何事でござりますか。この寒空に……ちらちら雪も降つて居りますか。」雪はおろか、恐しい槍が降つても、行かねばならぬ用があるはいの。「それは又いかなる御用事でござりますか。」是非叔父様にお願申さねばならぬ事がある。「本所の叔父様に。」と言葉を切つて、「それなれば私が参ります。」「いえ、そなたではならぬ。そなたは留守をしてたもるぢや。」「何故私ではならぬ。私でならぬ事ならお手紙戴いて参ります。」「いえ、手紙では辨じぬ事ぢや。」といふ目の中に涙を浮べて、「そなたは知るまいが、明日戴くお米が切れて居るわいの。」「え」と虎之助はうなだれて、「それは困つた事でござりますか。」「お米ばかりではない。

き……(中略)

(こゝに第二人を他家にやるについての悲しい相談が行はれる。)

「虎之助」と、市郎兵衛は悲しげに呼んで「その様に泣いてくれるな、そなたのその泣き聲が私の胸へひし／＼答へる。」と夜着の襟に目を拭ふ。「はい、もう泣きは致しませぬ。」と虎之助は齒をくひしぼりて「どうぞ叔父上のよいお便が聞きたいものでござりますか。」しかしそれを頼にするのが此方の無理ぢや、それも二度や三度の事ではないのぢや。」と市郎兵衛は吐息の底よりいひぬ。

「もしお首尾が悪うござりましたら、明日の朝はお早くお越し遊ばさねばなりませぬ」

「すると要之助も定吉も明日お寺へ参るのぢやな。」「へえ、その約束をして参りました。」「それでは御苦勞ぢやが、湯でも沸かしてくれまいか。」市郎兵衛は心強き言葉なりき。そのお湯で第二人の涙を洗ふのでござりますか。」と虎之助は又泣きぬ。「いや、さうでは無いが、母上もさぞ寒からう。お歸りになるまでに、お洗足の湯を沸して置くのぢや。」「ほんに雪は降る、夜は更ける。助右衛門様をおつれ遊ばして本所までの往復、お大抵の事ではござりませぬ。それでは若様、あ

お父様のお藥代、それからお父様はお粥も喉へ通らぬ故、お蕎麥をおあげ申さねばなりませぬ。その用意がないはいの。「あ」と虎之助は身に沁しみるやうな聲で、「情ない事ではござりますか。」「それに米屋の拂ひ、彼や是やを合はせると、どうしても二兩のお錢がなくてはならぬ。本所の叔父様にお願ひ申して、そのお錢を借りて参る。そなたきつと留守してたまや。」

いひ終つて目を拭ふ。燈火も亦しばたきぬ。「お留守はきつといたします。」と虎之助は深く母の心の中を思ひ遣りて、「なれど此の夜中に……」夜は更けても道はある。雪は降つても御飯なくてはかなはぬさ。」と、末子の助右衛門を背に負ひて、「お父様に氣を付けや。」「心得てござりますか。」「夜は更けても事さへ調へば歸つて参る。しかしお金の調はぬ時は……。」と悲しげに振返つて、「明日の朝になるかも知れぬ。」それも心得て御座りますか。」虎之助はきと引受けて、「權平(下男の名)をおつれ遊ばせ。」「いや、好いところへ参るではない、殊にお父様の御用もある。私はひとりで澤山ぢや。」「さらば御機嫌好う。叔父さまによりお願ひ遊ばして……。」いふのを後に聞き残して、お繼(母の名)は雪の降る門邊へ出でぬ。乳の少きに瘦せたる助右衛門は悲鳴を揚げて泣くなり

なには籠の下をおたき下さりませ。私は薪の用意を致しまする。」と権平は涙を見せじと面をそむけぬ。

「おゝ大儀ぢやの。」と虎之助は父の枕元をはなれて、破れたる籠の下に寄る。市郎兵衛は又言はず。権平は床板の僅に残れるを剝ぎ取りて悲しき焚き物の料を作るなりき。「さあ〜若様、焚き物が出来ました。今夜の様な寒い晩は是で凌ぐより他ござりませぬ。」

虎之助は籠の下に火を焚く中も書物を離さず巻き開きて床板の烈々と燃ゆる火に書を照らして読み居たり。「若様、やはり御書見でござりまするな。」少しの間も惜しいは。「それでは到底御本をお止め遊ばすことなませぬ。早う御成人遊ばしてお父様にもお母様にも温い御飯をお上げなされて下さりませ。」虎之助はそれに答へもなく、一念たゞ讀書に耽りき。

雪は小やみもなく降りしきりて、庭の松葉、瀬戸の篠の葉、南天、だうだん、その他の枝より崩れてはたり〜落つる音、眞夜中の淋しさを破りて聞え、戸の隙間より吹き入る雪は、あはれ子供等の打ち臥したる褥の上にとけて、こゝに寒き露を結びぬ。権平は籠の前にこくり〜と居睡りてありしが、やがて不意に眼を覺まして「若様、紙子臭うござります。なんぞ焼けたのではござりませぬか。」書物に心を奪はれたる虎

之助は何の氣も付かず「いや、そんな事は無い筈ぢやが。」権平は睡たさに目をすりつゝ、ぎろ〜と光る眼を睨りしが、「やあ、若様、あなたの御袖に火が着いて居りますぞ。」とおと驚いて見れば、天にも地にも唯一枚の紋付の袖にいつの間にか飛火やしけん、くす〜と焼け居たりき。

「若様早うお消し遊ばしませ。」権平はあわてたる聲にて言ひぬ。虎之助は驚き慌て、揉み消しぬ。讀書に心を奪はれたれば、心付かでありし中に、左の袖を方二寸ほど焼きたるなりき。若様、飛んでもない事遊ばしました。奥様お歸り遊ばしたらさぞお叱りでございませう。」権平、どうしようの、これぢや御前のお勤めもなにかねる。」「お召替も御座りませんのに、まあ飛んだ事を遊ばしました。権平も虎之助も焼けたる跡を恨めしげに見やるのみ、何とすべき様もなかりき。床板の薪に由つて釜の湯はわく〜とたぎりぬ。外には雪の軒端をうつ音聞えて、夜はほの〜と明けんとす。凍るが如き雀の鳴く音憐れなり。

「夜が明けたやうで御座りまする。」権平は戸くり明けて、「奥様、もうお歸りで御座りませうぞ。」叔父様のお救ひをお願し遊ばすと好いがのう。」「どうぞ吉左右が聞きたいもので御座ります。」「もしやお救ひが無かつたら、要之助と定吉

とは今日が此の世の見納めぢやの。」と、虎之助は焼けたる袖の上にはら〜と涙を流しぬ。

「誠におかはいさうなる事でござります。」すれば私は要之助を送つて行く、要之助は板橋へ参るのぢやの。」「へえ、要之助様は板橋の源正寺へお越でござります。」「お母様、おそいことの、お前お迎ひに行つて呉れぬか。」「へえ、参りますとも」と権平は裾端折つて起ち上る。この時「おゝ寒い。ほは冷い。」とお繼の聲して、門口の戸を引き開ける。「おゝ奥様お歸りでござりますか。」と権平は走り出る。

お繼は門口に下駄の雪を拂ひ居る。脊中の助右衛門は寒氣に打たれてひい〜と悲鳴を擧ぐる。虎之助は立ち上りて次の間へ出迎へんとする時、お繼は火の無き提灯を手に提げて、しを〜と臺所へ入り來りぬ。「お母様、お歸り遊ばしませ。ちやうどお湯もわいて居ります。御洗足遊ばしてはどうでござります。」「いえ、足は穢れて居ぬはいの。」「奥様、本所の首尾はどうで御座りました。」権平はまづ其の事を問ふなりき。お繼は明らかに答もなく、泣き入る助右衛門を脊中より下して、瘦せたる乳房をふくませながら、冷えたる手足を温むべく、籠の前に坐を占めぬ。

「お父様はな。」「まだ御寝なつてゐられます。」「おゝさう

か。」と後に續く言葉もなく、破れたる袖に涙を拭ひぬ。「お母様、叔父様の御返事は何とござりました。」「あゝ。」と太息をついて「どうしたらばよからうの。」「叔父様、お救ひはござりませぬか。」「もう私の頼みに耳を貸しては下さらぬ。」「えゝ、それでは...。」と虎之助は権平と顔を見合はせ、「二人の弟の運命は極りました。」「奥様、矢張り御納得はござりませぬか。」「なんとお願ひ申してもお聞き入れはないはの。」といふ中に頬を傳ふ涙瀧の如くなり。

「それではどうあつてもお二方をお寺へお上げなさらねばなりませんか。」と権平は今更の如く悵然といふ。「これも前世の因縁であらうはいの。」とお繼は諦めたる如く眼をしばたゝいて、「しかし乳呑兒を抱えて雪の中を本所へ行つたその苦勞は無駄でもなかつた。」と袂より一片の南鐐を取出して、「これは叔父様から虎之助へ御進物ぢや。」「えゝ私へ...。」「虎之助の學問に出精しやる事、叔父様いつの間にかお聞及びで、これを御褒美に下さるといふの。」「若様、これは矢張りお學問を遊ばさねばなりません。」と権平は笑ひ顔なり。

「私に御褒美下されて、家の危急をお救ひはござりませぬか。」「そなたの家は焼石ぢや。少しばかり水かけても何の役には立つまいと仰せなされて、私の頼みはとんとお聞入れ下

さらぬ。しかし虎之助は殊の外受がようて、この通り御褒美を下された。これも學問の徳ぢやはいの。「いえ、御孝行の徳でござります。」と、權平は口を添へぬ。

「虎之助」とお繼は改まつて、「そなたに下された御褒美ぢやが、當分私に貸して呉れねばなりません。」と、「はい」と優しく「お使い遊ばして下さりませ。」と「それでは借ります。」と更に自分の手へ取上げ、叔父様のお救ないと思れば、今日は二人をお寺へ送り届けねばならぬ。成人の後は兎も角も、まづ當座は音信不通ぢや、さればこれが親子兄弟永の別れ、せめては温い粥なりともたべさせたい。權平、御苦勞ぢやが、この南鐐で米を買うてたもらぬか。「へえ、一走りに買うて参ります。」とお神酒少し欲しいものぢや。「それも調へて参りませう。」もし恰好な乾物でもあれば、形は小さうても、尾頭の付いたのを三つ四つばかり頼むぞや。「畏りました。」「それから二人に持たせてやりたい持薬の熊膽丸と鼻紙少し忘れぬやうにな。母親の心付くべき小さき買物何くれと心付くるを、權平は唯心得て、破れ傘かたげながら雪の中を急ぎ行きぬ。その後を見送つて、「お母様、私飛んだ疎忽を致しました。」「えい、疎忽とは……。」「こんな事を致してござります。」と焼きたる袂を示したりき。

「やあ、存外な疎忽、外に掛けがへのない衣服、そんな事をしてなんとしやるぞ。」誠に悪い事を致しました、これからは氣をつけませう。どうぞ御勘辨下さりませ。」とお籠の前にでも居る時は何故飛火に氣をおつけなさらぬ。この様な見苦しい物を着て御前勤めが出来ますか。「はい。」と手をついて、「此の後は氣を付けませう。どうぞ御勘辨遊ばしませ。」と同じ詞を繰返しぬ。勘辨するにも外に着換の物はなし。あゝ鈍なことをしてたもつた。この御紋服もそなたの爲に調へたのではない。お父様の御禮服をいろ／＼仕立て直して、やつと袖の通るやうにした。それをよく知つてゐながら疎末すると云ふがありますか。「悪い事をいたしました。御勘辨下さりませ。」「南鐐一片敷く爲めに、雪の中を本所まで参つたその留守中に、一張羅の衣服を焼いて差引き何が残らうぞ。あゝ。」とその言葉が骨身にしみる程も辛く「飛んだ疎忽を致しました。」「一枚より無いお召し、そのやうな事をして今日から何を着よう心で居る。」とお繼は涙さへこぼして、「そんな事なら本所へ参らねばよかつたはい。」「お母様」と身を進めて「御勘辨遊ばしませ、私が悪うございました。」「あやまつて済む事でない。今日のお勤めをなんとしやるぞ。」……(中路)

(この間に市郎兵衛がお繼をなだめる。お繼ももう叱るま

いといふ。權平は使から歸る。

權平は口ごもつて、「奥様」と改まつたが、「若様、どう遊ばしたのでござります。何か悲しさうにお泣き遊ばしていらつしやいます。」「おゝ虎之助がな。」とお繼は身も世もあられず、「私が悪かつた。おめしはどうともする。心配せぬやうにいうてたも。」「へえ。權平は次へ退つて「若様、め、しくお泣き遊ばすものではござりませぬ。夫では却つて奥様に當付を遊ばすやうで、却つて御不孝になりませうぞ。」虎之助は焼けたる袖を顔に當ててさめ／＼と泣くなりき。……

五 鎮西八郎

1 解題

保元物語卷一「新院御所各門々固めの事附軍評定の事」から採つた。次に

1 作者

一切不明。佛教に關した記事や比叡山に關する記事が多い故を以て、作者を比叡山に關係のあるものと考へるのは淺い。作者が個人的に比叡山に關係があつたと見るよりも、事件や時相が比叡山と深い關係があつたと見る方が正當であらう。作者をきめるに就いて先づ問題とせねばならぬことは、

(イ) 作者は一人であるか、否か。
(ロ) 三卷全部が始めから一篇の物語であるか、否か。

の二點である。(イ)の問に對しては、歐羅巴の敘事詩の研究から暗示をうけることが多いのであつて、一般に敘事詩は個人之作といふのは少く、社會的產物で、多人數の手によつて成立發達したものであるといふことは、保元物語にもあてはめることができる。即ち保元物語は、始は一章毎に獨立した、場面的な

2

時代

ものが段々ときき上り、その全體を保元の亂の顛末によつて整頓し、更にその間の連絡や不足の點を書き足したものであるまいか、即ち「さる程に」といふ書き起しをもち、かなり長く、或まとまつた場面を描いたものは、一章として獨立したものであり、それが琵琶に合はせて語られ、更に次の藝題として事件の連絡には關係なく、場面的なものを取つてきて、一章としたものではあるまいか。これらの集積の外に、歴史・記録の考へから補つたものは、短いもの、事件的事實描寫のところではあるまいか。かくて物語的部分も歴史的部分も、各々數人の手が加はつてゐると考へられる點に、作者は一人ではないといふことが想像され、それと同時に、(ロ)の問も自ら解答されるのである。隨つて作者の詮議はなか／＼の難事となるのである。

成立が右の如くであるから、成立の時代も一點を指示することはできない。しかし「鎌倉時代文學新論」の著者野村八良氏は「愚管抄」卷三に「保元の亂ができ湧いたこと、及びその後のこと、又榮華・大鏡のあとのこともかき繼いだものがない。」といふやうな記事から、愚管抄の絶筆

3 他の戦記物との関係

貞應二年(一八八三)——(將軍頼朝の時)以後とし、平家物語の時代を實朝の歿する頃とし、保元・平治物語を平家より後とすることと矛盾しないやうに考へてゐる。

保元物語と平家物語・源平盛衰記との前後関係は大分古い問題であるが、題材としての事件の前後から作品の前後をきめるやうな素朴な見方をしてゐたのは昔のことであり、今は作品そのものから、どうしても保元・平家物語の方が平家より後であると考へられてゐる。その論據を一二あげて見ると、

○平治の文は平家の文より簡潔素朴である。これは平家の華麗絢爛が洗煉されて成つたのであらう。(藤岡)

○保元・平家物語と同じやうな語句がある。兩者を比較して見ると、平家の方がなだらかで、平安朝に近く、保元の方がごつ／＼して、鎌倉時代に近いといふのである。(野村)例へば、

坂東武者の習、大将の前にては、親死子討るれども願はず
彌が上に死重りて戦ふとぞ聞(保元、一、白河殿攻落)
軍は親も討たれよ、子も討たれよ、死ぬれば乗越え／＼た
たかふ候 (平家、五、富士川)

さて鳥を廻りて見給ふに、田もなし、畠もなし、葉子もなく、絹綿もなし。(保元、三、爲朝鬼島渡)
田もなし、はたけもなし、村もなし。(平家、三、有王島下)

是こそ義朝の女よなど沙汰せられ、恥を見んこそ心愛けれ、哀、高も卑も、女の身ほど悲しかりける事はなし。

あはれ、高きもいやしきも、女の身ほどいひがひなきこととは候はず。(平家、二、義朝敗北)
(平家、三、有王島下)

この比較研究は非常に面白い。これらの外にも、平家の冒頭を飾る

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。
沙羅雙樹の花の色、盛者心衰の理を顯す。
は保元・平家書にもある。

有爲無常の習、生者必滅の掟、始めて驚くべきにあらねども……釋迦如来生者必滅の理を示さんとて、娑羅雙樹の下にて假に滅度を唱へ給ひしかば(保元、一、法皇崩御)昨日の楽しみ、今日の悲しみ、諸行無常は只目前に顯れたり。(平治、一、信西出家)

兩者を比較して見るに、平家の方は諸行無常といふことを直觀し、それを一篇の基調としてゐるところから見ると、無常・淨土の思想がやゝ盛になり、知識階級又は文學者にまで理解された時代に於て、それを文學の眼目として古くない程度の時であつたと考へられる。然るに、保元・平家書の方は、平家からとつたと考へられるのみならず、一篇の思潮の一つとなつてゐる。即ち特に優越した思潮ではない點から考へると、もう無常・淨土は流行を過ぎてゐた時代ではあるまいか。

○本巻、一六、光頼卿參内のところを取扱ふときに、考へたことであるが、あの記事には天子といふ思潮が著しい。平家にはない。神皇正統記・太平記にはある。この點も平家を古しとする理由になる。

以上はすべて断片的の材料を根據としたのであるから、若しその部分が後人の加筆であるとすると、これらの議論はぐら／＼と崩れてくる。そこで觀察の方面をかへて、作品全體の見透しから論じて見る必要がある。藤岡博士はどうしても平家の方が先であると確信し、その説明として、繁から簡への學說を以てしたのであるが、博士をしてこの確信をさせたものは全巻の通讀から起つた印象説に基くものであつて、殊に文體が太平記に近いといふ説(鎌倉室町時代文學史——一六七)は卓見といはねばならぬ。そこで、保元物語全體の特性から戦記物の位置を考へることが出来る。

4 保元物語の特色

保元物語には文學的要素よりも史的要素が多い。即ち事件そのものの記述といふことを忘れてゐない點、題材となつてゐる人物の行爲を儒佛の教理に照らして批判してゐる點、これらは太平記に近い所以である。これを平家物語に比べて見ると、各章悉くが場面的でないのみならず、全體として、場面的といふよりは記録であり、日附が丁寧である點、勇者の扮装・勢揃へといつたやうなものが裝飾的といふより、事實の報告的である點、

義理と情とにからまる劇的の點のないこと、これらは何れも文學的要素に乏しい所以である。それ故、保元物語は平家の後なりとする断ずる前に、保元物語は大鏡・今鏡の系統をもうけて、後の太平記に連なるものであると考へたい。而して鏡物の批判意識はさまで強くないのに、保元物語のそれは毀譽褒貶に近いものであり、神皇正統記や太平記に見るやうな、時代的な史觀を萌して持つてゐる點で、平家物語よりは後であると断ずることが出来る。

5 保元物語と平治物語

兩書は三卷の編輯が同じであること、記事のすゝめが似てゐることなどで同一の作者であると考へられ、二書の題材としての保元・平治の兩亂の並列的であるのを併せ考へて、姉妹書の如く見られてゐて、何人も疑を挿んでゐない。しかし私の見るところでは、平治物語は保元物語よりも文學的である。これは保元の方が悲痛であり、事が皇室に直接の關係があるので文飾を許さなかつたのかも知れない。それにしても、平治物語は場面的であり、挿話的である上に滑稽味のあることは注意すべきである。例へば、

○卷一、信西子息關官の事の條の終に、太政大臣伊通公は滑稽味のある方であつて、いつも主上の御前で笑ひしい事をいつて君臣の笑を催してゐたが、今度武士たちが腕力沙汰で加階昇進したので、内裏にこそ武士ども仕出したる事もなければ、思の如

く官加階をなす。人を多く殺したる計にて官位をなさんには、三條殿の井にこそ多く人を殺したれ、などその井には官をなされぬぞ。」といつて笑つた。

○卷一、信西出家の由來の事の條に、信西が宇治の田原が奥に遁れ、死ぬる手廻しに穴をほつて身を隠し、竹管で空氣を通じて呼吸のできるやうにし、息の間にと念佛を唱へてゐたところ、出雲の前司光保が五十騎で探して來て掘り發して、京へつれて歸つたといふこと。

○卷一、光頼卿參内の事の條
頼光——光頼

頼信——信頼

○卷一、源氏勢汰の事の條

別當惟方——からだが小いので——小別當

主上を院内に押籠め

盗出す様をしたので

中小別當
↓忠別當

(太政大臣伊通が冷かした)

などいくらもあることである。

なほ兩書關係を考へるに手がかりとなるものは左の如き類似の描寫のあることである。

保元物語

教材に出てくる爲朝の建言

平治物語卷一、信西十息嗣官の事付除目の事並惡源太土洛の事

「信頼大いに悦んで」義平この除目に都合ふこと幸なれ。大國か小國か、官加階も思ひの如く進むべし。合戦も又能く仕れ。」と宣へば、義平申しけるは「保元に叔父鎮西八郎爲朝を、宇治殿の御前にて藏人になされければ、急なる除目かなと辭し申しけるは理かな。義平に勢を給はり候へ、安部野に驅向ひ、清盛が下向を待たん程に、淨衣計にて上らん處を眞中に取籠て、一度に討つべし。若し命を助らんと思はば、山林へぞ逃籠り候はんずらん。然らば追詰め追詰め捕へて、首を刎ね獄門に懸けて、その後信西を滅し、世も静りてこそ大國も小國も官加階も進め侍らめ。見えたる事もなきに、かねて成りて何かせん。只義平は東國にて兵どもに喚付けられ候へば本の惡源太にて候はん。」とぞ申しける。信頼「義平が申狀荒儀なり、その上安部野まで馬の足疲らして何かせん。都へ入れて中に取籠めて討たんずるに、程やあるべき。」と宣ひければ、皆この議にぞ従はれける云々。」

6 文體

戦記文が漢語を用ひ對句を用ひてゐるのは、平安朝文學に比較して著しい變化であるとされてゐるが、これは定説のやうである。

7 參考書

鎌倉室町時代文學史——藤岡作太郎

鎌倉時代文學新論——野村八良

2 編纂の用意

戦記文學の一なる保元物語より鎮西八郎爲朝勇戰の顛末を敘した一文を選んでこゝに置くこととした。

前課は渡邊崋山のまけじ魂を述べたものであり、本課は鎮西八郎爲朝のまけじ魂を述べたものである。崋山のまけじ魂は國事に、畫道にあらはれ、爲朝のそれは武事にあらはれた。而して崋山は遂に志士として、畫家として不朽の名を後世に傳へ、爲朝は武人として赫々の名を青史に残した。本課をこゝにおいた理由は、かゝる共通點を捉へて教授に入ることの生徒の興趣をそゝり、ひいて學習を容易ならしむる所以であることを信じたからである。若しそれ爲朝のゆゑしき武者ぶり、及びその周到なる思慮分別については、次項要旨中に述べたとほりである。よろしく就いて参看せられたい。

3 要旨

源爲朝の鎮西に於ける剛勇な活動と、今日の軍評定に於

ける猛々しい武裝と面貌と、殊にその建議の模様について知らしめ、且、當時の武士の氣風や、朝廷に對する武士と公卿との權威の輕重なども考察せしめたい。又、爲朝が決して蠻勇一遍の男でなく、立派な思慮分別ある武士であつたことの、本文の處々に於て表されてゐるのにも注意させたい。その主題となつてゐる軍評定の後に爲朝が一人で言つてゐることが、恰も豫言のやうに的中して來るところから推察しても、爲朝の建議は「もつての外」の荒儀ではなかつたのである。保元の亂の勝敗の因の一つが、かういふところにもあつたのかといふことも考へさせて、武裝・武器・合戦に關する知識と共に、戦記文學が與へてくれる特別な興味をも悟らせたい。

4 概説

第一節(二六頁——二七頁一〇行) 新院御所の各門固めの事。爲朝は最も危険の多い西の河原表の門を固めた。
第二節(二七頁一行——三〇頁一行) 爲朝の武勇談。その鎮西にやられる次第、その地に於て蠻勇を振ふ話、都に上つて來て今度の軍に召される事。

第三節(三〇頁二行—二行) 軍評定に臨む時の爲朝の
面貌、服装。人々の見物。

第四節(三〇頁一二行—三四頁) 軍評定の場。先づ頼長
の間に對する爲朝の建議。之に對する頼長の非難と、
意見。爲朝の御前退出後の言。

5 取扱上の注意

概説で記したことを更に約すると、本章には凡そ三つの
トピックがある。

- 一 爲朝の過去 (挿話的)
- 二 勇 姿 (語物的)
- 三 建策の用ひられないこと

右の内最も讀者の心に残るものは(三)である。折角、
名將が建言しても、社会的地位のよいものの反對のため
に用ひられない。それでも名將は忠實に戦ふが、大勢は
どうすることも出来ない。そこで讀者は惜しいことをし
たと考へ、一層その名將をたのしく考へる。讀者の心
には名將の建言が採用された場合を考へ、建言が用ひら
れなかつたから負けたけれども、若し採用されたら立派

に勝てるといふだけの暗示を残しておいて、實際の記事
は反對になつてゐる。讀者はその暗示を辿つて行く。こ
の作業が、單に爲朝の勇姿を見せる場面的な單的なこと
よりも強い印象を與へる。右のやうな作意は平治物語
にもある。楠木正成の場合もさうである。アレキサンダ
ー大王がペルシヤに侵入したとき、ギリシヤの史家であ
つて、ペルシヤの顧問であつた Memnon は小亞細亞を
敵にまかせ、フェニシヤの海軍を利用して敵の後方連絡
を絶つべしと獻言したが用ひられなかつた話もある。正
成は戦死した。ペルシヤは敗れた。けれども何れも面白
いお話として残つてゐる。例へば、「口惜しきことかな」
爲朝が御前退出後の言葉は、この一語で終つてゐ
る。まことに、爲朝が頼長の意見について言つた言葉
は、一々尤もである。何故に一步進んで頼長の面前でこ
れを言つてくれなかつたかと残念でならぬが、悪左府と
まで呼ばれたこの頼長の權威には、流石の爲朝も、かう
後で遺憾の意を表すより外仕方がなかつたと見える。わ
れ等も、それが當時の軍評定といふものであつたかとう

なづくより外致し方がない。

しかしこの「口惜しきことかな」の眞情は、次に卷二の
「白河殿義朝夜襲に寄せらるゝ事」の條に至つて事實にな
つてあらはれてゐる。義朝の軍が先手を打つて押寄せた
といふ注進に接して「爲朝が先度申しつるはこゝ候、こ
こ候」といつて、爲朝は怒つたといふが、實に尤も千萬
なことである。本課の取扱ひに當つては、この條のこと
を附説して、爲朝に同情させたいものである。

又、國文學史上、保元物語の戦記文學としての位置を語
り、挿畫を利用して武装・武器に關する知識を確實にせ
しめることも、本課に於ける一つの仕事であることは絮
説を要すまい。

6 設問

- 1 「我は親にも連るまじ云々」この言葉によつて窺はれ
る爲朝の面目に就いて説明せよ。
- 2 また、その「連る」といふ動詞は、今日でもかく用
ひられてゐる場合があるか。(父は太郎を連れて行く。
學問が發達するに連れて、一般文化も進歩す。)

- 3 爲朝の思慮分別の表れてゐる語句を指摘せよ。
- 4 次の語句を解釋せよ。
 - イ これこそ猛勢なるべきが、嫡子義朝に附いて多分
は内裏へ参りけり。
 - ロ 親の科に當り給ふらんこそあさましかれ。その儀
ならば我こそいかなる罪科にも行はれんすれ。
 - ハ 主上の味方、心にくゝも候はず。
 - ニ、父不孝す。形の如く。弓は養由をも恥ぢず。

7 釋義

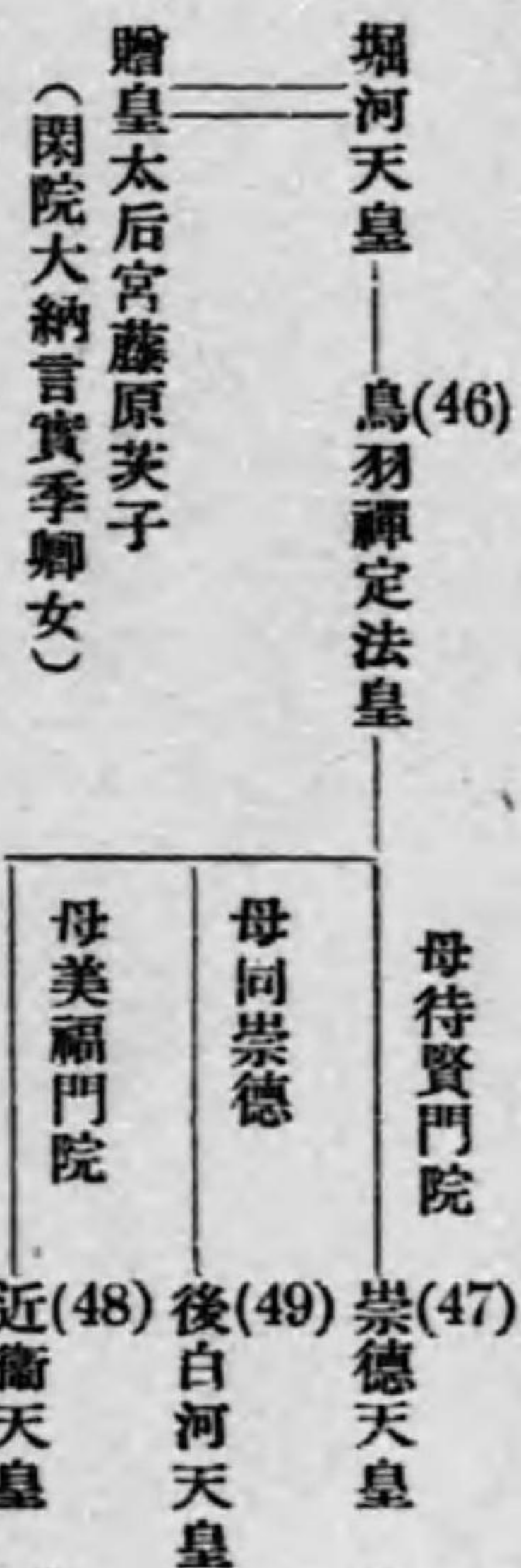
【鎮西八郎爲朝】 源氏の武將。爲義の第八子。人となり魁
偉、膂力衆にすぐれ、最も射をよくした。幼時事によつ
て父に追はれ、豊後に奔つた。かくて自ら鎮西八郎と稱
し、九國總追捕使となつて九州を劫掠した。保元の亂、父
と共に崇徳天皇に御味方し、白河殿に参じたが、上皇の
軍敗るゝに及んで伊豆の大島に流された。爲朝は大島に
あつて伊豆の諸島を劫略し、遂に伊豆介工藤茂光の討伐
を受けた。そのとき彼は大箭を放つて一艦を沈め、家に
歸つて自殺した。一説に、舟遊中漂流して琉球に至り、

子孫がその地に王となつたともいふ。

【新院】 シンキン。崇徳上皇。第七十五代。御諱は顯仁。

鳥羽天皇の第一皇子。御母は新待賢門院藤原璋子。保元四年受禪御即位。時に御年五歳。永治元年御讓位、保元元年保元の亂の事によつて御落飾、讃岐に遷幸。長寛二年（一八二四）八月同國志度宮で崩御。御年四十六。同國綾歌郡白峯陵に葬り奉る。よつて世に讃岐院と申す。保元の亂 後白河天皇の保元元年（一八一六）京都白河殿に於ける事變。鳥羽法皇は御子崇徳上皇を愛し給はず、遂に強ひて皇位を天皇の御弟近衛天皇に譲らしめ給ひ、近衛天皇の崩後、

崇徳上皇の御期待に背いて後白河天皇をお立てになつたので、上皇は甚だ御不平であつた。一方攝關家では、左大臣藤原頼長は父忠實に愛せられ、兄忠通を凌いで内覽の宣旨を蒙つたが、驕恣の故を以て鳥羽法皇に忌まれ、後白河天皇の御即位と同時に内覽の宣旨を止められたので、崇徳上皇にお縋り申して再び政權を掌握しようとした。かくて保元元年鳥羽法皇の崩じ給ふや、崇徳上皇は頼長と謀り給ひ、源爲義、その子爲朝及び平忠正等を召して兵を白河殿に集め給うたが、後白河天皇方の源義朝（爲義の長子）・平清盛（忠正の甥）等の夜襲に遭つて大敗したまうた。かくて頼長は流矢に中つて斃れ、上皇は讃岐に遷幸、忠正・爲義は刺され、爲朝は伊豆の大島に流された。



【齋院の御所】 新院は七月九日の夜、白河の前なる齋院の御所へ御幸あつてこゝにおはした。この御所は賀茂川の東、今の聖護院の西にあつた。「齋院」とは、皇女又は女王で、賀茂の社に仕へたまふお

方の稱。又、そのおはします處をいふ。
【北殿】 キタドノ。白河の北殿。その位置については、平安通志に、「今の聖護院町紡績所の西に當る。」とある。新院は齋院御所にゐたまふこと一日、手狭であるので、

翌十日こゝにうつらせられた。その翌十一日黎明に、主上方からこの白河北殿へ夜襲があつたのである。

【左府】 左大臣藤原頼長。太政大臣藤原忠實の第二子。博覽強記、學古今を兼ねてゐた。諸官に歴任して、久安五年左大臣に進んだ。深くその父に愛せられ、その養女多子を納れて近衛天皇の皇后となし奉り、又、兄忠通に代つて氏長者となり、仁安元年内覽の宣旨をさへ蒙つたが、驕恣の故を以て漸く鳥羽法皇に忌まれ、後白河天皇御即位の際遂に内覽の宣旨を停められた。そこで崇徳上皇に勸めて保元の亂を起したが、戦敗れて自殺した。年三十七。世に宇治左大臣といひ、又悪左府ともいつた。「悪左府」の「悪」は、兄忠通を凌ぎ、且權勢が強かつたから、冠らせて呼んだ語である。

【白河殿】 白河法皇の御所であつた宮殿。京都市二條通の北にあつた。平安京の園苑中、特に花木の勝を以て世に聞えてゐた。

【河原】 カハラ。賀茂の河原。賀茂川沿の河原。納涼地として古來名高く、謂はゆる賀茂川情緒の豊かなところで

ある。

賀茂川は又加茂川・鴨川とも書き・修して鴨水・洛水ともいふ。京都市内の東部を南北に貫流する川。源を葛野郡雲畑村岩屋及び鞍馬山に發し、桂川となつて、淀川に注いでゐる。平時は水が少くて河原が多い。謂はゆる賀茂の河原とはこれである。

【春日の末】 カスガのスエ。春日通の町はづれ。(教科書齋頭の挿圖参照。)

【南の大炊御門表】 ミナミのオホヒミカドオモテ。北殿の南方、大炊御門通の外部。(教科書齋頭の挿圖参照。)

【東西】 参考保元物語には「東向」とあるが、誤らしいので、かく改めた。

【平馬助忠正】 タヒラウマノスケタマサ。忠正は右馬寮の助(次官)で、平氏だから、かやうにいふ。

忠正は正盛の次男で、清盛の父なる忠盛の弟である。それゆゑ、清盛に取つては叔父にあたる。

【父子五人】 長男長盛、次男忠綱、三男正綱、四男通正、以上四子と自分とで都合五人である。

【多田藏人大夫頼憲】 タマクラウドノタイフヨリノリ。「多田」は攝津の地名。「大夫」は五位の通稱。それゆゑ、藏人大夫は五位の藏人である。

「頼憲」は源氏。行國の子。

「藏人」は又、クランドともいふ。禁中近習の職で、機密の文書及び訴訟を掌り、又天皇の御衣・御膳から總べての御起居に供奉し、傳宣、進奏及び除目・諸節會の儀式、その他すべて殿上における一切の事を掌る。長官を藏人頭といひ、その下に五位藏人(藏人大夫)と六位藏人とがある。

【都合】 ツガフ。ひつくるめて。あはせて。すべて。總計。

【六條判官爲義】 ロクデウハウグンタメヨシ。源爲義。檢非違使尉(判官)に任ぜられ、京都の六條堀川に住んでゐた。よつて六條判官といふ。

「爲義」は源氏の武將。義家の孫。義親の長子。幼少から武功を立て、保安四年檢非違使尉(判官)に任ぜられ、從五位下に敘せられた。保元の亂、その子頼賢・爲朝等を率ゐて崇徳上皇の召に應じたが、その子義朝等の夜襲を受けて大敗し、亂後義朝の爲に弑せられた。年六十一。

【父子六人】 おのれ(爲義)と、四郎左衛門尉頼賢・五郎

掃部助頼仲・賀茂六郎爲宗・七郎爲成・九郎爲仲とあはせて六人。

八郎爲朝は西河原表の門をかためてゐるから、これを除いたのである。

【嫡子】 チャクシ。正妻の腹から出た長子。よつぎ。あとつぎ。嗣子。

【義朝】 ヨシトモ。源氏の武將。爲義の長子。保元の亂、後白河天皇の御味方に加はり、父爲義、弟爲朝等が崇徳天皇の御味方をして守護してゐた白河殿を夜襲して大勝した。後、藤原信頼と結び、平治元年(一一一九)平清盛の熊野に赴いた不在に乗じて事を擧げ、後白河上皇並に二條天皇を幽し奉り、藤原信西を殺し、自ら播磨守となつた。しかし、間もなく平重盛に敗られて東國に奔り、尾張で舊臣長田忠致に殺された。年三十八。

【これこそ猛勢なるべきが云々】 「これ(爲義の軍)こそ猛勢なるべき(はずなる)が、僅に百騎ばかりに過ぎざりしは(武士ども)嫡子義朝につきて多分は門裏へ参りける故なり。」といふ意。

「これこそ猛勢なるべきが」については、これに對する結(用言の已然形)のかくれてゐる點について説明を與へられたい。

「猛勢」(マウセイ)は、(一)たけき軍勢。(二)たけいきほひ。こゝは、(一)の意と見るがよからう。

【内裏】 ダイリ。宮中。禁中。但しこゝでは、姉小路と西洞院との辻にあつた高松殿をいふ。後白河天皇は當時この殿におはしました。

【我は親にも連るまじ、兄にも具すまじ】 この「連る」「具す」は共に自動詞。これらの動詞は自他同形であるから誤らぬやうにさせたい。この場合の「連る」は從者を引連れて行く等の「連る」ではなくて、「一緒に行く」意。「具す」も人を召具す意ではなくて、自ら進んで共に行く意である。

【功名不覺も紛れぬ様に】 功名をたてても、不覺を取つても、それが皆のものにまぎれないで、はつきりとわかるやうに。

「功名」(コウミヤウ)は、いさをとでから。いさをを立

てて名をあげることを。

「不覺」(フカク)は油断して失敗すること。

保元物語・新院爲義を召したまふ條に「冠者ばらをさしつかはして鎮め候ひき。これ爲義が功名にあらず。」十訓抄卷十に「たゞ不覺ならむもの咎を宥して、能なき輩をもあはれみはぐくむべし。」

【一方は射拂はんするなり】 「一方をば射拂はんとするなり」の約略。「きつと一方を射拂つてお目にかけます。」といふほどの意。

【西の河原表の門】 参考保元物語の異本には「西の門をば爲朝一人して承る。西表は河原なり。爲朝父子これを固む。」とあつて、本文とちがふ。本文の方が正しからう。後段に殊更大事の門を固めたとある。河原表は内裏の方に對する門だから、最も大事な門であつたらう。

【北の春日表の門】 北方なる春日通に向つた門。(教科書齋頭の挿圖参照。)

【左衛門大夫家弘】 平氏。下野判官正弘の子。家弘は、當時左衛門尉で、五位に敘せられてゐた。よつて左衛門大

夫といふ。「大夫」は五位の通稱。

【件の男】 クダンのヲトコ。前のくだりに述べた男、こゝは爲朝をさすこと、いふまでもない。

【件】は「クダリ」の撥音便。前文に挙げた事項。前の箇條。

枕草子卷七に「進上、へいだん一つみ、例によりて進上件の如し。少納言殿。」

【器量】 キリヤウ。こゝでは體格の意。保元物語八の卷にも、「爲朝冠者は器量人にすぐれて、常の鎧は身にあはざりけり。」とある。

【剛】 ガウ。つよくたけきこと。剛勇・剛毅などと熟する。

【強弓】 ガウキユウ。引くの強い力を要する張りの強い弓。又、その弓をひく人。つよゆみ。

文徳實錄、五、仁壽三年八月壬午の條に「河成、本姓余、後改百濟。長於武猛、能引強弓。」

【矢つぎばや】 矢を弓の弦につきかへることの早いこと。又、その人。矢をつけて射るわざの早いこと。

【手利】 テキ、手のきくこと。わざまへのすぐれてゐる

こと。わざのたくみなこと。又、その人。

平治物語、待賢門の軍の條に「八町次郎とて、大力の剛の者、早走りの手きいあり。」

【弓手の肘馬手に四寸延びて】 左手の肘が右手よりも四寸も長いことをいふ。

【弓手】(ユンデ)はユミテの撥音便、弓を持つ方の手即ち左手の稱。

【馬手】(メテ)は馬の手綱を持つ方の手即ち右手の稱。

【矢束】 ヤツカ。矢の長き。一束は一にぎり。矢はこれを基本として、その長さをはかり、十三束・十五束などといふ。

【束】は「捆む」の義。四本の指で握つた程の長さ。古はこれによつて物の長短を測つてゐた。そく。

今昔物語、二十五に「弓を矢束のある限り引きたまひて、矢を放ちたれば。」

【不敵】 フテキ。物に恐れぬこと。又、そのもの。敵を敵とおもはぬこと。又そのもの。

【大膽不敵】などと熟しても用ひる。

源平盛衰記卷三十六、鷲尾一谷案内の條に「子息の小冠者は不敵の奴。」

【兄にも所を置かず】 兄義朝などに對しても、場所をゆづらぬ意で、その態度の不遜なことをいふ。

【旁若無人】 バウジヤクブジン。「旁に人無きが若し」の義。人前をはからずに振舞ふこと。

史記の刺客傳に「高漸離擊筑。荆軻和而歌於市中、相樂也。已而相泣。旁若無人。」

【高漸離】は支那古代の名高い樂人。筑を撃つことに巧であつた。「筑」は箏に似た樂器。竹を以て撃ちならす。

【荆軻】は支那の古の刺客、衛の人。燕の太子丹の爲に秦に使用して秦王を刺さうとしたが、事成らず、遂に秦の宮殿中で刺された。

【不孝して】 フケウして。不孝ものとして。勘當して。

砂石集卷一下に「父母これを聞きて、大いに怒りて、やがて不孝したりければ。」

謡曲、小袖會我に「時致は不孝の身なれば……。」

【鎮西】 チンゼイ。九州の稱。この稱は聖武天皇の天平十

四年(一四〇二)太宰府を廢して、翌年筑紫鎮守府を設け、鎮西將軍を遣はして防備に任せしめたのに起つた。後年太宰府の再置された後も、長く九州の異稱となつた。

【追下す】 「オクダス」とつめてよむ。

【めのと】 傳。もと乳母の意であるが、こゝは轉じて、おもりをする人、傳育の任にあたる人、後見人などいふほどの意。

増鏡卷下に「内の御めのとの吉田の前大納言定房。」

【阿曾平四郎忠景が子に云々】 「阿曾平四郎忠景の子に三郎忠國といふがある、(爲朝は)その忠國の塔になつて。」といふ意。

【九國】 西海道なる筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩の總稱。九州。

【總追捕使】 ソウツキブシ。一國或は數國の檢察事務をつかさどる追捕使。

「追捕使」は王朝時代に臨時におかれた職名。非違檢斷の事を掌つた。國司や郡司の中から武力や才能のあるものを選んでこれに補任した。又一郡・一郷・一社・一寺にも

これを置いた。貞信公記の承平二年（一五九二）四月の條に、はじめてこの文字が見えてゐる。

なほ詳しくは武家名目抄の職名部を見られたい。

【筑紫】 ックシ。(一)兩筑(筑前・筑後)地方の稱。(二)九州の總稱。上代には今の九州の總名と兩筑地方の名稱とに用ひ、前者は筑紫洲、後者は筑紫國といつた。文武天皇の御代はじめて西海道を置き、上述(九國の條参照)の九國とした。

【菊池・原田】 共に源平時代九州に勢力をもつてゐた豪族。



【案内者】 アンナイシヤ。道しるべをする人。手びきをする人。

【香椎宮】 カシヒノミヤ。官幣大社。福岡縣糟屋郡香椎村(福岡市の南四軒)に鎮座。祭神は仲哀天皇並に神功皇后。聖武天皇の神龜元年

(一三三四)の創祀と傳へられてゐる。古來香椎廟と稱して朝廷の崇敬殊に深く、宇佐八幡宮に准ぜられ、國家大事の際には必ず勅使を御差遣遊ばされた。本殿は謂はゆる香椎造で、特別保護建造物である。境内には名高い神木「綾杉」がある。例祭は十月二十九日。春秋に獻魚式の神事が行はれる。

【神人】 神に奉仕する人。神職。神主。かんぬし。

【久壽元年】 近衛天皇の御代。(一八一四)

【徳大寺大納言公能卿】 藤原氏。實能の子。名高い歌人。永曆元年累進して左大臣に任ぜられた。應保元年(一八

一三二)薨去。

【上卿】 ジャウケイ。宮中に公事のあるとき、大臣や大中納言の中で、臨時にその事を専ら奉行すべく命ぜられるもの。

【外記】 ゲキ。太政官の主典で、大外記と小外記とある。恆例や臨時の大小公事の詔書奏文を勘造し、局中に記録することを掌る。

【宣旨】 センジ。天皇の御命令を宣すること。勅命を直に

頭の辨に下されるのを口宣といひ、頭の辨がこれを上卿に傳へるのを口宣案といひ、上卿がその旨を受けて外記に下知するのを宣旨といひ、外記がその旨を書して出すのを給旨といふ。

参考保元物語には、「宣旨年日未詳」所據。爲義解官年日、亦恐妄也。百鍊抄云、久壽二年四月三日：「台記久壽元年十一月二十六日：「據三書說、則久壽元年爲義解官、至明年一賜宣旨二耶。餘無所考。」とある。

【宰府】 サイフ。太宰府の略。太宰府は昔西海道(九國二島)の政務を總理し、邊境を警備し、外交の事を掌つた官廳の名。その遺址は福岡縣筑紫郡水城村にある。こゝは「太宰府地方」を大凡にいつたものと見てよからう。

【忽諸朝憲】 テウケンヲコッシヨニシ。朝廷のおきてをないがしろにしてこれに違はぬこと。

「忽諸」は本來、忽然として滅亡する義で、「諸」は助字に過ぎないが、忽諸(コレヲユルカセニス)といふ義に誤り轉じて、「ゆるかせにす」といふ意となつた。こゝはその意である。

左傳の文公五年に「臯陶庭堅、不祀忽諸。」(本義)

東鑑卷十九、平家追討院宣の條に「彼一類者、皆非忽諸朝憲失神威與佛法。」(轉義)

「朝憲」は國家の組織及びその行動の大綱に關する法規。國家の根本法規。國憲。

梁書の謝幾卿傳に「會意便行、不拘朝憲。」
【威】 コトゴトク。一から十まで。のこらず。皆。

【綸言】 リンゲン。天子の御詔。「綸」は組絲。天子の御言はそのもとは絲のやうに細いけれど、その出でて四方に傳はるに及べば、綸のやうに太くなるとの意。

禮記の緇衣に「子曰、王言如絲、其出如綸、王言如綸、其出如絀。」
西宮紀の臨時二に「詔書・勅旨同是綸言。」

【臯惡】 ケウアク。暴惡。猛惡。「臯」はふるふ。親鳥でも食ふといふ惡鳥。よつて暴虐、暴惡などの意に轉用する。

平家物語卷一、二代後の條に「これも世澆季に及びて、人臯惡を先とするがゆるなり。」

【狼藉】 ラウゼキ。物の亂雑なさま。轉じては亂暴の甚だしいことにいふ。

通鑑演義に「狼藉^{キテ}草而坐^ス。去則穢亂^ス、故云^フ。」

史記の滑稽傳に「履烏交錯、杯盤狼藉。」

【早可^ク使禁^ム進^ム其身^ヲ】 「早くその身を拘禁して連れ参るべし。」といふほどの意。

【宣旨執達如^シ件】 「前にのべたやうに、宣旨をとりつぎ奉る」との義。

【執達^シシッタツ】 は文書を取りつぐこと。上の意を受けこれを下に傳達すること。

【参洛】 サンラク。洛に参る義。上洛。入京。上京。

「洛」は支那古代の都。洛水のほとりにある。はじめ周公がこれを經營した頃は洛邑といつてゐたが、後漢の頃よりは洛陽と改めた。今の河南省河南府の地。我が國では京都をこれに擬して洛陽といひ、京都に赴くことを参洛、上洛などといふやうになつた。こゝもその義である。

【解官】 ゲクワン。音便でケクワン。官職を解くこと。免官。

【前檢非違使】 ゼンケビキシ。解官せられた結果、「前」の

一字が冠せられたのである。

「檢非違使」は古昔京中の非違の檢察を掌つた職。祭祀・法會などの場に臨み、或は道路・橋梁を巡視した。又糺彈・追捕・斷罪・聽訟の事をも掌つた。

その長官を別當といひ、下に佐・尉・志・大長・看管長・案主長・放免等の職員があつた。

【あさまし】 こゝは「なさけない。」といふほどの意。

【我こそ云々】 「自分はどのやうな罪科（ツミトガ）をも、あまんに受ける。」との意。「行はれんずれ」は「行はれんとすれ」の約。

【上洛】 ジャウラク。「参洛」に同じ。その條參看。

【上聞^シ穩便^{ナラズ}】 おかみへのきこえがおだやかでない、との意。

「上聞^シ（ジャウブン）は君主の御耳に入れること。君主へきこえ。上聽。

韓非子、五蠹に「令尹誅^セ而楚姦不^レ上聞^セ。」

【穩便^シ（ランビン）はおだやかなこと。おだやかでかどだたぬこと。

舊唐書の食貨志に「仍^ツ各、逐^シ穩便^シ收貯^ス。」

【形の如くに】 ほんの形式だけに。

【召具しけり】 原文にはこの次に左の一節がある。

傳子の箭先拂の須藤九郎家季、その子隙間數の惡七別當、手取の與次・同じき與三郎・三町^モの紀平次大夫・大矢の新三郎・越矢の源太・松浦次郎左中次・吉田兵衛・打手の紀八・高間三郎・同じき四郎を始として、二十八騎をぞ具したりける。

【目角二つ切れたるが】

(一) 目頭と外眦とが角立つて切れたやうになつてゐること。

(二) 目尻が二筋にわかれてゐること。

こゝは後の方の意であらう。

【獅子の丸】 シ、のマル。獅子の形を丸くした模様。

【直垂】 ヒタタレ。鎧の下に着る鎧直垂。錦又は絹などで製し、裾と袖との端を緒でくゝる。袴は短い。

この外、通常禮服に用ひる直垂もあり、又布直垂といふものもある。

【八龍といふ鎧】 八龍は源氏重代の鎧八領の中の一。

この鎧については、種々の説がある。

本朝軍器考卷九に「八龍は黒絲にて威しし鎧のよし見えたれど、保元物語の一本には、八龍とは龍を八つ宛打つて一の板につくる故なりと見え、平治物語にも八龍を八つ打つて附けぬるよし見えたり。」とある。

その他なほ種々の異説がある。

保元物語の「新院爲義を召さるゝ事」の條に「爲義今度は最後の合戦と思ひければ、重代の鎧を一領づつ五人に着せ、我が身は薄金をぞ着たりける。源太が産衣と膝丸とは嫡々に傳ふる事なれば、雑色花澤して下野守の許へぞ遣はしける。爲朝冠者は器量人に勝れて、常の鎧は身に合はざりければ、着ざりけり。」とある。

されば、爲朝は、「別に八龍」に似せて大きく身にあふべき鎧を作つたものと見える。

【白き唐綾を以て緘したる大荒目の鎧】 白い唐綾で小札をつゞりあはせた、目のあらい鎧。

「唐綾（カラアヤ）とは、普通の綾地に細かい模様を浮かせて織つたもの。

【臧す】(ヲドす)は「緒通す」の義。鎧の小孔(コサネ)を糸又は革などでつゞり合はせること。

【大荒目の鎧】は、鎧の札(サネ)を大きくして、その間を荒く臧したるもの。常の鎧よりは厚くて重い。

異本には「唐綾を太く疊んで臧したる。」とある。又、「白を「黒」としたるものもある。

【同じき獅子の金物】前に「獅子の丸」とあるのをうけて

いふ。同じく獅子の模様をついた裾金物の意。

【裾金物】とは、鎧の草摺

又は袖の菱縫板の両端と

中と三所に打つた飾金物

又、冑の鍔(シコロ)の

菱縫板にもつける。

異本には「獅子の丸の裾

金物白覆輪なるを着た

り。」とある。

【着るまゝに】着ながら。又、着たるが上に。



鎧の札



獅金物

【熊の皮の尻鞘入れ】熊の皮で作つた尻鞘をはめて。

【尻鞘】(シリザヤ)とは、雨露を防ぐ爲に太刀の尻を覆ふ

袋。毛皮・革又は布

で造る。しんざや。

しざや。しつさや。

挿圖鎮西八郎爲朝の

後につき出てゐる獸の尻尾のやうなものがそれである。

異本には、「熊の皮の尻鞘入れて帯いたり。」とある。

【五人張の弓】四人は弓をため、一人は弦をかけるのを、

五人張といふ。強弓である。

【七尺五寸】この長さは普通である。爲朝の如き大男で弓

が割合に短いのは、弓の強きを欲したからである。

異本には「八尺五寸」とある。

【鈇打つたるに】「鈇」は折釘。矢のはづれぬためにとて、

弓の握りの上へ折釘を打つたのである。

【三十六差したる】普通は二十四、二十五。然るに矢數の

多いのは、普通ならぬ手利だからである。

【差したる】は「簾に入れたる」をいふ。



【黒羽の矢】鶯の黒い羽を以て矧いだ矢。
【兜】カブト。「冑」も書く。武器の一種。昔、戦争の際頭上にかぶつて敵の刺撃を防いだもの。種類が多く、古今の變遷も亦少くない。
【郎等】ラウドウ。れかもの。家來。從者。郎從。郎黨。朝野群載卷二十二に「郎等之中選定清廉勇士。」
【樊噲もかくやと云々】彼の前漢の大勇士樊噲もこの爲朝のやうであつたらうとおもはれて、まことに勇壯のかぎりであつた。
【かくや】の下に「あらん」などの語を補つて文を解するがよい。
【樊噲】は支那前漢の功臣。沛の人。剛勇無雙。始め屠狗を業としてゐたが、劉邦(漢の高祖)の沛より起るに及び、これに従つて忠勤をはげんだ。鴻門の會に項羽が劉邦を殺さうとしたとき、頭髮上り指し、目眦悉く裂くといふほどの雄々しい振舞によつて劉邦を辯護し、その危急を救うて事なきを得た。爾後屢征戰に従つて功を樹て、舞陽侯に封ぜられた。卒して武侯を諡された。
【ゆゝし】は、こゝでは、けなげなことを、をゝしいこと、あつばれなこと、非凡なこと。往々「勇々し」「雄々し」

などの字をあてる。

【謀は張良に劣らざれば】原本に「劣らず、されば」とあるのを改めた。「いくさのかけひきなどは、彼の前漢の劉邦の智慧袋ともいはれた張良にもひけをとらぬほどうまかつたから。」といふほどの意。

【張良】は支那前漢の劉邦(高祖)の謀臣。三傑の一。字は子房。家は代々韓の相であつたので、韓のために仇を報いんと謀り、力士をして秦の始皇帝を博浪沙(河南)で狙撃せしめたが、果さず、逃れて下邳に隠れ、圯上で黄石公に逢ひ、太公望の兵法を得たと傳へられてゐる。劉邦の兵を起すや、これに従ひ、常に帷帳の中で劉邦の爲に畫策し、邦をして天下統一の大業を成さしめ、功を以て留侯に封ぜられた。後、官を辭して惠帝の六年に卒した。諡して文成公といふ。

【吳子孫子が難しとするところを得】吳子や孫子が攻めあぐんだほどのものでも、爲朝はわけなくこれを攻め取つたといふ意。

【吳子】は吳起。周末衛國の人、兵を用ひることを好んだ。曾て孔子の門人曾子に學んで、魯の君に仕へた。齊が魯を攻めた時、魯では吳起を將としてこれを防がせようとしたが、起は齊の女を妻としてゐたので、齊に通せんことを恐れ、これを躊躇してゐた。

吳起はこの時こそ我が名を成すべき好機會であるとおもつて、遂にその妻を殺し、齊に與せざることを示した。

次いで魏の將となつて、秦の五城を抜いた。後、魏の相公叔に忌まれ、楚に走つてその相となり、南、百越を平げ、北、三晉を退け、西、秦を討ち、諸侯をして楚の強を恐れしめた。やがて楚の宗室の亂に際して害せられた。

「吳子」一卷はその兵法を傳へたものである。

「孫子」は孫武。周末齊の人。兵法を以て吳王闔廬に見え、宮中の美女百八十人を分つて二隊とし、その技倆を示した。吳王はこれによつて孫子のよく兵を用ひることを知り、吳に將たらしめて楚を破り、齊晉を威した。吳王の名の諸侯に顯れたのは孫子の力であるといふ。

「孫子」一卷はその兵法を傳へたものである。

【弓は養由をも恥ぢざれば】 弓にかけては養由基にも恥ぢないほどの名手だから。

「養由」(ヤウイウ)は支那周代楚の人。弓の名手。

左傳の成公十六年に「潘厓之黨與養由基、躡甲而射之。」

徹三七札。註に、「一發達三七札、言其能陷堅。」

淮南子に「養由基楚將、善射。去楊葉二百步射之、百發百中。」

【あらゆる人々】 その場にゐるあはすすべての人々。ありと

ある人々。

【擧(ゴゾ)りたまふ】 皆一同に、出かけたまうた。

【折角の合戦】 ことさら大切な合戦。

「折角」といふ語は、漢書の五鹿充宗傳に出てゐる。朱雲といふものが五鹿充宗と易を論じて頻に五鹿を言ひつめた。これを時の人が、朱雲が五鹿の角を折つたといつたことから出たといふ。

漢書の朱雲傳にも「五鹿獄々、朱雲折其角。」と見え

てゐる。

但し、荻生徂徠の「南留別志」には、後漢書、郭泰(林宗)傳

なる左の記事にもとづいて、次のやうに述べてゐる、

折角といふ詞は、郭林宗が巾の雨に逢ひて角のひしげたるを人のまねて、わざと巾の角を折りたるより、何事もわざとすることにいへり。

後漢書の郭泰傳に「林宗有重譽、嘗行逢雨。巾一角墊。時人乃故折一角以爲林宗巾。其見慕如此。」

【強陣】 キャウヂン、ガウヂン。強固なる陣營。強い軍隊。

【高松殿】 タカマツドノ。當時、後白河天皇の假の内裏。

姉小路の北、西洞院の東にあつた。

もと高明親王の第宅であつたが、後、その女高松殿(道

長の室明子)が傳領した。その後、鳥羽天皇が造營して御所としたまひ、後白河天皇はこゝに踐祚したまうた。

【心にくゝも候はず】 「氣のおけるほどえらいやつも居りません。」といふほどの意。

「心にくし」は、(一)心中のはかりかねて、何となく心のおかれること。おぼつかなく氣のおかれること。(二)おくゆかしいこと。何となくしたはしいこと。

こゝは(一)の意。

伊勢物語に「はじめこそ心にくゝもつくりけれ、今はうちとけて。」

【清盛】 キヨモリ。刑部卿忠盛の長子。保元・平治の亂に武功を立て、參議に任ぜられた。六條天皇の朝、累進して従一位太政大臣に陞つた。次いで職を辭し、薙髮して名を淨海と改めた。よつて世に太政入道といふ。後、その妻の妹の出生なる高倉天皇を立て奉り、女徳子を納れて中宮とし、武臣の身を以て始めて皇室の外戚となつた。かくてその子弟は悉く顯要に列し、富は皇室を凌ぎ、勢威は朝廷を壓した。次いで平氏を除かうと企てた藤原成

親等を斬流に處し、後白河法皇を幽閉し奉り、中宮徳子の出生なる安德天皇を位に即け奉り、都を攝津の福原に移した。その専恣は遂に上下の怨嗟を買ひ、以仁王の令旨に奮起した諸國の源氏のために家門が漸く衰滅に向つた。養和元年(一八四一)薨。年六十四。

【へろく矢】 へろくくと力なき矢。

「へろく」とは、弱くてしかたしないさま、萎えて力なきさまなどにいふ語。

持統天皇歌軍法卷二に「あのへろく太刀、引奪つて搦めよ。」

【鎧の袖】 ヨロヒのソデ。鎧の名所(ナドコロ)の一。肩から腋(カヒナ)の上をおほふもの。左を射向袖(イムケソデ)、右を馬手袖(メテソデ)といふ。又、大小・形状によつて、大袖・廣袖・中袖(チュウソデ)小袖・壺袖・丸袖・置袖・最上袖(モガミソデ)等の種類がある。

【行幸他所へ成らば】 若し他所へ行幸しましたならば。「行幸」(ギヤウカウ)は天子のみゆき。

史記の孝景本紀に「行幸雍郊見五帝。」

宇津保物語の嵯峨院の巻に「辰の二點ばかりに、うちのみかど行幸したまへり。」

【御免されを蒙つて】 通例は「御免しを蒙つて」といふべきところである。この類の特殊な言ひ方に注意したい。

【駕輿丁】 カヨチャウ。御輿をかき奉る丁(ヨボロ)。こしかき。

續日本紀の寶龜十二年の條に「諸司仕丁駕輿丁。」

狹衣物語卷三下に「み輿のかよちやうのなり姿まで、世のためしにも、まことに書きおかまほしげなり。」

【君】 崇徳上皇を申す。

【掌(タナゴコロ)を反(カヘ)す如くに候べし】 手のひらをかへすやうに何のさうさもございせん。

「掌を反す」とは事の極めて容易な形容。

漢書の枚乗傳に「易子反掌、安子泰山。」

【主上】 シュジャウ。天子。こゝは後白河天皇を申す。

【矢二つ三つ放さんするばかりにて】 矢を二三本放さうとするぐらゐのわづかの時間で。

「放さんする」は、「放さんとする」の約。

【勝負(シヨウブ)を決せん條】 「かちまけをきめますこと」は。

「條(ドウ)は、かど、くだり、段、こと、などの意。

【以ての外(ノ)の荒儀なり】 おもひもよらぬ淺慮無謀なやり方である。

「以ての外」は、思ひの外、意外、案外、想像外。

荒儀(アラギ)は、粗忽なこと、亂暴なこと、淺慮無謀なこと、などをいふ。

【同土軍】 ドウシイクサ・ドシイクサ。味方と味方とのた

たかひ。仲間どうしのたゝかひ。どうしうち。どうしうち。

平治物語、義朝六波羅に寄せらるゝ事の條に「詮なき同土軍に、あたら兵どもを撃たせられけるぞ無念なる。」

【さすが】 「いかにも高貴な御方の御事だけあつて」といふほどの意。

「さすが」は、「しかすが」の約。(一)さうはいふもの。さうはおもふもの。とはいふもの。さはさりながら。

(二)すぐれたものほどあつて。いかにも。

こゝは(二)の意。

枕草子卷二に「あなづらはしき人ならば、のちになどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。」

【むげに然るべからず】 そんな荒儀なことは、決してなすべきではない。

「むげに」は「無下に」の字をあてる。(一)一向に、一概に、いちづに、全く。(二)極めて卑しいこと。甚だ賤しむべきこと。

こゝは(一)の意。

【南都の衆徒】 奈良興福寺の僧兵ども。奈良法師。

「興福寺」(コウフクジ)は法相宗の大本山。奈良市登大路町にある。南都七大寺の一。藤原氏の寺で、藤原鎌足の夫人鏡女王が鎌足の遺志によつて草創したもの。はじめ山階寺といつて、山城國宇治郡山階村にあつたが、後大和國高市郡飛鳥の厩坂に移して厩坂寺或は法光寺と稱し、更に元明天皇の和銅三年、藤原不比等によつて現在の位置に移され、興福寺と改稱された。藤原氏の盛時には寺勢が大いに振ひ、幾多の學匠が輩出したが、一面には又僧徒どもが勢を恃んで横暴を行ひ、屢々京都を騒がした。時人は比叡山の山法師に對して奈良法師と稱した。元慶二年以

後火災に逢ふこと前後八回、現今は寺觀が大いに衰へ、わづかに中金堂・南圓堂・東金堂・北圓堂・五重塔・三重塔等を残すのみとなつた。而して東金堂以下の四字は特別保護建造物に指定されてゐる。

【信實・玄實】 共に興福寺の僧。當時の奈良法師の頭首に推されてゐた。信實は源頼安の子、玄實は信實の子。

【吉野十津川】 吉野郡十津川郷。十津川流域にある大森林地帯。木材の産が多い。



十津川は奈良縣吉野郡にある川。山上岳に發して數多の支流を容れ、紀伊山脈を略、南北に貫流し、紀伊に入つて熊野川となる。沿岸には大塔宮・天誅組など

に關する史蹟がある。

【指矢三町・遠矢八町】 共にあだ名。

「指矢とは筈(ノ)をば炙筈にして、羽は鴨の第二の羽にてはぐ。根は木にて作る。まきわら矢の如し。この矢は三

十三間堂の通矢などに用ふるなり。」と貞丈雜記にある。「遠矢」は遠射と同じく、射ることの遠きをいつたのである。

この指矢三町、遠矢八町といふことについて世に傳ふところは、後白河院御在位の時、吉野の奥に燕阪源太といふものがあつた。紀伊國熊野山燕阪といふ所のものであるから、その字をかくいつたのであるが、この男は極めて弓の上手で、二町程隔てて走る鹿もはづすことがなかつたから、里人が集まつて彼の弓勢を試みると、差矢は三町、遠矢は八町を容易く射渡したから、さて差矢三町、遠矢八町と名づけた。さてこの男、保元の亂の時、新院の御方に参つたといふことが本朝軍器考に出てゐる。源平盛衰記には遠矢に射、又差矢に射るなどいふこともあるから、指矢・遠矢といふ一種の射法があつたものであらう。

【宇治】 ウヂ。京都府久世郡宇治町。京都の南方十七軒、宇治川の西岸にある。京都への關門にあたり、古來軍事交通の要地であつた。附近一帯は宇治茶の産地として名高い。町の内外には平等院・宇治上下社・宇治の浮塔・萬福寺・興聖寺・三室戸寺など、多くの名蹟がある。

【富家殿】 フケドノ。左大臣頼長の父なる忠實の宇治の別業。もと民部卿藤原忠文の所有であつたのを、九條師輔

がゆづりうけ、平等院建立後、藤原氏の手に落ちたもの。その位置は平等院の西であるとのことだから、今の縣宮より西に當る地であらうといふ。

「藤原忠實」は關白師通の長子。祖父師賢の養子となつた。諸官に歴任し、康和二年右大臣に進んだ。鳥羽天皇が位に即かせ給ふに及んで、攝政となり、ついで天永三年太政大臣に任ぜられ、翌永久元年關白となつた。晩年薙髮して圓理と號し、宇治の富家殿に住んだ。雅樂を好み、箏曲をよくした。その日記を知足院關白記といふ。應保二年(一八二二)薨。年八十五。

【見参に入り】 お目にかゝつて。お目どほりして。

【見参】(ゲンサン、又、ゲザン)は見参仕の略。貴人にまみえることの敬語。

【院司】 キンジ。院の御所の事を司る廳、即ち院廳。又院の諸官をいふ。院司は新儀式に、「又定三補院司別當廿一三人。(公卿一人、或二人、四位・五位一兩補之。)頭二人(用三分以上者、或五位在其中。)廳藏人(用二分品者)とある。これは村上天皇の御定である。

【院司の公卿】は別當「殿上人」は執事(後に)・頭などである。

【公卿・殿上人を催さんに】 公卿や殿上人をうながしたてたならば。

「公卿」(クギヤウ)は攝政・關白・大臣(公)及び、大納言・三位以上のもの(卿)の總稱。(參議は四位でも卿の列に加へる。)

「殿上人」(テンジャウビト)とは、四位・五位及び六位(藏人に限つて)の人のうちで昇殿を聽された者の稱。雲客・雲の上人なども稱する。後世は堂上(もとは殿上に供奉)ともいふ。

昇殿を聽されるとは、清涼殿の南廂の間(こゝを殿上の間といふ)に昇ることを聽される義。

昇殿を聽されたものは、その殿上の間に在る日給簡(又殿上簡)に姓名を記し、その下に紙を張つて、上番の日を書く(午未など、藏人之を掌る)例である。よつて、昇殿を聽されることを、又「フダニツク」とも「仙籍を聽さる」ともいふ。又、攝政・關白の公達の元服以前に殿上に仕へることを童殿上といひ、そのものを童殿上といふ。殿上人の数は、寛平遺詔には四十人と定められたが、後には増して七八十人より百人にも及んだ。又、院・女院などの殿上人もある。

【上には承服申して】 うはべだけではおうけ申上げて。

【咳く】 ツブヤク。ぶつくとひとりごとをいふ。くどくどいふ。

源氏物語の葵の卷に「そばくしからでおはせよかしと、うちつぶやかれたまふ。」

【和漢の先蹤】 ワカンのセンショウ。日本や支那の先例。からやまとのしきたり。

「先蹤」は先人のなし來つたあと。先例。前例。

平治物語、光頼卿参内の條に「先蹤もいまだ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。」

【朝廷の禮節】 朝廷における禮儀。禮節は禮を行ふ作法。敬意を表する儀容。禮儀。

禮記の儒行に「禮節者仁之貌也。」

【似も似ぬこと】 全く似ないこと。似もつかぬこと。

【武士にこそ任せらるべきに】 「武士にこそ任せらるべきに、さるに……」といふべきところを略して、かやうに書きなしたのである。こそこの結なる已然形の動詞・形容詞などの文中に隠れてゐる例として説明を加へられたい。

前の「これこそ猛勢なるべきが云々」の條参照。

【道にもあらぬ御計らひ】 公卿のなし給ふべき道でもない合戦の御評定。

【武略】ブリヤク。戦争上の謀略。武術の才略。戦略。いくさのはかりごと。いくさのかけひき。

【奥義】 アウギ。又奥儀とも書く。おくぶかい義理。おくぎ。

孔安國の尙書序に「雅誥ヨク、奧儀オク、其歸ニス一ニス揆ス」

【吉野法師】 ヨシノホフシ。吉野山金峯山寺の僧兵ども。

金峯山寺は天台宗の古刹。奈良縣吉野郡吉野山中にある。その本堂は藏王堂と稱し、文武天皇の朝、役小角の創建と傳へられてゐる。中古以後漸く、盛大を致し、修驗道の本場として著れ、僧坊百餘院に及んだ。その僧徒は吉野法師又吉野大衆と稱し、屢々上洛して嗾訴などしたことがあり、又勤王の師を起して吉野朝に忠誠をつくしたこともある。

【奈良大衆】 ナラダイジユ。前の「南都の衆徒」に同じ。その條参照。

「大衆」(ダイジユ・ダイス・タイシユウ)は多數の僧徒。法華經に「見佛在大衆、名聞滿十方、廣饒益衆衆」

生ナマ

【敵勝つに乗る程ならば】 敵が勝に乗じておしよせて来たならば。

【安穩】 アンワン。アンノン。やすらかでおだやかなこと。安泰。

晉書の顧愷之傳に「行人安穩、布帆無恙。」

古今著聞集卷十二に「われその用金を取らむと思はば、汝一人あんをんにあらせてむや。」

8 挿 圖

北殿附近

京都北殿附近の略圖である。

本文の中に見えてゐる白河北殿・河原・春日の末・大炊御門表及びその東西の門の位置等は、この圖によつて指示されたい。

鎮西八郎

白河北殿で、爲朝が左大臣頼長の面前に高松殿夜討の獻策をしてゐるところ。

文中に見えてゐる大荒目の鎧、三尺五寸の太刀、熊の皮の尻鞆、三十六差したる黒羽の矢、七尺五寸の強弓(後の郎等の持つてゐるもの)、兜(弓を持つてゐる郎等の左にゐる郎等の

前に置いてあるもの)等は、本文によつて指示されたい。

尙「揆喻もかくやと覺ゆる」爲朝のゆゑしい武者ぶりにも目を留めさせて、上皇を始め奉つて、あらゆる人々が「音に聞ゆる爲朝見んとて擧り給ふ」ことの尤もである所以を合點させたいものである。

六 足 摺

1 解 題

平家物語卷三、「赦文の事」の末の一節と「足すりの事」とをつなぎあはせて一課としたものである。

「赦文の事」の前文は、本課を教授する上に必要であるから、左にこれを掲げよう。

赦文の事

治承二年正月一日の日、院の御所には拜禮行はれて、四日の日朝觀の行幸ありけり。何事も例にかはりたる事はなけれども、去年の夏新大納言成親の卿以下、近習の人々多く流し失はれしこと、法皇御憤未だ止まざれば、世の政をもよろづものうくおぼしめして、御心よからぬ事どもにてぞ候ひける。太政の入道も、多田の藏人行綱が告げ知らせ奉つて後は、君をも御うしろめたき事に思ひ奉り、上には事なきやうなれども、下には用心して、苦笑ひてのみぞ候はれける。
七日の日、彗星東方に出づ。蚩尤氣とも申す。また赤氣とも申す。十八日、光をます。入道相國の御女建禮門院、その時は未だ中宮と聞えさせ給ひしが、御惱とて、雲の上、天が下の歎に

てぞ候ひける。諸寺に御讀經はじまり、諸社へ官幣使を立てらる。陰陽術を極め、醫家薬をつくし、大法祕法、一つとして残る所なう修せられけり。されども御惱たゞにもわたらせ給はず、御懷妊とぞ聞えし。主上は今年十八、中宮は二十二にならせ給ふ。しかれども未だ皇子も姫宮も出で來させ給はず。若し皇子にてましまさば、いかにめでたからんと、平家の人々ただ今皇子誕生あるやうに申して、勇み悦びあはれけり。他家の人人も、「平家繁昌の折を得たり、皇子御誕生疑なし。」とぞ申しあはれける。御懷妊定まらせ給ひしかば、入道相國、有驗の高僧・貴僧に仰せて、大法祕法を修し、星宿・佛菩薩に告げて、皇子御誕生とのみ祈誓せらる。六月一日の日、中宮御著帯ありけり。仁和寺の御室守覺法親王、急ぎ參内ありて、孔雀經の法を以て御加持あり。天台の座主覺快法親王、寺の長吏圓慶法親王も同じく參らせ給ひて、變成男子の法を修せられけり。
かゝりし程に、中宮は月の重るに従つて、御身を苦しうせさせ給ふ。一度笑めは百の媚ありけん漢の李夫人、照陽殿の病の床もかくやと覺え、唐の楊貴妃、梨花一枝春の雨を帯び、芙蓉の風に萎れつゝ、女郎花の露重げなるより、なほいたはしき御さまなり。かゝる御惱の折ふしにあはせて、こはき御ものゝけど

もあまた取り入り奉る。神子、明王の縛にかけて、靈あらはれたり。ことに讃岐の院の御霊、宇治の悪左府の御遺念、新大納言成親の死霊、西光法師が悪霊、鬼界が島の流人どもの生霊、なんぞと申しける。これに依つて、生霊をも死霊をも宥めるべしとて、先づ讃岐の院の御遺念あつて崇徳天皇と號し、宇治の悪左府贈位贈官行はれて、太政大臣、正一位を贈らる。勅使は少内記維基とぞ聞えし。件の墓所は大和の國添上の郡河上の村般若野の五三昧なり。保元の秋堀り起して捨てられし後は、死骸道のほとりの土となつて、年々にたゞ春の草のみしげれり。今勅使たづね来て宣命を讀みければ、亡魂尊靈いかにうれしとおぼしけん。

されば早良の廢太子をば崇道天皇と號し、井上の内親王をば皇后の職位に復す。これ皆怨霊を宥められし策とぞ聞えし。怨霊は昔もかく怖しかりし事どもなり。冷泉院の御ものぐるはしうまし、花山の法皇の十善の帝位をすべらせ給ひしは、基方の民部の卿が靈なり。また三條の院の御目も御覽せられざりしは、寛算供奉が靈とかや。門脇の宰相かやうの事どもを傳へ聞き給ひて、小松殿に申されけるは、「今度中宮御産の御祈、さまたまに候ふなり。何と申すとも、非常の敵に過ぎたる程の事あるべしとも覺え候はず。中にも鬼界が島の流人どもを召し還されたらんほどの功德善根、何事か候ふべき」と申されたりければ父の禪門の御前におはして、「あの丹波の少將が事を門脇の宰相あまりに嘆き申すが不便に候。ことさら中宮御惱の御こ

と、承り及ぶ如くんば、成親の卿が死霊など聞えて候。大納言の死霊を宥めんとおぼしめさんにつけては、生きて候ふ少將を召しこそ還され候はめ。人の思をやめさせ給はば、おぼしめす事もかなひ、人の願をかなへさせましまさば、御願もすなはち成就して、御産平安、皇子御誕生あつて、家門の榮花、いよく盛に候ふべし」と申されければ、入道相國、日頃よりこの外にやはらいで、「俊寛や康頼法師の事はいかに。」とのたまへば、「それも同じうは召しこそ還され候はめ。もし一人も残されたらんは、なか／＼罪業たるべう候。」と申されたりければ、入道相國、「康頼法師が事はさることなれども、俊寛は随分入道が口入を以て人となつたるものぞかし。それに所しもこそ多けれ、東山鹿の谷、わが山庄によりあひて奇怪のふるまひどもありけんなれば、俊寛が事は思ひもよらず。」とぞのたまひける。大臣歸つて、叔父の宰相を呼び奉つて、「少將は既に赦免あるべきにて候ふぞ、御心やすうおぼしめされ候へ。」と申されたりければ、宰相聞きもあへず、泣く／＼手をあはせてぞ悦ばれける。「下り候ひし時もこれ程のことなどや申し受けざらんと思ひたりげにて、教盛を見候ふ度ごとく涙を流し候ひしが不便に候。」とぞ申されける。小松殿、「まことにさこそはおぼしめされ候ふらめ。子は誰とてもかなしければ、よく／＼申し候はん。」とて、入り給ひぬ。

さる程に：：本課の文につゞく。

「平家物語」についてはすでに巻五及び巻六の教授備考に

於て詳細な解題を施したから、こゝにはこれを略し、左に藤岡作太郎博士の同書に於ける評論の一節を引用するにとどめる。

平家物語は藤原末期に於ける源平争亂の事實を描きたるものにして、結局平家が西海の藻屑となれる一篇の悲劇なり。事實の詳細、文體の異同はあれど、同じ消息を傳へたるものに源平盛衰記あり、更にその以前の事實を記せるものに保元・平治の二物語あり。保元・平治はその簡素遒勁なる點に於て平家に勝るものなきにあらずといへども、大體に於てその價値は平家の下にある。或は軍記物の祖として時に保元・平治を尊ぶものあれども、果して平家以前の書なりや、余輩はこれを疑ふ。：：平家物語を讀みて吾人の最も感興を深うする所以は、それが源平合戦でふ歴史上の最大悲劇を寫せる點にあり。平安朝のかた文運盛にして、作家が想像によりて生み來れる名篇傑作少からずといへども、わが國にまだ曾てかゝる雄大沈痛の悲劇に接せず、壽永の天地を舞臺として自然が演ぜるこの大活劇は、貧弱なる人間想像の埒を超越して、その事實は正に小説よりも遙に奇なるものあり。もとより平家は純粹正確なる歴史にはあらざるべし。その間著者の想像も交れり、傳統の誤れるものまた多かるべし。しかもその歴史的事實を基礎として取捨鹽梅せるものなるは疑ふべくもあらず。宜なるかな、その局面の變化に富みて、今日なほ讀者をして歎賞の聲を絶たざらしむること。(國文學史

講話)

2 編纂の用意

平家物語の文中、出色の筆の一と稱されてゐる「俊寛足摺」の一章をかゝけて、行文の妙を味ははしめ、兼ねて、鬼界が島の流人、わけても俊寛のいた／＼しい境遇に一掬の涙をそゝがせたい。

3 要旨

同じ罪で配所にある三人の流人のうち、二人が免れて都還りするのに、われのみ一人残された俊寛の悲歎と落魄ならびに果敢ない後日の赦免を頼りとする未練を題材とした一種の悲劇である。赦免状は二人には天國への救ひの聲であつたが、俊寛には地獄への案内状であつた。作者の筆は、免されて行く二人、殊に少將成經の俊寛への同情をも描いてゐるが、やはり俊寛の心理を描くところに精采を見せてゐる。或は俊寛のこの態度を批判させて見るのも一つの仕事にはなるが、その人間心理をよく寫し得てゐる筆の力を味ははせ、平家物語がかくの如き挿

話に於ても亦哀史たる所以を思はしめたい。

4 概説

第一節(三四頁末より三行まで) かねて鬼界島に流人となつてゐる者に、中宮御産の御祈によつて赦免の状が下る。その使が島に到着する。

第二節(三四頁末二行—三五頁六頁) 赦免状をば偶々一人居あはせた俊寛が受取る。

第三節(三五頁七行—三六頁三行) 赦免状を先づ俊寛が一人で披見し、我が名のみ無きに驚く。そのうちに成経・康頼の二人も來つて共に讀む。二人の名より外にない。

第四節(三六頁四行—三八頁六行) 俊寛の悲歎と落膽とはます／＼募る。これに對して成経が種々慰める。

第五節(三八頁七行—三九頁六行) 船はいよ／＼出帆しようとする。俊寛はこれに取付いて、使者や形見を残して去る二人にいろ／＼訴へるが、遂に無慈悲に船を漕出してしまふ。

第六節(三九頁七行—四〇頁) 渚に戻つた俊寛は、足摺

をしてをめき叫ぶ。更に高い處に走り上つて船を招く。遂にその夜は濱で悲しみ明かす。けれども、なほ成経の情をあてにして、身をも投げずにはかなく島に生きることにする。

5 取扱上の注意

「足摺」といふ題は、俊寛に取つては氣の毒であるが、實に題し得て妙である、これにつけても入道相國の權威を思はしめると同時に、その英雄主義の實行された裏面にはかうして泣く人が幾人かあつたことを思はしめたい。

「悲劇の主人公としての俊寛がよく描かれてゐる點が味はひどころであることは勿論であるが、使者に「夜を晝にして急ぎ下れ」と注意する宰相の言葉のはしにも、流人をめぐる人々の心が如何に動いてゐるかを見て取らせるやうに導きたいものである。

「更に俊寛その人の態度・心理に根本的に考を及ぼすと、嘗ては法勝寺の執行であり、大膽な陰謀を企てたほどの人物が今この際かくまでにめ／＼しい、未練らしい醜態を演ずるとは、一寸受取れないやうにも思はれる。或は平

家物語の作者が、特に俊寛に好感を持つてゐなかつたが爲に、かういふ俊寛を描き出したかとさへ思はれる。けれども、それはともかくとして、こゝに描かれたやうな俊寛の態度は、新しい文學者ならずとも、問題視し、批評的に見たくなる。馬琴に「俊寛僧都島物語」があり、

明治以後の文壇にも、俊寛を題材にした戯曲・小説が二三數へられる。教授者は適宜にこれらの作品にも顧みて、この俊寛に超越的な批判を與へて見せることも必要であらう。

6 設問

- 1 この文では、どういふ點が最もよく描かれてゐると思ふか。
- 2 俊寛の態度についてはどう思ふか。
- 3 丹波少將等の態度については如何。
- 4 かくの如き悲劇的事實を支配してゐる力は何であるか。
- 5 次の語句の意義を問ふ。
イ、重科は遠流に免す。

ロ、許されもなきに三人ながら島の内を出でたりなど聞え候はゞ、なか／＼惡しう候ひなんす。
ハ、あらましがと。禮紙。執筆。配所。ゆかり。

7 釋義

【さる程に】 前を受けて、後をおこすことば。その前文は、「解題」の項に掲げてある。参看せられたい。

【鬼界が島の流人】 キカイがシマのルニン。治承元年、平氏を傾けようとして俊寛僧都の鹿谷山莊に密謀をめぐらした爲に清盛に忌まれ、鬼界が島に流された丹波少將藤原成経、平判官康頼及び俊寛僧都をいふ。

【鬼界が島】は今の鹿兒島縣(大隅國)熊本郡の硫黄島であらうといふ。

【流人】は流罪に處せられた人。「流罪」とは、古昔罪人を一定の邊地に放ちやつて他に移ることを禁ずる刑。死刑よりは軽く、徒罪よりは重い。古くは三等に分ち、遠流(ヲンル)は伊豆・安房・常陸・佐渡・隱岐・土佐、中流(チュウ)は信濃・伊豫、近流(キンル)は越前・安藝とし、共に一年を刑期とした。

但し、鬼界が島なる成経等は、赦に逢はない限り一生島から出ることは出来なかつたのである。

【入道相國】ニフダウシャウコク。太政大臣平清盛は入道して淨海といつた。よつてかやうにいふ。

「入道」は三位以上の人で出家した場合にいふ語。

「相國」は支那では宰相の稱。我が國では太政大臣・左右大臣の別稱。

史記の蕭相國世家に「上已聞淮陰侯誅、使使拜丞相何爲相國」と。

徒然草に「相國の望みおはせざりけり。」

【赦文】ユルシブミ。罪をゆるす旨をしるした文書。

赦免狀。

【たうでける】「たまひてける」の音便。

【御使】赦文をたづさへて鬼界が島へ赴く清盛の使者。

【宰相】サイシャウ。こゝは成経の妻の父なる參議平教盛をさす。

「宰相」は(一)君主を助けて大政を總理する官職。丞相。(二)參議の唐名。こゝは(二)の意。

平教盛は忠盛の第三子。清盛の弟。清盛に鍾愛せられて參議に拜せられ、六波羅の總門の傍に住んでゐた。よつて世に門脇(カドワキ)宰相といふ。平治の亂に藤原信賴を攻めて、功を立て、權中納言に至つた。壽永二年安徳天皇に供奉して西海に赴き、十一月平重衡等と兵一萬を率ゐて源行家を播磨に破つた。平軍壇の浦に滅び、天皇海に没したまふに及び、自刃して死んだ。年五十七。

【夜を晝にして】夜も晝と同じく、道を急いで。晝夜兼行して。

【心に任せぬ海路】心のまゝにならぬふなぢ。おもふやうにならぬ舟路。

「海路」(ウミヂ)は海上の舟の航路。ふなぢ。

萬葉集卷三に「いさなとり、海路に出でて、あへぎつつ、我が漕ぎゆけば。」

【下旬】ゲジュン。月のあと十日。二十一日から月末まで。下浣。下瀆。

【丹左衛門尉基康】タンサエモンノジョウモトヤス。藤原基康。高倉天皇の御代の士。

【平判官康頼入道】ヘイハウグワンヤスヨリニフダウ。平康頼。檢非違使尉に任ぜられ、且入道したから、平判官

康頼入道といふ。治承元年大納言藤原成親、法勝寺執行俊寛等と密に平氏を除かんことを謀り、事漏れて捕へられ、俊寛及び成親の子成経と共に鬼界が島に流された。翌年赦されて京都に上つた。

【丹波少將殿】タンバセウシャウドノ。藤原成経。權大納言成経の子。幼より後白河法皇に仕へて寵せられ、右近衛少將兼丹波守に拜せられた。よつて世に丹波少將といふ。治承四年父の事に坐して六波羅に捕へられたが、妻の父平教盛(門脇宰相)のために死を救はれて康頼・俊寛と共に鬼界が島に流された。翌年赦免せられて復官し、更に參議に進んだ。建仁二年(一八六二)薨。

【熊野詣】熊野參詣。成経等流人どもは、鬼界が島へ紀州熊野三山の神を勸請して、さゝやかな祠を建て、時々そこへ參詣してゐたものと見える。

熊野三山は和歌山縣紀伊國東牟婁郡に鎮座する熊野坐神社・熊野速玉神社及び熊野夫須美神社(那智神社)の總

稱。前二社は共に官幣大社、後一社は官幣中社。古來熊野三所・熊野三社・熊野三所權現・三熊野などと稱せられて、朝野の崇敬たゞならぬ名社である。

【俊寛】シユンクワン。法勝寺の執行。源大納言雅俊の孫。平清盛の專權を惡み、その鹿谷山莊に藤原成親・その子成経・平康頼等と會して密にこれを滅さうと謀つたが、事漏れ、治承元年成経・康頼と共に鬼界が島に流された。翌年成経・康頼は召還されたが、俊寛一人は寂しく島にどりのこされ、間もなくそこで入寂した。

【餘りに思へば夢やらん】赦免の事をあまりに思つてゐたから、夢を見たのであらう。

「夢やらん」は「夢にやあらん」の略。

【天魔波旬】テンマハジュン。「天魔」は佛語。慾界の第六天の魔王。「波旬」はその名。多くの眷族を有し、常に佛道の障礙をなし、人心を惱亂し、智慧を鈍らし、善根を妨げるといふもの。

平治物語、信賴・信西不快の條に「いかなる天魔が二人の心に入りかはりけん。」

源平盛衰記卷八、法皇三井灌頂の條に「波旬・天狗の業すでに盡きはてて。」

【誑さんといふやらん】 だましまよはさうとしていふのであらうか。「やらん」は「にやあらん」の略。

「誑す」は、あざむきまよはすこと。だますこと。

十訓抄に「行徳あるやうなれども、無智の間、終りには魔界のために誑さるべし。」

【現】 ウツ、(一)死に對して現に世に存在してあること。

(二)夢に對して心が普通の状態にあること。正氣。

【あわてふためき】 あわてさわいで。周章狼狽して。

「ふためく」は、ばたつき騒ぐこと。たちさわぐこと。

古今著聞集卷十六に「あわてふためき参りけるに。」

【雑色】 ザフシキ。中間・足輕などの如く走りづかひする賤しいしもの稱。

枕草子卷十に「しば／＼と追ひくる、供にさぶらひさぶしき、ものはかで走るめる。」

【布袋】 フブクロ。布でこしらへた袋。頭陀袋の類。

【重科は遠流に免す】 チュウカウはヨナルにメンズ。その

方どもの犯した重いとがは、今までの遠流によつてこれをゆるしつかはすとの意。

「遠流」については、前の「鬼界が島の流人ども」の項を参照せよ。

【歸洛】 キラク。京都に歸ること。「洛」は支那周代以降の都なる洛邑・洛陽(今の河南省河南府)を京都に擬していふ語。

【中宮】 チュウグウ。醍醐天皇の御頃よりは皇后の稱。一條天皇以後兩后並立するに至つた後は、皇后の外の御嫡妻の稱。

こゝは高倉天皇の中宮建禮門院平徳子の方を申す。徳子の方は平清盛の第二女。高倉天皇の中宮となり、安徳天皇を生み奉つた。壽永二年七月源平の合戦に際し、安徳天皇と共に平氏に奉ぜられて西海に赴かれた。平氏滅亡の京都に還啓して尼となり給ひ、大原寂光院の傍に草庵を結び給うた。後法性寺に移り給ひ、建保二年(一八七三)こゝに崩じた。御年五十七。

【御産の御祈】 この御産で生れさせられたのが、安徳天皇

におはします。

【非常の赦】 ヒジヤウのシヤ。有罪者を悉く赦すこと。

小右記、萬壽四年十一月十三日の條に「被_レ行_レ非常_レ赦_レ。依_レ前_レ太政大臣病_レ。」

【然る間】 しかるによつて。さういふわけだから。

「間」は戦記文・候文等に特有な接續詞。「によつて」の意。

【禮紙(ライシ)にぞあるらん】 禮紙には、きつと俊寛赦免のことが書いてあるであらう。

「禮紙」は書狀の文言を記した紙の上を巻く別の白紙。その上に更に包紙を用ひる。これに七紙禮(シチシライ)・

五紙禮(ゴシライ)・三紙禮(サンシライ)の別がある。

七紙禮は紙三枚を重ねて狀を書き、禮紙二枚、包紙即ち

立紙を二枚にすることで、最上の禮である。これに次ぐ

ものは五紙禮で、二枚の紙に狀を書き、禮紙一枚に巻いて

包紙を二枚にするもの。三紙禮は、一枚に狀を書いて、

禮紙一枚でこれを巻き、他の一枚を横に折つて巻くもの。

この三紙禮が普通の例である。

【ことづてたる文】 ことづけた手紙。委託した手紙。

「ことづて」は「ことづたへ」(言傳)の約。「ことづけ」と同じで、人などに託して物事を言ひやることにいふ。

後撰集、春中に「櫻ばなぬしを忘れぬものならば吹きこむ風にことづてはせよ。」

【僧都】 ソウヅ。僧綱の一、僧正に次ぐもの。はじめは一人であつたが、後には大僧都・權大僧都・少僧都・權少僧都の四階に分たれた。大寶の制では俗人の從五位に准じたが、弘安の制では四位の殿上人に准ずることとなつた。

【言問ふ文】 コトトフフミ。安否をたづねる手紙。存問の手紙。

「言問ふ」は、(一)ものをいふこと。話すこと。(二)ものを言ひかけること。たづねること。(三)おとづれること。訪問すること。こゝは(二)の意。

古今集、羈旅に「名にしおはばいざこととはん都鳥わが思ふ人はありやなしやと」

【さればわがゆかりの者どもは云々】 「わが安否をたづねる手紙が一通もわが手に入らぬところから考へて見れ

ば、自分にゆかりあるものは、もう都の内にはゐなくなつたのだな。」との意。

「ゆかり」は「縁」の字をあてる。多少のつゞきあひなること。又、そのもの。よすが。ちなみ。たより。縁。縁故。所縁。

宇津保物語、藤原君に「おのがゆかり、西ひんがしの合はせて六百人ばかり。」

【思ひやるにもおぼつかなし】 思ひやるにつけても、まことに心もとない気がする。

「おぼつかなし」は、心もとないこと。心ぼそいこと。宇津保物語の俊蔭の巻に「ゆくへなくおぼつかなきを、年ごろ思ひなげきつるは。」

【配所】 ハイショ。配流せられる所。流罪の場所。配處。謫所。

續日本紀卷九、神龜元年の條に「定諸流配處遠近之程。」

【赦免】 シヤメン。犯した罪をゆるすこと。史記の淮南王傳に「赦免罪人。」

【執筆】 シツピツ。筆を執つて書くこと。又、その人。こは赦文を書いた人。

【御邊】 ゴヘン。同輩に用ひる對稱の代名詞。そこもと。御身。そなた。貴公。貴殿。尊公。貴所。

【故大納言殿】 コダイナゴンドノ。藤原成親。權中納言家成の子。後白河上皇の寵を蒙り、機務に参した。平治の亂藤原信賴に黨したが、平重盛のために死罪を免れた。仁安中參議に任ぜられ、安元中權大納言に進んだ。治承元年（一八三七）事によつて平氏を怨み、密に同志と俊寛僧都の鹿谷別荘に會合して平氏を倒さうと企てたが、謀が漏れて終に清盛に殺された。年四十。

【由なき謀叛】 つまらない謀叛。

「由なき」は、わけのない、理由のない、つまらないなどの意。

【謀叛】（ムホン）は、國家を危くすることををはかること。君に叛いて兵を起すこと。

【せめて】 物事の最少限をいふことば。せめてのことに。已むを得ずば。

謡曲、小袖會我に「うたてや、せめていま一目、御簾。几帳も下りたり、あら情なの御事や。」

【九國の地まで着けてたべ】 九州の土地まで着けて下さい。「たべ」はたまへに同じ。

【各々】 こゝは對稱の複數代名詞で、かたぐゝ・諸君などの意。

【春は燕、秋は田の面（モ）の雁のおとづるゝやうに云々】 諸君がこゝにをられた時は、諸君へのたよりによつて、自然都の消息をも傳へ聞くことが出来たが今から後は、どうしてこれを聞くことが出来よう。

「春は燕云々」は故郷から時折成経や康頼のもとにおとづれのあつたのをたとへていつたのである。つまり俊寛のところへは、今までも都からのおとづれば、まるで無かつたのであらう。

【聞えこがれたまひけり】 ひどくおもひわづらつた。非常に煩悶した。

【更に行くべき空も覚え候はず】 途方にくれ、去就にまよふ意をのべた語である。

【更に行くべき空も覚え候はず】 途方にくれ、去就にまよふ意をのべた語である。

「更」は下の「覚え候はず」の意味を限定する副詞。

【空】は、こゝでは「方向」又は「場所」の意。

後撰集卷十に「歸りけむ空も知られずをばすての山より出でし月を見しに。」

【なか／＼悪しう候ひなんす】 かへつてわるい結果になるでございませう。

「なか／＼」は、かへつて。けつて。

源氏物語の桐壺の巻に「御うしろ見すべき人もなく、又世のうけひくまじきことなれば、なか／＼危くおぼし憚りて。」

「候ひなんす」は「候ひなんとす」の約。

【氣色】 ケシキ。こゝは、きしよく・機嫌などの意。

伊勢物語に「おぼやけのみけしき悪しかりけり。」

【その程は】 その間は。それまでの間は。

【日頃】 つね。平素。ふだん。

【この瀬】 この折。さしあたつてのこの機會。

【瀬】は(一)川などの水が浅くて、人のかちわたりすることの出来る場所。(二)はやせ。急流。(三)物事に出逢ふ時節又

は場合。(四)その場所。こゝは(三)の意。

【堪忍ぶべうも見え給はず】「とても、がまんが出来さうには見えない。」との意。

【べう】は「べく」の「う音便。」

【あらしごと】 あらしごしいこと。あらしごしい舉動。

【あらし】はあらしごしい、あらい、あらくましいなどの意。

源氏物語の橋姫の巻に「いとあらしき風のきほひに、ほろ／＼と落ちみだるゝ木の葉の散りかゝるも。」

【かたみ】 形見。(一)亡き人又は別れる人などを思ひ出す種となるべきもの。記念。(二)形見としてのこした品物。遺品。こゝは(二)の意。

古今集、春上に「梅が香を袖にうつしてとゞめてば、春は過ぐともかたみならまし。」

【夜の灸】 ヨルのフスマ。布類などで造り、寝るとき身をおぼふ夜具。

【法華經】 ホケキヤウ。妙法蓮華經の略。又一乗妙典ともいふ。八卷。二十八品。支那姚秦の弘治八年(一〇六六)鳩

摩羅什譯。分つて本門(前十四品)・迹門(後十四品)とし、本門中に於ては如來壽量品を以てその大宗とする。釋尊出世の本懐は四十九年にわたる說法中、前後九箇年の說法たるこの法華經に於て始めて顯現され、久遠實成の妙理は本門の中心たる如來壽量品に於て始めて示された。釋尊一代の聖教中、廣大無邊の慈悲と幽玄微妙の哲理とを包含する點に於て諸經中最上第一と稱せられ、古來最も尊崇される經典である。

【纜】 トモヅナ。纜網の義。艦にある網。船をつなぎとめるもの。「纜を解く」とは船出することをいふ。

【腰になり嗣になり】 水のだん／＼深くなるさまをあらはしたのである。

【日頃の情も今は何ならず】 わたくし一人を島にふりすてて歸つて行かれる兩君のつれないしうちを見ては、つね日ごろの親しい交も今は何ほどのことでもないとの意。

【何ならず】は、何でもない、物の數にも足らぬなどの意。金葉集、賀に「長濱のまさこの數も何ならずつきせず見ゆる君が御代かな。」

【くどく】 「口説く」くりかへしていふこと。くどく／＼しにくいふこと。(二)切に意中を言ふこと。うるさく説くこと。(三)おのれの意に従はせようとして迫つて説くこと。説きふせようとして切に説くこと。こゝは(二)の意。

【渚】 ナギサ。河・海などで水陸の界に近いあたり。波のうちよせるあたり。なみうちぎは。みぎは。

萬葉集卷三に「いにしへのふるき堤は年ふかみ池のなぎさにみ草生ひにけり」

【乳母】 メノト。母に代つて子供に乳をのませ、かしづきそだてる女。ちおも。ちも。ちのひと。うば。にゆうば。和名抄卷二に「乳母、女乃度。」

枕草子卷二に「ちごのめのとのたどあからさまとて寝ぬるを。」

【をめき叫び給へども】 大聲でわめき叫ばれたけれども。「をめく」は大聲で叫ぶこと。高く呼びたてること。わめくこと。

宇治拾遺物語に「ひはぎありて、人殺すやとをめく。」
【漕ぎゆく船のならひにて云々】 漕ぎゆく船のあとにはい

つもきまつて白波がたつものであるが、今度の場合も、亦そのほとりて、たゞ白波が漕ぎ行く船のあとに立つてゐるばかりであつた。

【ならひ】は、世の常。あたりまへ。きまり。

こゝの「漕ぎ行く船云々」は頭註にあるやうに、拾遺集なる沙彌滿誓の歌によつて書きなしたのである。

沙彌滿誓。シャミマンセイ。姓は笠、名は廣。奈良朝時代の人。靈龜四年右大辨に任ぜられ、翌五年入道して滿誓と號した。七年勅を奉じて筑紫に觀音寺を造營し、その別當に補せられた。和歌をよくし、その詠が萬葉集・拾遺集等に收められてゐる。「沙彌」は佛門に入つて剃髮し、受戒したばかりの男子。僧行の未熟な初心の男僧。又、サミともいふ。

【拾遺集】は二十卷。勅撰二十一代集の第三。歌數一三五一首。撰定時代及び撰者については定説がない。一般には長徳の頃花山院の御撰といひ傳へられてゐる。

【涙にくれて】 涙のために目がくもつて。

濱松物語卷四に「いかばかり涙にくれて思ひ出でむ西へかたむく月を見つゝも」

【松浦小夜姫】 マツラサヨヒメ。大伴狹手彦の妻。狹手彦は上古の武將。金村の子。宣化天皇の二年(一九七)新

羅(シラギ)が任那(ミマナ)を攻めたとき、命を奉じて任那を援けた。次いで欽明天皇の二十三年(一二二二)兵數萬を率ゐて高麗(コマ)を討ち、大いにこれを破つて王宮に入り、珍寶を得て還つた。その出船に當り、その妻松浦左夜姫は別を惜しみ、山に登つて征船を目送し、領巾を振つてこれを麾いたといふ。今の佐賀縣東松浦郡鐘村にある領布振山(ヒレフルヤマ)は、その遺蹟であると傳へられてゐる。

【唐船】 モロコシブネ。支那の船。又それにならつて造つた船。からふね。たうせん。

伊勢物語に「おもほえず袖にみなとのさわぐかなもろこしぶねの寄りしばかりに」



【領巾】 ヒレ。古、貴婦人が頭にかけてかさりとした布帛。

古事記卷下に「も、しきの大宮人は鶉とり比禮(ヒレ)とりかけて。」

【あやしのふしど】 粗末なねどこ。俊寛のわびすまひにか

まへたかたばかりのそまつなねどこをさしていふ。「あやし」はいやししく、見ぐるしいこと。粗末なこと。【壯里息里が云々】 印度の故事。壯里・息里といふ兄弟が、まゝ母に悪まれて、海巖山といふところに捨てられたといふ話。

8 挿

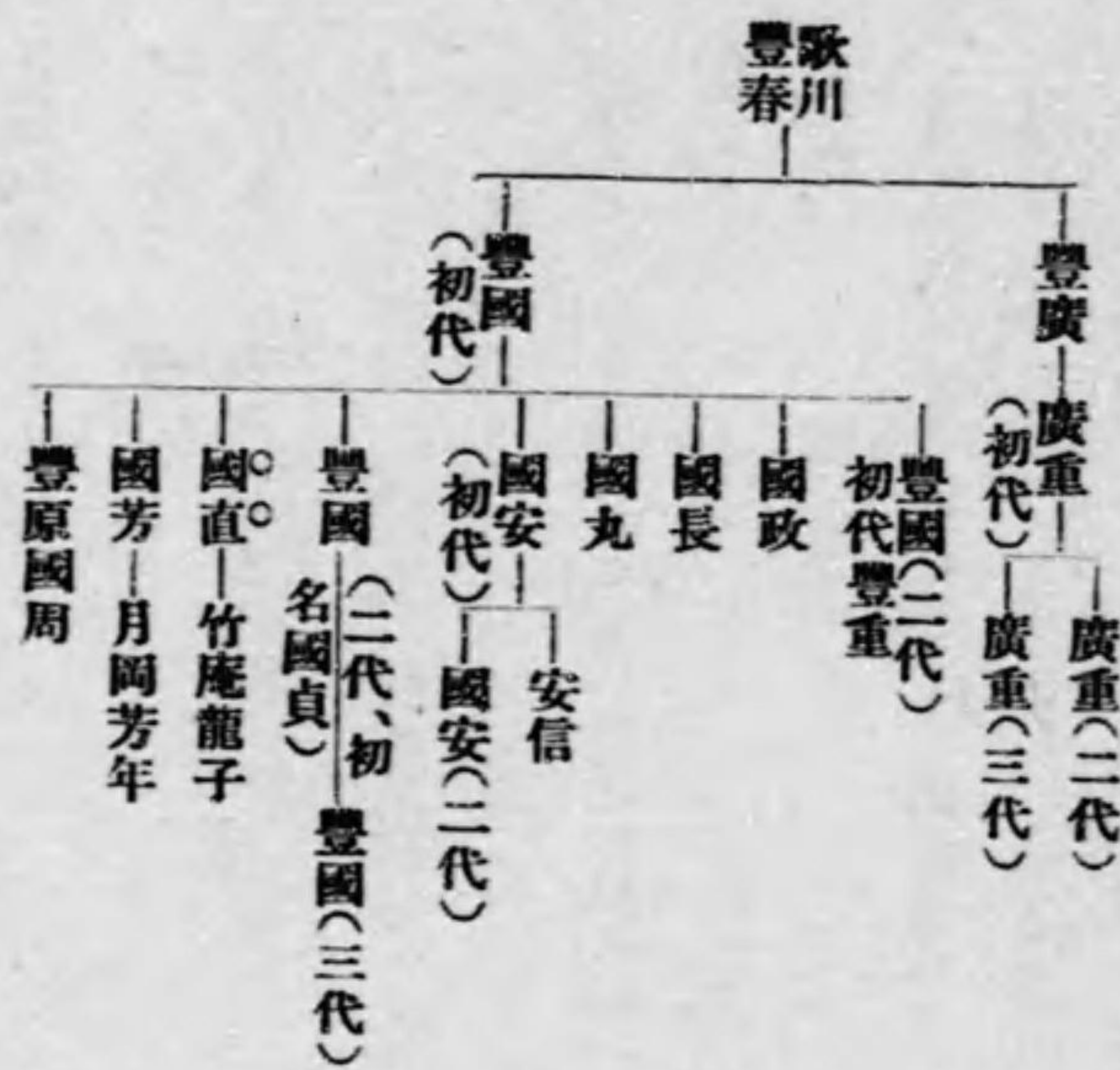
俊寛 歌川國直筆

俊寛が渚の小高い處にのぼり、足すりしながら、今しも鬼界が島を離れて都に歸らうとする(船もろとも)この鬼界が島で辛苦を分つた成經・康頼の二人をのせて都に歸らうとする船)に呼びかけ、「これ乗せて行け、具して行け。」とをめき叫んでゐるさまを描いたものである。

顔色憔悴、形容枯槁とでもいはれさうな俊寛のいたゞしいさま、漕ぎ行く船をもくつがへさんばかりなる俊寛のうらめしく、物ぐるほしいさまが、よく描き出されてゐる。

筆者歌川國直は、歌川派の巨匠。江戸の人。通稱は鯛藏。浮世庵烟柳樓と號した。後、名を吉川四郎兵衛と改め、寫樂齋と號した。文化天保年間の人。(次の系譜「國直」参照)

「歌川派」は浮世繪の一派。歌川豊春をその祖とする。豊春の後、勝川春章・北尾重政の二人が相並んで一流を起したが、その風が頗る時好に投じ、門葉が甚だ榮えた。門人に豊國・豊廣があり、豊廣の門下に廣重を出した。廣重は一代に傑出した名手で、一雄齊國貞・一勇齋國芳等と共に名を當代に馳せた。浮世繪の全盛はこの時を以て最とする和稱せられ、歌川派以外また浮世繪なきの觀を呈した。左にその略系譜を示さう。



9 参考

本文の鑑賞

内海月杖(弘藏)氏は、その著「平家物語評釋」の中に本文を評して次のやうにいつてゐる。俊寛が一人取りのこされたつらさが、平明な筆で、一通よく出てゐる。はじめに「御使は丹左衛門の尉基康といふ者なり。急ぎ船より上り……」と出したところが、まづ軽い筆づかひである。それから、「二人の人々は例の熊野詣してなかりけり。俊寛一人ありけるが……」と、わざと俊寛一人に敎文を読ませたのは、作者の巧である。そして最後の、「これ乗せて行け、具して行け」といふ絶叫のことばのところも、よく出てゐる。しかし全體からいへば、その悲痛な、悶絶的な光景は、遂にこれをここに見ることが出来なかつた憾がある。蓋しこれは作者の描くべき境地ではないのであらう。この作者の筆は、いつもその軽く筆をつけて、餘情を言外にひくといふところにその獨特の妙があらはれるのである。深刻といふがには、どうも筆が向かなかつたやうである。

七 平家の最後

高山 樗牛

1 解題

「樗牛全集」第三卷に收められた「平家雑感」(明治三十四年四月作)の中から、その最後の一節を採録した。その題名「平家の最後」は、編者が假につけたもので、原文にはない。

樗牛全集 チョギウゼンシフ 全五卷

樗牛の歿後、その弟齋藤信策及び親友姉崎正治が編集したものの。第一卷は美學及美術史、第二第三卷は文藝及史傳、第四卷は時勢及思索、第五卷は想華及消息より成つてゐる。明治三十七年、東京博文館發行。

2 作者

高山樗牛 タカヤマ チョギウ。

明治の文藝評論家。文學博士。名は林次郎、樗牛はその號である。明治二年山形縣鶴岡に生れた。第二高等學校を経て東京帝國大學文科大學哲學科に入り、二十九年卒業、第二高等學校教授と



たが、後個人主義に傾き、遂に美的生活本能主義を説き、ニイチエを紹介し、爲に是非の論を一時に沸騰させた。晩年日蓮を研究し、特にその人格を敬慕した。三十五年、三十四歳で歿した。駿河國田子浦畔龍華寺に葬られた。墓に刻して曰く、「吾人は須く現代を超越せざるべからず。」と。蓋しその理想を示すものである。

3 編纂の用意

諺にいふ「驕る平家は久しからず。」と。げにや、飛ぶ鳥をもおとさんばかりであつた平家の礎も、平重盛、つゞいて清盛の薨去と共に漸く衰へ、やがて急轉直下、一族を擧げて西海に奔り、遂に壇浦の藻屑と化してしまつ

た。その没落こそは一片斷腸の哀史である。これ、畢竟、積善の餘慶既に盡き、積悪の餘殃早くも身に及べるものでがなあらう。しかし、平家一門の人々は、協力一致、よくその没落の運命を共にし、先世の契を踐んで重代の芳恩に應へ、その最後に至るまで、よく名分を守つて、成敗の數を顧みなかつた。その雄々しい態度は、史を讀むものの等しく感歎するところである。多感多涙の樗牛、亦深くこゝに感ずるところあり、一管の筆をふるつて平家の男らしい最後をたゞへ、終にこの佳章を綴り成した。よろしくこれを熟讀翫味せしめて、名門の最後に一掬同情の涙をそゝがしめ、併せて史論の構成ならびにこれが敘述に關する要諦を會得せしむべきである。

4 要旨

古來亂離の世には反覆の常ならざることが習であるのに、平家の人々は克くその没落の運命を共にし、先世の契を踐んで重代の芳恩に應へ、眞に名門の最後として美しいものがあつた。源氏の興亡の如きは斷じてこれに比すべくもない。我は源氏となつて興らうより、寧ろ平家

となつて亡びることが望ましい。これが前段の要旨である。更に平家が没落の際に至るまで大義名分を執つて動かす、木曾その他反覆常なき輩に對し、殊に院宣に對し奉つても、己が奉ずる天子の御權威と神器の尊嚴とを傷けず、正々堂々と應對奉答したところは、實に稱讚するに餘りがある。後段は、この點を具體的に敘して、その美はしい態度を感歎強調したものである。

5 概説

全篇の構造 四三頁の空行を以て前後二段に別たれてゐる。前段は平家の人々がその末路を共にしたことを稱へ、後段は、その没落の際に至るまで、特に大義名分を守つた點を賞した。更に前後兩段を節によつて示せば、次の通り。

第一節(四〇頁—四二頁二行) 亂離の世には反覆の人が多いの、平家は一人(池殿大納言頼盛)の例外はあつたにしても、よく諸共に、名門の最後として立派な態度に出でた。

第二節(四二頁末行—四三頁五行) 源氏の興亡と比較し

て、平家の末路を稱へた。

第三節(四三頁六行—四四頁) 大義名分を重んじて木曾義仲の勧誘を退くる言辭の堂々たるを稱へた。

第四節(四五頁一行—九行) 平時忠は緒方三郎の忘恩的言動に對して毅然たる態度を示した。

第五節(四五頁一〇行—四七頁) 神器を都に上すべき由の院宣に對する平家の請文の莊重變びなきを讚した。結論。

6 取扱上の注意

平家の人々は、作者の筆によつて美化されてゐる。美化されてゐると言つても必ずしも事實が曲げられてゐるといふのではない。唯、平家の人々が自らは必ずしも意識してゐなかつたであらうと思はれる心境まで、作者がよくこれを寫し出してゐるといふのである。本篇の前段に於ては殊にその感を深うする。われ等は心をすなほにして、作者と共に平家の末路の美しさを讚美するのは當然のことであるが、その平家を讀するの餘り、源氏を貶する言辭に至つては、多少の批判を挿み得るであらう。例

へば頼朝に對して「雅びたる優しき心つゆばかりも持たざりき」とまで言つてゐるが、果してさう斷じ去つてよろしいであらうか。

後段に至つては、作者の主觀よりも、直接に平家物語の本文に據つてゐる部分が多いので、前段よりも讀者に迫る力が著しく強くなつてゐる。これも平家の人々自身の大義名分の念から出たか、或は平家物語作者の心から出たかといふことが根本的には問題になるが、そこまで考へるのはさし當つて國語教授の仕事ではない。われ等はたゞかくの如き平家の描寫を通して、日本の日本たる所以がそこに顯現されてゐることを看取しなければならぬ。即ち一家一門の没落にさし迫つても、苟も大義名分に關し、殊に天皇・神器の尊嚴に係はる事件に直面しては、かくまでに堂々たる態度を執り、飽くまでも強く正しきを持って、傍の者をして肅然として襟を正さしめないではおかないといふことが、實に我が國體の精華である。

要するに、本課は平家の最後の美はしくもまた大きかつ

たことを考へさせるのが主眼ではあるが、その扱ひ方に於ては、前後兩段に於て多少異なるものがあつてよろしいと思ふ。前段は感想である、詩である。後段は議論である、道である。

7 設問

- 1 「反覆の人」とは、俗には如何なる人をいふか。
- 2 この文に於て、對句的に語句の配置を考へたと思はれる點を指摘せよ。
- 3 詠歎的な句調のところをあげよ。
- 4 作者の考へ方が、やゝ極端に走つてゐると思はれる點はないか。
- 5 前段と後段とを比較して、内容上如何なる相違を感じるか。
- 6 前後兩段を通じて、一貫してゐる作者の精神は何と説明したらよいか。

8 釋義

【亂離の世】 ランリのヨ。國がみだれて人民どもの離散する世。

る世。

左傳の宣公十八年に「亂離瘼矣。爰其適歸。」

【反覆の人】 ハンプクのヒト。心がはりして、信義を破る人。

詩經の小雅に「豈不懷歸。畏此反覆。」

【人情】 ニンジャウ。(一) 人類の本能としてそなへてゐる情愛。なまけ。いつくしみ。(二) 人心自然の情狀。こゝは(二)の意。

【さもさうず】 「さも候ふぞ。」の約轉。さうでもあらう。

【池殿大納言】 イケドノダイナゴン。平頼盛。清盛の異母弟。平治の亂に源義朝と戦つて破れたが、仁和寺で藤原信頼を虜にして功を樹てた。累進して正二位大納言に至つた。その居を池殿といふ。よつて世に池殿大納言と稱した。初め源頼朝は平宗清の口入によつて頼盛の母池尼に救はれた。よつて屢書を頼盛に贈つてこれを慰安した。頼盛も亦宗盛等と共に西海に赴かうとせず、京都に留まつた。壽永三年五月、頼朝は使を遣はして頼盛及びその臣平宗清を鎌倉に招いた。宗清はこれを固辭した

が、頼盛は遂にその請を容れて鎌倉に赴いた。頼朝は厚くこれを接待し、その京都に還るに及んで、奏してその采地及び官爵を復した。

【舊恩】 キウオン。頼盛の母池尼が、清盛に對して頼朝の命乞をして、その一命を救うた恩誼。

【兵衛佐】 ヒウエノスケ。源頼朝。頼朝は當時右兵衛權佐であつた。よつてかやうにいつたのである。

「源頼朝」は鎌倉幕府第一代の將軍。義朝の第三子。平治の亂のとき年十三。父兄に従つて頗る戦功があつた。軍遂に敗れて平宗清に捕へられたが、池禪尼によつて死を免れ、伊豆の蜷が島に流された。以來蜷居二十餘年に及んだが、治承四年(一八四〇)以仁王の令旨を奉じて兵を擧げ、伊豆を略した。不幸石橋山に敗れて安房に逃れたが、やがて再び勢を得て關東を服し、居を鎌倉に構へた。後、弟範頼・義經を遣はして義仲を斃し、畷いで平氏を一の谷・屋島に攻め、遂にこれを境の浦に滅した。幾ばくもなく弟義經と隙を生じ、これを機として諸國に守護・地頭を置き、文治五年奥州に藤原泰衡を討滅し、天下を統一した。建久元年入京して權大納言に任じ、右近衛大將を兼ねたが、間もなく職を辭して鎌倉に歸つた。翌二年、前右大將家として諸役所を置き、幕府の職制を整へた。同三年征夷大將軍に任ぜられ、正治元年(一八五九)正月薨じた。年五十三。世に鎌倉殿又は鎌

倉右大將といふ。その墓は鎌倉法華堂址の背後にある。

【芳心】 ハウシン。他人の示してくる親切な心。芳情。厚情。厚意。

【大臣】 ダイジン。こゝでは太政官の上官、即ち太政大臣・左右大臣及び内大臣の稱。

太政官は古、八省、諸司及び諸國を總管し、太政を統理した官廳。

【納言】 ナゴン。太政官の次官。大納言・中納言及び少納言の總稱。ものまうすつかさ。

【衛府】 エフ。六衛府、即ち左右近衛府・左右衛門府及び左右兵衛府の稱。共に王朝時代禁闕を警護する官府。各、大將・中將・少將等の官員があつて、その職に任じてゐた。

【諸司】 ショシ。もろ／＼のつかさ。「司」は古、省の被管にして、寮に次ぐ官署。主水司・主膳司の類。

正(カミ)・佑(ジウ)・令史(サク)等の官員があつた。

【判官】 ジウ。古昔の官制で、次官(スケ)の下主典(サ

クワン)の上に位した。官によつてその文字を異にするけれど、訓はすべて同じである。即ち太政官には少納言・辨、神祇官には祐、省には承、彈正には忠、使には判官、職・坊には進、寮には允、司・署には佑、内膳には典膳、近衛府には將監、兵衛府・衛門府・檢非違使廳には尉、内侍には掌侍、太宰府には監、鎮守府には軍監、國には掾、郡には主政、家には従といふ。

修め給うた果報として現世に生れ出て給うたものであるといふ佛者の説に基づいた語。「十善」とは十戒を保つことで、不殺生・不偷盜・不邪淫(以上、身業)・不妄語・不兩舌・不惡口・不綺語(以上、口業)・不貪欲・不瞋恚・不邪見(以上、意業)をいふ。

【ゆゑし】 いみじくもめでたいこと、けなげなこと、ををしいこと、あつばれなこと、非凡なことなどにいふ語。こゝは、を、しい意に用ひてある。

【前世】は現世に生れ出る前の世。先世。保元物語、左府御最後の條に「かゝる事を見るも前世の宿業か。」

【積善の餘慶】 善行を積んだ報いとして来る喜びごと。易經の文言傳に「積善之家、必有餘慶、積不善之家、必有餘殃。」

【契】は前世よりの約束。宿縁。竹取物語に「昔の契ありけるによつてなむ、この世界にはまうできたりける。」

【積悪の餘殃(ヨアウ)】 悪行を積んだ報いとしてめぐり来るわざはひ。前の「積善の餘慶」参照。

【十善の帝王】 ジフゼンのテイワウ。天子は前世に十善を

【重代の芳恩に應へなんす】 父祖代々受け來つた有りがたいみめぐみにむくい奉らうとおもふ。このあたり數行は、平家物語卷七「福原落の事」の文に據つて書いたものである。今その原文を左に掲げよう。

平家は福原の舊里に着いて、大臣殿(宗盛)然るべき侍、老少數百人召してのたまひけるは、「積善の餘慶家に盡き、積悪の餘殃身に及ぶが故に、神明にも放たれ奉り、君にも捨てられまゐらせて、帝都を出でて旅泊に漂ふ上は、何の頼みかあるべきなれども、一樹の陰に宿るも、前世の契違からず、同じ流を掬ぶも、他生の縁猶深し。況や汝等は一旦従ひつく門客にあらず、果祖相傳の家人なり。或は近親のよしみ他に異なるもあり、或は重代芳恩のこれ深きもあり。家門繁昌のいにしへは、その恩波に依つて私を顧みき。何ぞ今その芳恩を報いざらんや。然れば十善の帝王三種の神器を奉じて渡らせ給へば、如何ならん野の末、山の奥までも、行幸の御供申して、如何にもなりなんと。思はずや。」と言へば、老少皆涙を仰へて、あやしの鳥獸も恩を報じ、徳を報ゆる心は候ふなり。況や人倫の身として、いかでかその理を存じ仕らでは候ふべき……

の譯はるゝや、清盛は大いに憤り、法皇を幽し奉らうとした。重盛は變を聞いて馳せ至り、大義名分を説いて父を諫め、事なきを得た。治承三年(一八三九)薨。年四十一。小松殿とも稱し、又燈籠大臣ともいふ。

【入道大相國】 ニッダウダイシヤウコク。平清盛。前課「足摺」の條なる「入道相國」参照。

【照鑑あれ】 明らかにみそなはしませ。【照鑑(セウカン)】は、神佛の明らかにみそなはし給ふにいふ語。

【淨蓮大禪門】 ジャウレンダイゼンモン。平重盛の法號。「禪門」とは、佛門に入つた男子の稱。「禪尼」の對。

【是非なるも】 「是非なくも」の音便。やむを得ず。いたしかたなくも。せんかたなくも。

【平重盛】は清盛の長子。忠亮勇武、徳望が一世に高かつた。保元・平治の亂に功を立て、内大臣に累進した。藤原成親が後白河法皇に寵せられ、清盛を除かうとして事

【武運の末】 ブウンのヌエ。武運がつきはてること。【武運】は武士の運命。義經記卷五、判官吉野山に入り給ふ條に「武運盡きて都へかへすにはあらず。」

【東夷】 アヅマエビス。(一) 東國に住んでゐた蝦夷。(二) 東國人の無骨なのを嘲つたいふ語。こゝは(二)の意。門出八島に「色知らぬ東えびすの糞信め。」

【品】 シナ。品位。品格。品性。【いふばかりなし】 ことばにいひつくされぬ。いひやうがない。

宇津保物語の貴官の巻に「少將いふばかりなく泣きまどひて。」

【重代の仇】 チウダイのアタ。父祖累代のあたかたき。

【同門の隙】 ドウモンノゲキ。一族間の不和。頼朝がその弟義経・範頼等と不和になつたことをいふ。

【四海】 (一) 四方の海。(二) 天下。國內。世の中。四方の外國。四方のえびす。こゝは(二)の意。

書經の説命に「四海之内、咸仰朕德。」

【閭閻の禍】 ゲキシウのワザハヒ。うちわもめのわざはひ。兄弟の争。

詩經の小雅に「兄弟鬩于牆、外禦其侮。」

【智謀】 チボウ。智慧のあるはかりごと。かしこきはかり

ごと。

史記の陳丞相世家に「平以榮名終、稱賢相。非智謀、誰能當之者乎。」

太平記卷三、楠の條に「天下草創の功は武略と智謀との二つにて候。」

【雅(ミヤ)びたる優(ヤサ)しき心】 上品で優美な心。風流で上品な心。

【つゆばかりも】 いさゝかも。少しも。

【我執】 ガシフ。佛語。吾人の心身中に、事物を主宰すべき常住不滅の實體があると執すること。又、我意をはりとほすこと。我に執着すること。

【嫉(ネタミ)深く心僻(ヒガ)めり】 嫉妬心が深く、心がねちけてゐる。

【讒奸】 ザンカン。讒人奸者。

【讒】は、莊子に「好言人之惡、謂之讒」とあるやうに、他人の善をにくみ能を忌んで、これをそしり傷けることをいふ。

【奸】は、心のねちけまがつてゐること。

こゝは頼朝と義経とを離間した梶原景時等をさしていふ。

【骨肉】 コツニク。血族の親しい關係ある親子・兄弟など、即ち血を分けた親しい間柄をいふ。

史記の始皇本紀に「施德厚骨肉。」

今昔物語卷二十六に「弟・骨肉とても心をゆるすまじきなり。」

【連枝】 レンシ。本を同じうし、枝を連ねる義。高貴の人の兄弟をいふ。

蘇武の詩に「況我連枝樹、與子同一身。」

保元物語、新院御遷幸の條に「主上・上皇御連枝なり。」

【路傍の人】 ロバウのヒト。みちばたの人。自分と何の關係もない人。道路の人。

【權勢】 ケンセイ。權力と威勢。權威。戰國策、趙に「臣願損功名、去權勢、以離衆。」

平家物語、官軍除目の條に「權勢に恐れて心ならず交るにて候ひき。」

【家臣】 けらい。家人。こゝは北條時政等をさしていふ。

【宗家】 ソウカ。一門の本宗たる家筋。本家。

漢書の章玄成傳に「賢門下與宗家計議。」

【祀を絶つ】 祖先の祭祀を絶つこと。一家の滅亡することにいふ。

【義に殉(シタガ)ひ恩に死す】 主君の恩義に感激して、その歿後、おひばらを切つて死ぬこと。

【兵威】 ヘイキ。軍隊の威力。軍兵の威勢。

史記卷朝鮮に「滿得兵威財力、侵降其傍小邑。」

【利運】 リウン。よきめぐりあはせ。好運。孕常磐、五に「源家利運の御吉相。」

【一掬の涙を幾ぐ】 イッキクのナミダをソ、ぐ。はら／＼と涙を出してその不幸に同情をよせる。

【一掬】は、ひとすくひ。僅少なたとへにいふ。

太平記卷二十三、將軍逝去の條に「卵塔一掬の塵となりけり。」

【人事の常】 人間世界にありがちのできごと。

【運命】 ウンメイ。めぐりあはせ。運。

南史の羊玄保傳に「文帝嘗曰、人仕官、非唯須才亦

須^ツ運命^〇」

【幸慶】 カウケイ。よろこび。さいはひ。慶福。

【大義名分】 タイギメイブン。人の守るべき節義と分限。

【大義】は、人倫の重大なる義理。又、君國に對する臣民の義理。

「名分」は、名によつてあらはされた人倫上の分際、即ち君に對しては臣たる分際があり、親に對しては子たる分際がある類。

【ゆゝしくもまたあはれの極みなりき】 いかにもを、しく、又あつばれの至であつた。

「ゆゝしく」のことは、前に出てゐる。

「あはれ」は、感歎のことば。つまつては「あつばれ」といふ。

【木曾は兵衛佐に疎まれて云々】 木曾義仲は已に京師に入り、蓮華王院で後白河法皇に謁し、まのあたり平家追討の院宣を奉じた。尋いで従五位下に叙せられ、左馬頭に任じ、伊豫守となり、院昇殿を許された。既にして漸く驕恣となり、部下の兵は京都を縦横し、院御領以下、公

卿の莊田を損じ、民家の資財を劫掠し、京都は爲に騒然たる有様であつた。法皇はやゝこれを厭ひ給ひ、將に頼朝を召さうとせられたので、義仲は悦ばずしてこれを拒まうとした。是より先、頼朝は鎌倉にゐて關東を略定し、勢威が日に熾んになつたが、今や義仲が先づ京師に入つて平家を逐つたのを見て、快しとせず、これを除くことに決し、遂に範頼・義經を遣はして義仲を討させた。本文はこの事實を指していつたのである。

義仲は源爲義の孫。義賢の子。頼朝の従弟。二歳のとき父義賢は義平の爲に殺された。そのとき義仲も殺されようとしたが、畠山重能の情によつて免れ、齋藤實盛の乳母の夫なる中原兼遠に木曾に養はれた。俗に木曾義仲又は朝日將軍といふ。頼朝の舉兵に應じて兵を信濃に擧げ、北陸道を徇へ、俱利伽羅峠に平氏の大軍を破つて京都に攻上つた。然るに功を恃んで横暴の行が多かつたので、遂に後白河法皇の御信頼を失ひ、ついで頼朝の二弟範頼・義經に討伐せられ、宇治・勢多に敗れて、近江の栗津に討死した。時に壽永三年(一八四四)、年三十一。

【疎(ウト)まれて】 うとんぜられて。

【東國の討手はや途にあり】 東國からおしよせてくる征討軍(範頼・義經の率ゐる一隊)が、最早途中までおしよ

せてゐる。

【院宣】 キンゼン。源頼朝を討伐せよとの後白河法皇の御宣旨。

義仲は強ひてこの院宣を請ひ奉り、頼朝にたてづかうとしたのである。

【孤軍】 コグン。遠くかけはなれてたすけなき軍隊。孤立して應援なき軍隊。味方との聯絡のない小勢の軍隊。懸軍。

【勝算】 シウサン。勝利を得べき心算。勝つべき見込。

【使を西國に立て云々】 平家物語卷八「法住寺合戦の事」の條に

木曾、西國へ使者を立て、急ぎ上らせ給へ、一つになつて關東へ馳せ下り、兵衛佐討つべき由言ひ遣はしたりけれども、大殿殿をはじめ奉つて一門の人々は皆悦びけれども、新中納言知盛卿の異見に申されけるは、「假令世は季になり候へばとて、木曾などに語られていかでか都へ上らせ給ふべき。十善の帝王、三種の神器を帯して渡らせ給へば、甲を脱ぎ弓の弦をはづしてこれへ降人に参れと申させ給ふべうもや候らん。」と申されければ、大殿殿この様を御返事ありしかども、木曾用ひ奉らず云々。

とあるより取つた。

【合體】 ガツタイ。體と體とが一つに合ふこと。一致すること。合同すること。

晉書の謝安傳に「宮室用成、合^ツ體^〇辰極^ニ」

【よしや】 たとひ。よしんば。

【季】 スエ。澆季な末世。道徳が衰へ、人情が輕薄となつたすゑの世。

【かたらはれて】 説得されて。

「かたらふ」とは、他を説いて、わが仲間にひき入れること。

【須らく】 スベカらく。すべきこととしては。すべき用法としては。必要としては。(下に「べし」と受けるのが例である。)

【甲(カブト)を脱ぎ、弦(ツル)を外し】 武装を解くことにいふ。

【軍門】 陣屋の門。陣營の入口。陣門。

史記の吳太伯傳に「吳王聞^レ之、哭^ニ于軍門外^〇三日。」太平記卷四、吳越軍の條に「自ら吳の下臣と稱して、

吳の軍門に降り給ふ。」

【言辭】 ゲンジ。ことば。ものいひ。言詞。

吳質の答、東阿王書に「威容虧替、言辭漏洩。」

【堂々】 ダウ／＼。立派なさま。雄大なさま。威嚴のあるさま。

論語の子張篇に「堂々乎張也、難與爲仁矣。」

太平記卷十二、公家一統政道條に「凡そ事の體、嚴重に見えて堂々たり。」

【没落のやからに類はざるや】 今しも没落しようとする一族に不似合(言辭の堂々たること)であるのか。

「類ふ(タグふ)は、そふこと。ならぶこと。似ること。似あふこと。」

【權變】 ケンベン。變に應じて臨機(シムキ)の處置をなすことの變通。

史記の蘇秦傳の贊に「蘇秦兄弟三人、皆遊說諸侯、以顯名、其術長於權變。」

【類勢】 タイセイ。おとろへたありさま。衰頹の形勢。衰運。頹運。

【かゝる時こそ乗すべき機會なれ】 このやうな時こそつけこむべきよいをりである。

「乗す(ジウウ)は、つけいること。つけこむこと。」

「機會(キクヱイ)は、よい場合。をり。はずみ。」

唐書(キクヱイ)の陸贄傳に「疾徐失宜、則機會不及、機會不及、則氣勢自衰。」

【成敗の數】 事の成ると敗れるとの運命。

史記の高祖本紀に「天下恟々、苦戰數幾、成敗未可知。」

こゝでは「セイハイ」と澄んでよむ。「セイバイ」と濁つてよむと、さばき、しおき、こらしめ、きりすて、などの意となる。

【迂】 ウ。まはりどほいこと。迂遠。

【託(ハチ)を含みて存(ナガラ)ふ】 はちをたへしので、餘命を保つこと。

左傳に「國君含託天道也。」

【その太宰府に落ちゆくや云々】 平家物語卷八「太宰府落の事」の條に次のやうに見えてゐる。

さる程に、平家は筑紫に都を定め、内裏造らるべしと公卿會議ありしかども、惟義が謀叛によつてそれも叶はず、新中納言知盛卿の意見に申されけるは、「かの緒方三郎は小松殿の御家人なり。然れば君達御一所向はせ給ひて、拵へて御覽せらるべしとて、新三位中將資盛、その勢五百餘騎、豊後國にうち越え、様々に拵へたまへども、惟義従ひ奉らず、剩「君達をも取りこめまらさすべく候へども、大事の中の小事なしとて取りこめまらせずば、何程の事か候ふべき。唯太宰府へ還らせ給ひて、御一所にていかにもならせ給へ。とて、おつかへし奉る。」

その後惟義が次男野尻次郎惟村を使者にて、太宰府へ申しけるは、「平家こそ重恩の君にたまはし候へば、甲を脱ぎ弓の弦を外して降人にまゐるべく候へども、一院の仰には、速に九國の中を追ひいだし奉るべき由候ふ。」と申し送りたりければ、平大納言時忠卿、緋緒括の袴、絲葛の直垂、立烏帽子にて惟村に出でむかひて宜ひけるは、「それが君は天孫四十九世の正統、神武天皇より人皇八十一代に當らせ給ふ。されば天照大神・正八幡宮も、わが君をこそ守りまらせ給ふらめ。就中當家は、保元・平治よりこのかた、度々の逆亂をしづめて、九州のものとどもをば皆内さまへこそ召されしか。然るにその恩を忘れて東國・北國の凶徒等、頼朝・義仲等にかたははれて、しおほせられたらば國を預けん、庄をたばんと申すを誠と思ひて、その鼻豊後が下知に従ふらんことこそ然るべからぬ。」とぞ宜ひける。豊後

國司刑部卿三位頼資卿は極めて鼻の大きなりければ、かやうには宜ひけるなれ。

惟村歸つて父にこの由を告げたりければ、「こはいかに、昔はむかし、今はいま、その儀ならば、九國の中を追出し奉れや。」とて勢ぞろへと聞えしかば、源大夫判官季定、攝津判官守澄、向後傍輩の爲奇怪に候、召しとり候はんとて、その勢三千餘騎にて筑後の國にうち越え、高野、本城に發向して、一日一夜せめたゝかふ。されども惟義が方の勢、雲霞の如くに重れば、力及ばで引退く。平家は緒方三郎惟義が三千餘騎の勢にてすでに寄すと聞えしかば、取るものも取りあへず、太宰府をこそ落ち給へ。……

【緒方の三郎】 名は惟義。豊後の人。もと平家の臣であつたが、壽永二年後白河法皇の宣旨を奉じて源氏に興し、九州にあつた平氏の兵を逐拂つた。

【一院】 イチノキン。こゝは後白河法皇を申し奉る。

後白河法皇は第七十七代。御諱は雅仁。鳥羽天皇の第四皇子。即位の翌年保元の亂が起つた。在位二年、御位を皇子守仁親王(二條天皇)に譲らせられて院政を聽きたまひ、後法皇とならせられた。その院政は後鳥羽天皇まで三十餘年に及んだ。延久三年(一八五二)三月十三日崩、五朝壽六十六。

【もだし難ければ】 そのまゝに打ちやつておくわけにまゐりませんか。

「もだす」は、(一) 言ふべきを言はないで、だまつてをること。(二) そのまゝにうちすておくこと。空しくすること。あだにすること。こゝは(二)の意。

【平大納言】 平時忠。大納言高棟の後、兵部權大輔時信の子。その妹一人は後白河天皇の后となり、一人は平清盛に嫁した。爲にその權威は内外を傾け、平關白と稱せられた。累進して治承三年正二位に叙せられ、壽永二年權大納言に任ぜられた。その秋安德天皇に供奉して西海に赴いたが、壇の浦敗戦の後内侍所を奉じて京に歸つた。流罪を免されんことを請うたが、深く頼朝に忌まれてゐたので、聽きとゞけられず、能登に流されて配所に終つた。時に文治五年(一八四九)、年六十。

【衣冠束帯】 イクワンソクタイ。

「衣冠」は袍を着、冠を被り、指貫を穿くこと。

「束帯」は冠・袍・下襲(シタガサネ)・裾(キョ)半臂(ハンビ)・袴(アコメ)・單(ヒト)・大帷(オホカタビラ)・表袴ウ(ノハ

して、神武天皇以後の天皇を申し奉る語。

【祖宗】 皇祖皇宗。

建國の始祖と中興の君主。又ひろく現代以前の君主を申し奉る語。

我が國では天照大神を皇祖とあがめ奉り、神武天皇以後の歴代の天皇を皇宗とあがめ奉る。

漢書の宣帝紀論に「功光祖宗、業垂後嗣。」

【歴代】 歴來つた代々。歴世。

晉書の衛恆傳に「魏文好古、世傳丘墳、歴代莫發、眞僞靡分。」

【神靈】 神のみたま。神の靈徳。

戰國策、趙に「非社稷之神靈、即離畿不守。」

【保元平治以來】 保元の亂及び平治の亂このかた。

「保元の亂」のことは、前課「鎮西八郎」の釋義、「新院」の條に見えてゐる。

「平治の亂」は二條天皇の平治元年(一一八九)に藤原信賴・源義朝が京都に於ておこした戰亂。平治元年信賴・義朝は平清盛父子が熊野に詣でた不在に乘じ、急に兵を

カマ・大口(オホグチ)・石帶(セキタイ)・魚袋(キョタイ)・劍・平緒(ヒラヲ)・笏(シヤク)・襪(シタウツ)・靴等を身につけること。
平家物語の本文には、前に示したやうに「緋緒括の袴、絲葛の直垂・立烏帽子にて云々」とあつて、こゝの記事と相違してゐる。
それゆゑ、こゝはたゞ「服装をとゝのへ、威儀を正して」といふほどの意と見たらよからう。

【人皇】 ニンノウ。「ニンノウ」とよむ。神代の神々と區別



擧げて後白河上皇並に二條天皇を幽し奉り、藤原通憲(信西)を殺し、信賴は自ら大臣大將となつた。清盛は變を聞いて馳せ歸り、天皇を六波羅の自邸に迎へ奉り、子重盛をして信賴・義朝を討破らしめた。信賴は捕へられて斬られ、義朝は東國に走つてその舊臣長田忠致に殺され、その二子頼朝は伊豆に流された。

【逆亂】 ギャクラン。叛逆の結果おこるところの争亂。

【内さま】 禁裏方。官軍方。

【東夷】 アヅマエビス。東國の人の無骨なのをいやしめていふ語。こゝは東國なる源氏をいやしめていふ。

門出八島卷二に「色知らぬあづまえびすの繼信め。」

【下知】 ゲチ。さしづ。いひつけ。命令。指揮。
三代實錄卷十七、貞觀七年十二月十七日の條に「下知東海・東山・北陸・山陰・南海道、依件行_レ之。」

【奇怪至極】 キクツイ(キククツイ)シゴク。甚だ奇怪なること。たいそうけしからぬこと。

奇怪は、(一) あやしむべきこと。ふしぎなること。(二) あやしくとがむべきこと。けしからぬこと。こゝは(二)

の意。

源平盛衰記卷十五、三位入道入寺の條に「門前を下馬もせで通りはべる、奇怪におぼゆれば、追つかけて討ち留めん。」

【本三位中將】 ホンサンミノチウジャウ。中將にして三位に敘せられた人。こゝは平重衡を指す。

「本」は權中將に對して、本位の中將を意味する。

「平重衡」は清盛の第五子。重盛の弟。應保二年從五位尾張守、治承四年藏人頭に補せられ、果進して左近衛中將に至つた。治承四年平頼政の亂を平げ、次いで東大・興福二寺を攻めてこれを燒き、養和元年源行家と洲股川に戦つてこれを走らせ、壽永二年源氏の將を備中水島に討つてこれをたふす等、屢々戰功を立てたが、翌三年一ノ谷の戰に生田の森で義經の軍に捕へられ、終に鎌倉に送られた。翌四年(一八四五)興福寺の僧徒の請によつて更に奈良に送られ、十津川で斬られた。時に時二十九。

【一の谷】 兵庫縣神戸市須磨の西方にある地。鐵拐(テツカイ)。鉢伏の兩山が明石海岸に迫つたところで、僅に一路が東西に通じてゐる。壽永三年(元暦元年)(一八四四)源頼朝の將範頼・義經が平家の大軍を破つた古戰場として知られてゐる。

【院宣屋島に下りて】 「院宣」は院司が院の旨を奉じて下知する文書。こゝは後白河院の御宣旨。「屋島」は高松市の北東に突出する長さ五軒の半島。もと高松の東濱と長門の壇の浦との間に一條の小路を通じてゐたときは島であつた。文治元年平氏は安德天皇を奉じてこの島に走つた。平家物語卷十「屋島院宣の事」の條に

日數經れば、院宣の御使、おつぼの召次花方、同じき二十八日讃岐國至島の磯に下り着きて院宣を取出して奉る。大臣殿以下の卿相雲客寄りあひたまひてこの院宣を開かれたり。「一人聖體、北關の九禁を出で、諸州に幸し、三種の神器、南海・西海にうづもれて數年を經、尤も朝家のなげき、亡國の基なり。抑ゝかの重衡卿は東大寺焼失の逆臣なり。すべからず頼朝朝臣申し受くる旨に任せて死罪に行はるべしといへども、獨り親族にわかれて既に生擒となる。籠鳥の雲を戀ふる思、遂に千里の南海に浮び、歸雁友を失ふ心、定めて九重の中途に通せんか。然れば則ち三種の神器都へ返し奉らんに於ては、重衡卿を殺害せらるべきなり。院宣かくの如し。仍つて執達件の如し。壽永三年二月十四日、大膳大夫成忠が承り謹上、前平大納言殿へ。」とぞかかれたり。

とある。

【請文】 ウケブミ。おほせを承つた旨をしるした文書。請

書(ウケシ)。請狀(ウケジャウ)。

朝野群載卷四に「領狀の請文書きて奉ると見て、覺めにけり。」

【莊重】 サウチウ。おごそかでおも／＼しいこと。

【承り畢んぬ】 ウケタマハリヲハんぬ。「承り畢りぬ」の撥音便。「承りました」といふほどの意。

【通盛卿】 ミチモリキヤウ。平教盛の子。清盛の甥。長治・治承の間、越前守兼中宮亮に進み、從三位に敘せられた。養和元年平重衡と共に源行家を洲股川に破り、更に木曾義仲と越前に戦ひ、利あらずして引還した。壽永三年(一八四四)一の谷の戰に討死した。

【宥恕】 イウジ。犯した罪をゆるすこと。

王珪の文に「宥恕刑獄、懷保寡寡。」

【正統の天子】 正しき御系統をうけつがせたまふ天子。

【我が君】 安德天皇。第八十一代。御諱は言仁(コトヒト)。高倉天皇の皇子。御生母は建禮門院徳子の方で、平清盛の女。平氏に擁せられて西國に幸し給ひ、壽永四年(一八四四)三月長門の壇の浦に入水して崩御遊ばされた。

時に御年八歳。

【故高倉の院】 「故」は既に故人となつたものの姓名の上にかむらせる語。

「高倉の院」は第八十代の天皇。御諱は憲仁。後白河天皇の第七皇子。御母は建春門院平滋子。應保元年九月御降誕、仁安元年十月立太子、同三年三月御即位。治承四年二月安德天皇に御讓位あつて太上天皇の尊號を受けさせられ、同五年(一八四一)六波羅の池殿で崩御。壽二十一。

【東夷北狄の禍】 トウイホクテキのワザハヒ。「東夷」は關東なる源頼朝を指し、「北狄」は北國なる木曾義仲をさす。

【行幸】 ギヤウカウ。天子のみゆき。

史記の孝景本紀に「行幸雍、郊見五帝。」

宇津保物語の嵯峨院の卷に「辰の二點ばかりに、内のみかど行幸したまへり。」

【天に二日なく國に二君なし】 天にかゝるはたゞ一つの太陽、國にましますはたゞ一人の君のみであるとの意。

禮記に「天無二日、土無三王、尊無二上、示民有君臣之別一也。」

孟子の萬章上に「孔子曰、天無二日、民無二王……。」
【還幸】 クワンカウ。天子の行幸先から還らせたまふこと。還御。

【逆賊の裔】 ギャクゾクのエイ。謀叛人の子孫。保元の亂に於ける爲義（頼朝の祖父）、平治の亂に於ける義朝（頼朝の父）を叛逆者と見て、かやうにいつたのである。

【入道相國の慈悲によりて云々】 平治の亂起るや、頼朝は右兵衛權佐に補せられ、父兄と共に大内に據つた。時に年十三。軍敗るゝに及び、父義朝に従つて東國に赴いたが、道を失して父と別れ、遂に平頼盛の家臣平宗清に捕へられて六波羅に送られた。宗清は之を憐み、清盛の繼母池禪尼によつて助命を乞ひ、遂に釋されて伊豆國姪ヶ島に流された。本文はこの事實をさしていふ。

【慈悲】は、いつくしみ、なさけ。あはれみ。

觀無量壽經に「佛心者大慈悲是。」

榮華物語の月宴の卷に「心のどかに慈悲の御心ひろく、世をたもたせ給へれば。」

【鴻恩】 コウオン。鴻大な恩。大恩。

吳越春秋に「蒙大王鴻恩、得君臣相保。」
曾我扇八景の中段に「乳房を含め抱きかへ、育てられたる鴻恩は。」

【妄に干戈を弄ぶ】 みだりに戦を交へること。「干」はタテ、「戈」はホコ。共に戰場に於て常に用ひる武器である。

左傳の昭公元年に「日尋于戈、以相征伐。」

史記の五帝紀に「軒轅乃用干戈、以征不享。」

【當家累代の奉公】 タウケルキダイのホウコウ。この平家が代々その君につくし奉つた忠節。

【累代】は、世をかさねること。又その代。代々。歴代。

累世。

晉書の惠帝紀に「焚累代之寶。」

宇津保物語の忠乞の卷に「るゐだいに傳はれる帯なり。」

【奉公】とは、君國のために力をつくすこと。

後漢書の祭遵傳に「憂國奉公。」

古今著聞集卷十一に「ひたすら御とのゐして奉公を致しければ。」

【亡父數度の忠節】 保元・平治の亂に父清盛が幾度となく君國につくし奉つた忠節。

【忠節】は、忠義のみさを。君國につくす節義。

【御幸】 ゴカウ。中古以來、上皇・法皇・女院のいできしに申すことば。主上のみゆきを「行幸」と申し奉るに對する語。

古今著聞集卷三に「後鳥羽院……瀧口殿へ御幸なりて。」

【鬼界】 キカイ。鬼界が島。本卷、六「足摺」の條なる「鬼界が島」参照。

【高麗】 カウライ。コマ。こゝは單に朝鮮といふほどの意。高麗は昔朝鮮に起つた王朝。唐末新羅の衰運に乗じ、王建の建てたもの。王建は皇紀一五九五年新羅を滅し、群雄を平定して半島の主となり、開城に都した。後、遂に攻められてその朝貢國となり、金元の盛時亦これに臣事した。忠烈王に至り、元の世祖（忽必烈）に迫られて我が國に出兵した。爾來國勢が大いに衰へ、財政がみだれ、内には權臣の跋扈、外には倭寇の患があつて、二〇

五二年終に將軍李成桂にその國を奪はれて、滅亡した。三四四七五年。

【天竺】 テンチク。我が國及び支那で唱へられた印度の古稱。

印度の名はインドス河にもとづく。はじめアリヤン人が印度に入り、インドス河の流の盛んなのを見て、Sindhu（梵語で大水又は大海の義）と名づけたのが轉じて、地方名となつたもの。支那人は天竺・天豆・身毒・賢豆・信度・捐度・天豆などの文字を以てこれを寫した。

後漢書、西域に「天竺國、一名身毒、在二月氏東南數千里。」

竹取物語に「火鼠の袋……もて天竺にたまさかにもてわたりなば……」

【震旦】 シンタン。昔時支那の別稱。

大權菩薩經に「老子是迦葉菩薩、化遊震旦。」

榮華物語の本零の卷に「天竺・震旦の事も遙に隔りたれば知らず。」

【傳承】 デンシヨウ。つたへうけること。うけつたへるこ

と。

【靈寶】 レイハウ。靈妙な寶器。くすしきたから。三種の神器をさして申す。

【異國】 イコク。とづくに。外國。異邦。

李陵の答蘇武書に「遠托異國、昔人所悲。」

平家物語卷五、都遷の條に「異國の軍をしづめさせ給ひて。」

【頓首】 トンシュ。一 頭を垂れて地に至り、拜すること。二 書簡又は上書文等に用ひて敬語をあらはす語。こゝは二の意。

【名節】 一 人倫上守るべきみさを。二 名譽と節操。

魏の文帝の語に「乃祖以來、世著名節。」

【世盛】 ヨザカリ。時の勢を得て繁昌すること。極盛の時期。

平家物語卷一、禿童の條に「この禪門世盛の程は、いさゝかゆるかせに申す者なし。」

義經記卷一「牛若鞍馬入の條に「平家世盛にて候に。」

八 旅人芭蕉

1 解題



やうにある。

この「旅人芭蕉」の一書は、芭蕉の紀傳ではない。芭蕉の傳記として、これはと思ふものが一冊はあつて欲しいとは常に考へてゐるが、歴史的の知識に乏しく、又、考古的の穿鑿などに愛好を持つてゐない私には、その方面から、芭蕉を語る用意もなし、又その興味もない。芭蕉の一生の事蹟に就いて、私が知つてゐる事は、芭蕉を口にする程の人が誰も彼も知つ

り、各節にその内容に應じた小題を附したものである。

「旅人芭蕉」はその卷末に附せられた作者の後記によつて略その内容を窺ふことが出来る。即ち後記の一節に次の

てゐる事である。但し、芭蕉といふ人の心持、及び彼が創建した所の俳諧藝術の精神に就いては、私には私の直観もあり、又私としての解釋もある。芭蕉自身が「遂に無藝無能にしてこの一筋にたがはる」と言つた所にも、私は私らしい理解と同感とを有すると思つてゐる。これは書籍の上から考證的に研究し得たものではなくて、私が自分の貧しい體驗から近頃、漸くうなづき得たものである。私が芭蕉に就いて書き得る事は是より外に何もない、尤もそれでは、芭蕉その人を傳へるといふよりも、芭蕉を藉りて自分の心持を語るものになるかも知れぬが、それでもよいではないかと、私は思つてゐる。然し、この「旅人芭蕉」の一書は、全然、自分の自由なる構想になる創作即ち小説ではない。——この書は、創作としては、私の主観が稀薄である、史料に見えた所の事實に捉はれ過ぎてゐる。さりとて紀傳としては、私の主観が多く混り過ぎてゐる。どちらにもつかない。而して、このどちらにもつかぬ書き振りをしたといふ譯は、私の意圖が最初からそ

の何れにも存しなくて、全く他の所にあつたからである。――云々。

2 作者

荻原井泉水 ヲギハラ セイセンスキ。
名は藤吉。明治十七年六月、東京市芝區神明町に生れた。同四十二年、東京帝國大學文科言語學科を卒業し、後、大學院に入つて更に研究を續けた。現今俳句壇で最も新しい傾向の「層雲」一派を率ゐてゐる。
俳句に關する評論・研究等の著書が頗る多い。

3 編纂の用意

次の課で元祿・天明の俳句を讀むことになる。中心は芭蕉であつて、芭蕉を少しでもよく理解するといふことは、芭蕉の俳句を、又廣く俳句を少しでもよく理解する助となる。殊に芭蕉の常に口にする閑寂といふもの、芭蕉晩年の心境等は出来るだけ色々の方面から見えておくことが大切である。本課は甲子吟行を釋解した性質のものであるので、芭蕉といふ人を知るのに非常に役立つものである。その意味で、次課の前驅として有力な教材である。

4 要旨

晩年旅行を特に好んで閑寂を愛してゐた芭蕉の心境を、その紀行「甲子吟行」(野ざらし紀行)によつて敘したものである。解題の項に記してあるやうに、この文は純粹の紀傳でもなく、又純粹の小説でもない。紀傳と小説との間を行くものである。甲子吟行の文によつて、作者の想像を交へて敘したもので、或點からいへば甲子吟行の釋解(パラフレーズ)とも見ることが出来るし、又紀傳に據る創作といふことも出来る。かうした趣の創作は他の小説家によつて屢々用ひられる手法である。

又、作者自身が俳人であり、殊に芭蕉に傾倒してゐる人であるので、その俳句の解釋に於て、その俳人の心境の想像に於て、他の人の及ばぬすぐれた片鱗を見せてゐる。

5 概説

本課はこの巻で最も長い一篇であるが、作者自ら各節に小題を與へて文を運んでゐるので、それに従つて概説す

ると次のやうになる。

首途

貞享元年秋八月、弟子たちの厚情によつて再興した深川の芭蕉庵を立つて、故郷伊賀の方へ長途の旅行に出發した芭蕉が、弟子たちと別れを惜しみ、第二の故郷となつた江戸の地に愛着を感じ、道中の苦難に思ひをいためたその心情を描寫したものである。

神路山

東海道を経て伊勢路に向つた芭蕉は伊勢の大廟に參拜した。内宮では僧形のために賽することが出来ず、夜陰の頃外宮にのみ參拜することを得た。その闇に包まれた神苑の老樹の神祕な囁を聽いて心を澄ました。

西行庵

吉野の奥に分け入つて西行庵を訪ね、とく／＼の清水を見た。さうして西行の心境に大いに學ぶべきもののあることを今更のやうに感じて、その古跡に言ひ難い愛着を覺えた。

6

取扱上の注意

□この文を扱ふには、「甲子吟行」の原文を一通りでも眼にふれておく必要があらう。すると、作者がどのくらゐまで自己の作爲を施したかも呑みこめて、かた／＼興味深く讀まれるし、また、芭蕉の心持が直接に理解出来て、安らかな氣持で教授に當ることが出来る。

□「その時は三十歳に満たぬ云々」こゝでは、現在芭蕉の年齢が四十五歳であることを是非注意する必要がある。一體芭蕉といふ人は、その俳人としての心境がさう想はしめるのかどうか知らぬが、實際の年齢よりもずつと年取つた人のやうに當時も思はれてゐたやうであるし、今日も思ひこまれてゐるやうである。現にこの文なども、四十三歳やそこらの芭蕉を寫してゐるではないやうな氣もする。

□「假想でも句に仕立てて見ると、如何にも現實のやうに思はれる」とは、味はふべき言葉である。そこに藝術の獨立性とか、有機的な特性とかが語られてゐる。

□一體、この種の文は、生徒の朗讀で通しては却つてしんみりと來ないであらう。靜かに默讀させて味ははせるか、

或は朗讀によるならば、教授者の範讀によつて、作者の心持を十分に表して見せて、これを靜聽させるがよからうと思ふ。閑寂な境地などについての話に生徒の心を引きつけて行くには、どうしても教室の空氣からして靜かにして取りかゝらねばなるまい。

7 設問

- 1 この文章全體に流れてゐる氣分は、どういふ氣分であるか。
- 2 靜かな氣分、しんみりと落ちついた氣分、いはゆる浮世を遠ざけて、芭蕉のやうな心境に浸らうとする氣分と、この忙しい、多事な世の中に處して行かねばならぬわれ／＼の精神生活との關係は、どう考へたらばよいであらうか。
- 3 「自然の美しさに自我を没しきる」とは、平たく言ふと、どんなことであるか。それに似た經驗が各自の生活にもあるだらうか。
- 4 芭蕉は西行についてどう言ふ風に思つてゐたか。

8 語釋

【行脚】 アンギヤ。行脚を「アンギヤ」といふは宋音による。禪宗の語で、諸國を巡りあるく修行の僧をいふ。頭陀・抖擻・雲水などといふに同じ。



頭陀袋

【頭陀袋】 ヅダブクロ。頭陀（行脚）の僧が用具を入れて頸にかける袋をいふ。

【雲水】 ウンスキ。行雲流水の

行方定まらず動き流れる如く、所を定めず諸方を遍歴する僧をいふ。行脚・頭陀に同じ。

【痔疾】 チシツ。肛門の部が腫れ、又は痛み、或は化膿して、血・粘液等を出す病氣。痔瘻・穴痔・蓮痔・疣痔等の種類がある。

【颯爽】 サツサウ。勇壯にして快く感ずるさまにいふ語。杜甫の詩に「英姿颯爽來酣戰。」

【髑】 髑に同じ。音は「ガク」。はぐき。

【願】 オトガヒ。したあご。音は「イ」。

【神経質】 シンケイシツ。人間の氣質の一つ。神経が過敏であつたり、又は病的であつて、事物に感じ易い性質をいふ。詩人・作家・藝術家にはこの氣質に屬するものが多い。

【精根】 セイコン。根氣。元氣。精力。

姫山姥に「筋骨舒んで、精根も盡き果て候へば。」

【稟】 リン。壯烈なこと。威嚴の鋭いこと。きりりと引きしめること。

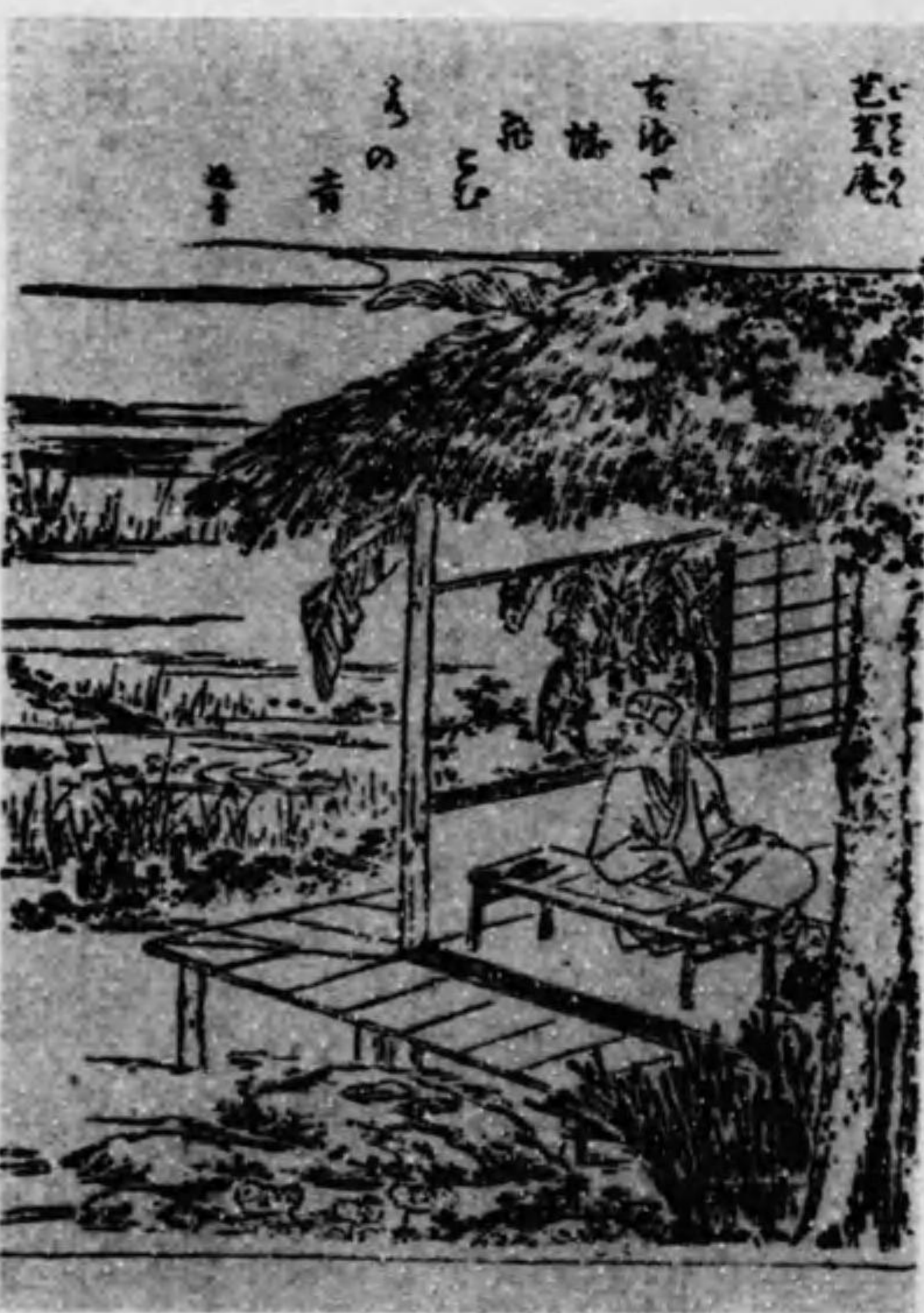
【故郷】 芭蕉の故郷、伊賀國（三重縣）上野をさす。

【歸省】 キセイ。家に歸つて親の起居をとぶらふ意。

朱慶錄の詩に「歸省及花時、行吟落第詩。」

【肉親】 ニクシン。肉縁の親族。血族。

【水邊の巢】 江戸深川の六間堀（小名木川と一つ目川とをつなぐ堀割）にのぞんだ六間堀といふ地にあつた芭蕉庵。芭蕉の俳弟杉風が、その別庵を芭蕉に提供したのも。天和元年九月にそれに移つた。芭蕉はその庭に芭蕉



芭蕉庵

を植ゑたりなどして喜んでゐたが、天和二年の大火に類焼してしまつた。その後芭蕉は旅に出て甲斐路を行脚し、天和三年に江戸に歸つた。住むべき家を持たない彼は、俳弟のところへ轉々寄寓してゐたが、門人たちの合力奉加によつて、同年深川の芭蕉庵が以前の通りに復活されて、芭蕉は再びこゝへ戻つた。

【さながら故郷を】 甲子吟行（一名野ざらし紀行、貞享元年の秋から翌年四月までの紀行）の開巻に、「千里に旅立ちて路糧をつゝまず、三更月下無何に入

るといひけん、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の聲そよりにさむげなり。

野さらしをこゝろに風のしむ身かな
秋十とせ却つて江戸をさす故郷

とある。これから故郷伊賀を指してゆくのであるが、十年も住みなれると、却つて江戸が故郷と思はれるとの意。

【海道】 カイダウ。東海道。

【送別・留別】 ソウベツ・リウベツ。後に残る人が、旅立つ人に別れを告げるのを送別といひ、旅立つ人が、後に留る人に別れを告げるのを留別といふ。

【野さらしを心に風のしむ身かな】 前項「さながら故郷を」の條に原文を引いておいた。貞享元年秋八月、深川の芭蕉庵を出て伊賀に旅立つ時の留別の句である。

【野さらし】は、しやれかうべ(鬻體)である。弱い體で長途の旅に出かけようとする時、ふとも心に掠めるやうに思ひ浮んだのは鬻體である。さうして冷氣立つた秋の風

が痛切に身に沁むを覺えるとの意で、秋酣の頃病弱にして長途の旅に上る不安と寂寞の心境が見える句である。

【讖】 シン。しるし。未來の吉凶禍福の前兆。

【蕭々】 セウ／＼。ものさびしい貌。特に風の物さびしく吹く聲、又は鳥のさびしく鳴く聲にいふ。
史記の刺客傳に「風蕭々兮易水寒。」

【幻想】 ゲンサウ。とりとめなき想像。妄想。空想。

【神路山】 カミヂヤマ。伊勢神宮の内宮の神苑を繞つて南方に延びてゐる丘陵。宇治橋の上から正面に見渡す鬱蒼たる森の山である。皇大神宮の御山の總稱で、時には神道山・神垣山・宇治山・大山又は天照山などと呼んだためにもある。幾千百年を重ねた老樹の色深く、然も山は高きに過ぎず、険しきにもあらず、神々しい感を與へる。

【霖雨】 リンウ。長く降り続く雨。ながあめ。

【驛傳】 エキデン。宿繼の乗馬。うまつぎ。

禮記の「土曰傳遽之臣。」の註に「驛傳車馬、所供急遽之令。土賤而給役使、故自稱如此。」

【飛脚】 ヒキヤク。急用の事件を遠隔の地に通ずる人夫。

特に信書又は金銀・貨物等の送達を業としたものをもいふ。

【金谷】 カナヤ。今の静岡縣遠江國榛原郡金谷町。昔の東海道五十三次の宿驛で、島田と日坂との間に位してゐる。



【小夜の中山】 サヤのナカヤマ。遠江國小笠郡日坂の東なる坂嶺で、これを下れば金谷の菊川である。もとは佐野とも、佐益ともかいた。サヨとよむは後世の訛である。

【推敲】 スピカウ。詩文の字句を鍊ること唐の賈島の故事に基く。

書言故事に「賈島於三京師一騎一驢得句。鳥宿池邊樹、僧敲月下門。始欲著三推字、又欲下敲字、鍊未定。引手作三敲推勢。」

時韓愈權京尹。島不覺衝至第三節、左右擁至尹前、島具道所得。愈曰、敲字佳。與並轉歸、爲布衣交。」

【大井川を越えて云々】 これにあたる所を、甲子吟行(野さらし紀行)について見ると、
「大井川をこえつる日は、終日雨ふりければ、
秋の日の雨江戸にゆび折らん大井川
道の邊の木槿は馬に喰はれけり
廿日あまりの月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭を垂れて數里、いまだ雞鳴ならず、杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りて忽驚く。
馬に寝て殘夢月遠し茶の煙。」

【訛り言葉】 ナマリコトバ。發音の正しくない言葉をいふ。

【追分】 オヒワケ。街道の左右に分れる岐路をいふ。

【宇治橋】 ウヂバシ。伊勢神宮内宮の神域を流れる五十鈴川(御裳瀧川・宇治川)に架した橋。現在のものは長さ五十一間、廣さ四間、欄干に擬寶珠を付してある。

【五十鈴川】 イスマガハ。この川の水源は二つある。一つ

は伊勢と志摩との境なる逢坂山より發し、一つは神路山より出で、宮域の中段に於て合し、宇治橋の遙かの下に於て朝熊川を容れ、又二つに分れて、一つは二見浦に注ぎ、一つは外宮の豊川を併せ、勢田川と一緒にたつて海に入る。

【神佛一如】 シンブツイチニ。神と佛とはその本體に於ては同一であつて、決して二つの異なるものでないとの意。

【和光同塵】 ワククウドウチン。佛・菩薩などが威徳の光を和らげて塵界に混じ、又はその本地を隠して種々の身を示現すること。

老子に「和其光、同其塵。」
寶王論に「但和光同塵、保雌守靜、既慈且儉。」

神佛一如、和光同塵の説は夙に我が國でも行はれた。所謂本地垂迹説・神佛混淆説と呼ばれるものである。即ち菩薩及び佛陀には、多くの應化身を變作して衆生を化益すべき徳用を具してゐる。よつてその實身を本地といひ、分身を垂迹といふ。法華經普門品の觀音の三十三身の如

き、又同經壽量品の久遠の佛陀が八相成道の釋尊を化現する如きは、本地垂迹の好例である。佛・菩薩は本地と垂迹との兩體用があつてはじめてその徳を全うするといふことが出来る。以上の根據に基いて、我が國の神祇なるものは、本地たる佛菩薩が衆生化度のためにこの應化身を取り、いかなる縁にかよつて遂にこれを佛果菩提に引入しようとするものであるから、多くの神祇があつても歸するところは佛菩薩であるといふのが本地垂迹説である。而して和光同塵はその結縁の初、八相成道は利物の終といふのはその意味である。この説は奈良朝より平安朝の間に盛に流布して、兩部神道を生じ、以て民俗の信仰を維持したが、維新の際、神佛分離するに至つて全く衰へた。

【内宮】 ナイクウ。伊勢の皇大神宮。伊勢の神宮とは、皇祖天照大御神を奉祀した皇大神宮と豐受大神宮とを併せて申す稱呼。而して豐受大神宮を外宮といひ、皇大神宮を内宮といふ。

【宮の背後にある峯】 高倉山といふ。

【蟲々】 チクチク。高く聳える貌。

司馬相如の上林賦に「崇山蟲々、崑崙崔嵬。」

【三十日月なし千歳の杉を抱く嵐】

晦日であるから、月はなく、天地は眞暗である。をりから千歳を経た老杉の鬱々たるを包んで、嵐が幽韻をひびかせてゐるとの意。

【甲子吟行の原文】

甲子吟行（野ざらし紀行）の中からこゝにあたるところを抜いて見る。

松葉屋風瀑が伊勢にありけるを尋ねおとづれて、十日ばかり足をとどむ。腰間に寸鐵を帯びず、襟に一囊をかけて、手に十八の珠をたづさふ。僧に似て塵あり、俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、髪なきものは浮屠の屬にたぐへて、神前に入ることをゆるさず。暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の華表のかけほのぐらく、御燈處々に見えて、また上もなき峯の松風身にしむばかり、深き心を起して、

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐。

【勝手の社】 カツテのヤシロ。吉野山八神の一で、古くからその名が世に知られてゐる。吉野町にある。神社啓蒙には

「勝手神、靈受命、天孫降臨之後、爲後見降焉。」とある。

【子守の社】 コモリのヤシロ。吉野山

八神の一。水分神

社ともいひ、又籠

の宮ともいふ。

【西行】 サイギウ

ウ。鎌倉時代初期

の歌人。俗名は佐

藤義清。鳥羽上皇

に仕へて北面の武

士となり、武技に

長じ、併せて和歌に巧であつたから、特に上皇の信任を

得た。年二十三の時、妻子官祿を棄てて出家し、初め圓

位と稱し、後西行と改めた。生涯一所に定住せず、行雲



流水に身を委して、山水を賞し、歌を詠じた。その足跡は殆ど六十餘州に遍く及んだ。建久元年（一八五〇）京師で入寂した。年七十三。家集の「山家集」隨筆の「撰集抄」は共に有名である。

【山賤】 ヤマガツ。木樵・柚人など、山家に住む身分の卑しい人をいふ。

【湮滅】 インメツ。うせほろびること。

【默契】 モクケイ。無言の中に相互の意志の一致すること。暗黙のうちに意思の合致すること。

名賢集に「坐看^{オカガ}吳越^{ウエツ}兩山^{リウサン}秀^{シウ}、默契^{モクケイ}義文^{ギブツ}千古^{コクコ}心。」

【妻と幼い童とを残して】 西行は年二十三歳にして出家した。その時彼には若い妻と四歳になる女の子があつたが、これを都に残し、ひそかに嵯峨にのがれて出家し、次いで吉野へ入つたのである。

【三昧】 サンマイ。正定・正受・平等などと意譯する。心思を一事に集注して他念のないこと。思想を靜めて散亂せしめぬこと。

【吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つら

む】新古今和歌集卷十七雜歌の部に、題知らずとして出てゐる西行法師の歌。「やがて」はそのまゝ。

一首の意は、この吉野山へ入つて来て、そのまゝこゝに留まり修行して、故郷の方へは出まいと自分は決心してゐるのであるが、花が散つたならば山を出て歸つて來るだらうと、定めし故郷の人は待つてゐるであらう。

再び出まいとの堅い道心の裡に、なほ忘れ得ずして故郷の人を慕ふ情、詩人西行・人間西行の眞面目の窺はれるものがある。

【陶醉】 タウスキ。陶然として醉ふ意。

【ねがはくは花の下にて春死なむその如月の望月の頃】 山家集及び續古今集に見えてゐる。歌の意は明瞭である。

【涅槃】 ネハン。梵語の Nirvana の音譯。滅度・寂滅または圓寂等と譯す。生死の因果を離れ、諸煩惱を滅すること。圓滿・寂滅の境に入ること。

【淺しともよしや又くむ人もあらじ我にことたる山の井の水】 「よしや」は「善し」と「縦し」との兩義を通はしてある。

一首の意は、「この山の井は淺くとも差支ない。自分の外にはよもや汲む人もあるまい。自分だけにならこれだけの水で十分であるから。」

【とく／＼と落つる岩間の苔清水汲みほすほどもなき住居かな】 「とくとくと」は水の滴り落ちる様をあらはした副詞。

一首の意は、「とく／＼と滴り落ちてたまつてゐる僅かばかりの苔清水をさへも汲みほしてしまはない程の極めて簡素な自分の生活であるはい。」

【露とく／＼こゝろみに浮世すゝがばや】 甲子吟行（野ざらし紀行）に見えてゐる。

一首の意は、「西行が浮世を忘れた生活を送つたこの庵の近くのとくとくの清水に、試みに今自分も浮世の事を雪ぎ洗うて忘れてみたいものぢや。」

【甲子吟行の原文】 こゝの一節を原文について見ると次のやうにある。

「西上人の草の庵の跡は、おくの院より右のかた二町ばかりわけ入るほど、柴人のかよふ道のみわづかにあ

りて、さかしき谷を隔てたる、いとたふとし。かのとく／＼の清水はむかしにかはらずと見えて、今もとくとくと雫落ちける
露とく／＼こゝろみに浮世すゝがばや

9 挿圖の説明

芭蕉 西島百歳筆

蝶夢が天明三年の芭蕉忌に、杉風・蚊足筆と共に三幅揃へて、近江の義仲寺へ寄進した伊賀の菰門西島百歳の筆である。おそらく貞享元年の甲子吟行に伊賀へ歸省した時の似顔繪であるだらう。

野ざらし紀行

天明の俳人與謝蕪村が、野ざらし紀行の原文によつてものした文人畫である。畫讀の位置にあるのは、紀行の原文を蕪村の書寫したもの。

宇治橋

宇治橋から内宮の神苑を望んだ景。

西行庵

吉野山の奥の千本にある西行庵。寫眞による。

10 参 考

俳諧史上に於ける芭蕉——蕉風

檀林の俳諧の後を承けて起つたのが芭蕉である。彼は松永貞徳・北村季吟等の俳句を學んだ。しかしそれらの句は雅ではあるが、深切でない。生命に觸れてゐない。又西山宗因の檀林風をも學んだ。芭蕉の初期の作、及びその散文には所謂俳味なるものがあらはれてゐる。

しかしそれは芭蕉の狙つた所ではない。彼は一層深刻に、嚴肅に、生命の根元に掘下げて行かうとした。彼は永遠な生命、普遍の生命、しかも外面に種々相を具へ、内面に永久普遍の生命を貯へるところのものを欲した。彼はその生命を自然の内に見出すことが出来た。彼は自然の囁に耳をかたむけ、造化の秘を發くことによつて、そこに永久普遍の價值と生命とを見出すことが出来た。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

如何にも閑寂の趣を具へてゐる。かく芭蕉は閑靜を狙つた。天下は酒々として檀林に走せ參じ、滑稽洒脱をこれ生命としてゐる時に凡そ色彩の變つたものであつた。閑寂とは芭蕉の見た自然の姿である。永久普遍の絕對價值は、この閑靜な自然の姿に

あると考へたのである。

芭蕉は江戸で佛頂和尚について參禪した。この事は確かに彼の心境を拓いたに相違ないが、單にそれのみでなく、彼は夙に俗世間以外に人生の眞趣を味はふべき別天地のあることを悟つた。

早く主君に別れて、世を味氣なく觀じ、一度國を去つて、流浪すること數年、江戸で杉山杉風の情によつて、漸く安住の地家を得ると、忽に火災に罹るなどの不運の生活が、彼が悟りを得た重大な原因であらう。加ふるに西行の高節を偲び、杜子美の風骨を味はふ事が深かつたので、かたゞ靜寂な新趣味を發見したのであらう。閑寂とは、人間の問題を離れた、單に靜かな自然現象を見るときのみであらうか。否、閑寂の相を自然の姿に見出すといふことは、即ち人間の求めてゐるものを閑寂な自然に於て見出すといふことである。自然に見出される閑寂は自分のものであり、自分の閑寂の中に移入するのである。

自然現象を見てゐるといふことは主觀と客觀との對立であるが、やがて主客一致融和の境地に、この閑寂の相が見出されるのである。それは自然そのものでなく、絕對のものである。

又閑寂といふことは、靜か、眠りといふやうなものであらうか、否、表に靜寂の相を裝ひ、裏に永久普遍の生命力を藏してゐることである。實例についていへば

古池や蛙飛びこむ水の音

この句には「飛びこむ」といふ動作があるではないか。閑寂といふことは靜止を意味すると限らない。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

これにも「かけめぐる」といふ動作がある。しかもその表面には「古池」や「枯野」などの靜かなものがあるのである。

芭蕉には所謂十哲をはじめとして多くの弟子があつたが、芭蕉の歿後は各、その好む所に従つて説をたて、ために蕉門の俳諧は次第に衰運に向つた。

九 青 葉

1 解 題

芭蕉以後一茶に至る間に出た多くの俳人中、特に優秀な數家を
選び、兩三句づつを採つた。多くは人口に膾炙した秀句をあげ
たが、中學生にとつて難解と思はれるものは、その人の代表的
作品ではあつても省くことにした。随つて、こゝにあげたもの
が必ずしもその作家の第一の名句であるとはいへない。

2 作 者

便宜上、釋義の欄に於て、句の解釋の間に作者の小傳をかゝげる
ことにした。

3 編纂上の用意

前課及び次課と相聯關してこゝに俳諧に關する一斑の理
解を得しめようとするものである。即ち前課に於ては、
甲子吟行の現代人的解釋によつて、俳人芭蕉の心境を辿
り、本課に於ては、芭蕉によつて高き文學的地位を賦與

せられるに至つた俳句の解釋鑑賞の態度をこしらへ、次
課に於ては、俳諧紀行文によつて、俳家の文に特有の文
調・語格・文趣・語法等の一斑を知らしめようとするも
のである。

4 要 旨

芭蕉によつて新生面を開拓せられ、その後我が國文學と
して最も廣く民衆の愛好に投じ、獨得の歴史と傳統とを
有するに至つた俳諧文學のうち、特にいはゆる俳句につ
いて、その讀解力及び趣味を養ひ、その價值を考へし
め、兼ねて各作者の略傳、作風の大體等を知らしめるに
ある。一句の形式に關しては、「や」「かな」その他修辭
上の切字といふこと、及び特別の語法を教へ、内容上か
らは、主として配合・聯想による妙味といふものについ
て感悟するところあらしめたい。

5 取扱上の注意

俳句に限らず、趣味といふものは、元來理窟で説き聽か
せてもなか／＼及ばないものであるが、しかし、その吟
じ出される事情といふもの、即ちその時と、その場處と、
その時處に即した作者の心境とを明らかにし、一方では、
俳諧・俳句の傳統的趣味といふものを理會せしめれば、
大抵のところまでは面白味を感得せしめることが出来る
と思ふ。つまり、一面には俳諧趣味の特色といふものを
一般的に納得せしめ、他面には、その季題についての傳
統的趣味と、その季題によつて吟ぜられたその句の事情
とを明らかにするといふことが、解釋上の定則である。

固より一つの句は獨創的の趣味を有し、それ／＼異なつ
た妙味があるのであるが、なほ同じ題の他の句即ち類
句を多く讀み行くうちには、その間に共通する趣味を發
見すると同時に、その句の獨得の妙味をも發見し得るも
のである。故に或俳句の趣味がわからないといふ場合に
は、同題の類句を成るべく多く讀むがよい。

本課に擧げた句の解釋鑑賞に當つても、生徒に教材とし

て過重な負擔をさせてはならないが、或句については類
句を示してその理會を助けるやうにすべきである。「釋
義」の部に時に一二の類句をも掲げたのは、その用意か
らである。

6 設問

- 1 本課の句中、實況が目に見えて来るやうに思はれる句をあげよ。(印象のあさやかな句はどれとどれか)
- 2 各自の經驗してゐることを最もよく吟じ出してくれたと感ずる句はどれか。
- 3 「旅に病みて夢は枯野をかけめぐる」この句から芭蕉の如何なる氣持が受取られるか。又、この句について聯想せしめられる芭蕉の句は如何(前課「野さらし」の句の復習)
- 4 「人心いくたび河豚を洗ひけん」この句のどこを面白と思ふか。又、河豚についての諺を知つてゐるか。
- 5 「黄菊白菊その外の名はななくもがな」この句が現してゐる一般俳人の趣味は如何。

7 釋義

【ほろ／＼と】 季は春、山吹の句。芳野紀行に、「西河(大和吉野郡)と題してこの句を記し、更に「蜻蛉が瀧、布留の瀧は、布留の宮より二十五丁山のおくなり。」とつけてゐる。

句意は明らかである。瀧の落込む谷川の邊に山吹が咲き亂れてゐる、輕格と轟き落ちる瀧のしぶきに、その谷風にほろ／＼と山吹の花びらが零れるといふのである。「ほろほろ」と擬態語を使ったところがいい。瀧の音が輕格とあたりに響く中に、山吹の花が音もなくほろ／＼と散つてゐる清涼な趣である。「散るか」のかは感動詞で、文法的役目は「かな」とおなじである。この句ではこれが切字となつてゐる。之を「散るや」「散るよ」「散りぬ」「散れり」などとしても、字數に關係なく、形の上からは句にならぬことはないが、句の趣には相違の生じて來ることには留意させたい。「散りぬ」「散れり」では拍子ぬけがして來る。「散るや」「散るよ」では平板になる。

山吹は薔薇科に屬する四五尺の灌木。三四月の頃黄色の

花を開く。一重と八重との二種がある。野生するのは一重の方で、その青綠色の莖に黄花をつけた姿は如何にもやさしいものである。

【五月雨を】 奥の細道に「最上川はみちのくより出で、山形を水上とす。ごてんはやぶきなどいふおそろしき難所あり。板敷山の北を流れて、果は酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稻つみたるをや稻舟といふならし。白絲の瀧は青葉の隙々に落ちて、仙人掌岸に臨みて立つ。水みなぎりて舟あやふし。」とあつて、次にこの句を載せてゐる。但しこの句は、この記事の前に「最上川のらんと、大石田といふ所に日和を待つて」同好の士と連句を催したことが見えてゐるが、その際の連句の卷頭に出てゐるから、舟に乗つてからの句ではなくて、まだ大河が漲り流れて舟も出せなかつた頃の壯觀を吟じたものであらう。

句意は、平生さへも急流であるこの最上川が、山野に連日降り続く五月の水を集めて、水嵩のまさつたため、一層ものすごく、はやり立つて流れてゐるといふので、河

流洳々の勢の眼に上る、實に壯大雄渾な句である。

【菊の香や】 泊船集に「重陽、奈良に一宿」として見えてゐる。芭蕉五十一歳の時の作である

子規の俳諧大要に「この句に於て菊と佛とは場所の關係なし。必ずしも佛の前に菊を供へたるにもあらず。必ずしも佛堂の傍に菊の咲けるにもあらず。強ひて場所の關係をいはば、菊も古佛も共に奈良にあるまでの事なり。作者の奈良に遊びし時、恰も菊の咲く頃なりしなるべく、随つてこの句を以て奈良をあらはしたるなるべし」と雖も、菊花と古佛との取合はせは、共にさびつくしたる處少しも動かぬやうに見ゆ。この作者の活眼といふべし。」とある。

同時に吟じた句に

菊の香や奈良は幾代の男ぶり

といふのがある。又類句には、

菊の香や庭に切れたる沓の底

菊の香や花屋が灯むせぶ程

菊の香や一つ葉をかく手先にも

芭 蕉

太 祇

太 祇

【旅に病みて】 季は冬。題は枯野。枯尾花集・泊船集などに出てゐる。

芭蕉の辭世の句として名高い。花屋日記には「丈草・去來を召し、昨夜目のあはざるまゝ、ふと案じ入りて、吞舟に書かせたり、おのゝ詠じたまへ。」と前書してこの句が記されてある。

元祿七年七月、芭蕉は伊賀の上野に遊び、越えて九月、支考・惟然等と奈良に行き、更にその月の廿九日に大阪の園女の家に至つて歡待を受けたが、その時に食した葷の中毒で激しい下痢を病むやうになつたのである。それから十月五日に、南久太郎町の花屋仁左衛門の裏座敷に病牀を移した。この句を門人等に示したのはその八日の事で、逝去したのはそれから四日目の十二日である。臨終になつて、弟子が辭世を望んだところ、自分のこれまでの句は皆辭世のつもりで吟じてゐる、今更辭世といふべき句はないが、強ひていふなら、といふ旨を述べて、この句を擧げたさうである。

「旅に病みて」といつた意は、以上の事情で明瞭である。

「夢は枯野をかけめぐる」芭蕉の俳的生涯は、旅の生涯であつたともいひ得る。今、死期に近づいた病床の閑に、枯野を辿りゆく自分の姿を夢みるといふのも極めて自然なことである。「枯野を」と吟じたところに閑寂の氣が漂ひ、「かけめぐる」といつたところに悽愴の氣が讀者を襲ひ來るやうに感ずる。

芥川龍之介氏は、その創作、芭蕉の臨終を題材とした「枯野抄」の一節に左のやうに描いてゐる。

芭蕉はさつき、痰喘にかすれた聲で、覺束ない遺言をした後は、半ば眼を見開いたまゝ、昏睡の状態にはいつたらしい。うす瘰癧のある額は顫骨ばかり露に瘦せ細つて、皺に囲まれた唇にも、とうに血の氣はなくなつてしまつた。殊に傷ましいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向ふにある、際限ない寒空でも望むやうに、徒に遠い所を見やつてゐる。「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」——ことによると、この時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辭世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のやうに漂つてでもゐたのかも知れない。

【芭蕉】 については、一切を前二課に譲る。

【青麥や】 季は春、題は雲雀。鬼貫句選に收められてある。

「青麥や」は、一本には「草麥や」とあるが、事實は何れでも同じである。黄色に穂の實つた麥に對して、まだ晚春の青々としてゐる麥畑を言つたもので、「麥青し」「青麥」といふ題にしても吟ずる。が、こゝでは雲雀の句である。「青麥や」の第一句で、茫々と青い麥畑が展開してゐるさまが眼に浮ぶ。雲雀はよくその麥畑の畔などに巢を作るものである。そして長閑な春の日をピーチク、ピーチクと囀りながら、肉眼で見えぬほど高く空に揚つて行く。すでに揚つたのは、またさがつて來る。この句では、「……あがる、あれさがる」といつたのがおもしろいのである。「揚雲雀」「落雲雀」などともいふが、こゝでは、それを一度に詠んでしまつたのである。

【春の水】 鬼貫句選の中にある句。

平野の中にある小高い丘の上から、立ちかへつた春の日に見はるかして得た句である。「水ぬるむ」といふのが俳句の季題になり、又「春風春水一時來」といふ詩句が人口に膾炙してゐるやうに、氷のとけ、雪の消えて温んだ川や池の水はなつかしいものである。丘の上から見渡す

と、早くも淡い霞のかゝつた廣い野面には、池や、まがりうねつた流水があつて、その春の水がところ／＼に暖かみを思はせて光つてゐるのである。さうした景色を句にしたのがこれで、廣々とした平野、光つて見える春の水、そこら一面を包む淡霞といふ風に、いづれも和やかな春の風物ばかりで出来た一幅の畫圖に對する感がある。

春の水背戸に田作らんとぞ思ふ
行く舟に岸根をうつや春の水

蕉 村
太 祇

【行水の】 鬼貫句選にある句。

行水（ギヤウズキ）は、湯を盥などに入れて身體を浴し淨めること。句の意味は極めて明瞭で、夏の夕方、庭先で行水を使つてゐると、盥の周圍を取りまいて、様々の蟲が鳴いてゐる。さて湯浴がすんで、その行水の水をどこに捨つべきか、まはりの一面に蟲が鳴いてゐるので、捨てどころがないといふのである。

【鬼貫】 氏は上島、攝州伊丹の人。家は造酒を業として富み榮えてゐたが、俳諧を事として産を治めず、數年にして蕩盡し、果ては大和郡山侯の賤卒となつた。後、難波

に出て、按摩を業として自給するに至つた。俳諧は西山宗因の弟松井宗且を師とした。宗且が聞きたいはゆる伊丹風は、實に鬼貫の爲に聞えたのである。「鬼貫句選」の序に曰く、

鬼貫、一名佛兄、姓は平泉、假名は與三兵衛、津の國伊丹の人。その先はみちのくなる和泉三郎忠衛より出でたり。表して椀花翁といひ、又囉々哩、あるは大居士・馬樂などと稱せり。中頃洛の堀川に寓し、後は浪花に住す。壯年の頃、大和の郡山本多侯に仕へられしかど、久しからず母の病めるに逢ひて職を辭し、歸去來を吟ず。七十三年、髪おろして法諱を即翁と號す。元文三年戊午秋葉月二日、鳥の内うなぎ谷わたりの家に病歿す。

と、又、佐藤紅綠氏の「俳句小史」に、

芭蕉を知るものは鬼貫を知らなければならぬ。蓋し伊丹の鬼貫は伊賀の芭蕉と相並んで俳壇を賑はした人である。音に賑はしたのみならず、俳句をして美文學に入る事を得しめた功は芭蕉と共に千載不磨といはなければならぬ。芭蕉が奮發して以て自ら蹶起したのは、鬼貫の俳諧に接して大いに感ずる所があつた爲とすれば、鬼貫たるものは、決して輕々に附すべからざる人物である。

又、芭蕉と鬼貫との俳風を比較して、

芭蕉は閑寂なる方面に進み、鬼貫は老蒼なる方面に進む。彼は

蒼々として來り、是は飄然として來り、彼は穩健なる體を持し、是は磊落なる體をなし、彼は雅致に富み、是は奇響に富み、彼は沈み、是は浮かれ、彼は能く泣き是は善く笑ひ、彼は眞面目に、是は愚弄的に、しかも兩者の幽玄なる所は一味である云々。

【目に青葉】 「曠野」の中にある句。題は「鎌倉一見の頃」とある。曠野には初句を目には青葉としてある。世俗には本課の通り「目に青葉」で流布してゐる。

新緑五月の頃の屬目屬耳のものうち最も印象的なものをあげてその清新爽涼の季節の情趣を詠み出でたもの。感性の鋭敏と象徴の豊麗とに偉大な手腕を見せてゐる作といはねばならぬ。

【西瓜ひとり】 俳諧古選の中にある句。

野分の風のはげしく吹き過ぎて行つた翌朝、野の千草も、畠に残る黍も唐黍も茄子も皆吹き折られ、吹き倒されて、蕭條荒涼たる有様に變つてしまつた。それらのもの間にあつて、西瓜畑には、もう西瓜の葉は枯れてゐるが、取り残りの西瓜は半枯れた蔓をひいて點々として轉つてゐる。その西瓜だけは、流石の野分も吹きいため

ることが出来ないもので、こゝのみは、いつもと同じ有様で、野分を知らぬ形である。

野分「ノワキ」は、野分の風の略。秋の候に吹く強い風。この風の吹いた後は、野の草は人が分けて行つたかと思はれる程に倒れ伏すので、この名がある。

【素堂】 本氏名は山口信章、今日庵、又は葛飾隱士とも號した。甲斐の人。江戸に出て北村季吟を師として俳諧を學び、終に一派をなすに至つて。世に葛飾風といふのはこれである。芭蕉とは特に親交があつた。俳句小史に「素堂・其角・嵐雪・杉風、この四人は創業の四傑ともいふべき人である。芭蕉がこの四人を左右前後に侍せしめ、萬斛の懷抱を持って花々しく陣頭に出でたその得意は察するに餘りある」とある。以て素堂の俳諧史上に於ける位置を知ることが出来る。今「素堂鬼貫全集」がある。

【夕だちや】 俳諧古選の中にある句。

俄雨が沛然として襲ひ來つた。家々では急いで戸を閉めて、横なぐりに降りこむ雨を避けた。川に出てゐた家鴨も俄雨の襲來に慌てて家へ引きかへしたが、もう時は既

に遅く、鳥舎のある土間の入口の戸は閉めきられてゐる。それで不器用な足どりで、があく／＼鳴きながらその家のまはりをまはつてゐるといふので、驟雨沛然たる中に、のろのろと不恰好に歩く家鴨を配して、俄雨氣分がよく出てゐる句である。

夕立や數の子供の捨育て

可 幸

夕立や戸さしに戻る草の庵

太 祇

夕立に傘借る家のま一町

團 水

夕立や草葉をつかむむら雀

蕪 村

【投げられて】 季は秋、題は相撲。

今の國技館の相撲には春場所・夏場所などいふことがあり、一般に行はれる素人相撲にも季といふものは定められないが、昔は秋のものとして吟じたのである。辻相撲は辻で行ふからいつたもの。こゝは素人相撲で、投げられた坊主といふのは大方飛入りであらう。初めは坊主とは氣づかれないやうに、頭巾でも冠つたまゝ取組んだものであらう。それが一度投げられると、冠りものも側へ飛んで、「やあ坊主であつた」といふをかしい感じを観客

に與へたのである。

立 吟

投げられて禮して這入る角力かな
この坊主は禮して這入つたかどうか、とにかく観衆は一度にとつと笑つたことであらう。

著るものの失せてわめくや辻相撲

太 祇

「坊さん、頭巾はあつたかね」といひたい。

勝ちにげの旅人怪しや辻相撲

太 祇

かういふ得意の旅人もある。

これらは其角の句と直接關係があるわけではないが、相撲の句として生徒に紹介してよからう。

【其角】 寶井氏（榎本は母方の姓である）江州堅田の人。



初め名を順哲といひ、父の醫業を繼いだ。佐々木文山を師として書を能くした。後米南宮を慕つて一機軸を出し、自ら寶音齋と號した。

又十七歳から芭蕉の門に入り、遂に十哲の首と仰がれる

に至つた。性奔放飄逸、常に酒を好んで、生業を事としなかつた。江戸に出て、服部嵐雪・小川破笠と同居し、三人一被を共にして居ること數年、名聲が大いに揚つた。後、茅場町に移り、「梅が香や隣は萩生惣右衛門」の句を賦して物徂徠を誹つたことがある。赤穂の義士大高源吾を俳友として親しんだ。寶永五年（二三六七）二月二十九日歿、年五十六。その一門を江戸座といふ。巴人・淡々・湖十等はその門下として知られてゐる。著すところ、元々集・俳諧文庫・其角文庫・其角十七條等がある。

【秋風や】 「曠野」に出てゐる句。「秋風」の一語が季と題とを示してゐる。

「白木の弓」シラキのユミ。弓は梓・檀・楓・樺などの木を中にして、その兩側に竹を添へ、籐を巻いて作り、その上を赤・黒などの漆で塗るのを常とする。塗らないのは「白木の弓」といつて、的弓、即ち的を射るに用ひる。そして、それには白弦を張るのを法とする。その弓弦の張りの最も善い時は秋である。（最も悪い時は五月雨の頃で

ある）さて、作者去來は、もと飛鳥井家に仕へて武藝の心得のある者であつた。まづこれだけの事實を了解せしめてこの句を吟誦せしめるがよい。昨日今日、秋風が颯々と立つて來た。去來の心には、白木の弓に弦を張つて的に向はうといふ氣が抑へられなくなつたのである。かうして生れたのがこの句である。その緊張した調子には、恰も秋空に高く鳴りひびく白弦のやうな雄々しいところがあり、爽かな韻があつて、その稜烈の趣はまことに人の骨に應へるやうである。「秋風」と「白木の弓」との微妙な調和は、味はふべくして説くべからざるものがある。

【うごくとも】 曠野に出てゐる句。季は仲春。

春の長い日も段々傾いてきた。向ふの廣い田圃は、麥畑か、それとも菜畑か。その畑の中で土を耕してゐる男が見える。はるかかあなたに居るので、殆ど動くとも思はれない、じつとしてゐるやうな小さな姿である。

鳥打ちや田鶴啼き渡るほとりまで

一 茶

鳥打や我が家も見えて暮れかゝる

蕪 村

【去來】 向井氏。肥前國の人。師なる兄に伴なはれて京都に出で、武を以て飛鳥井家に仕へ、洛東に住した。後、隱栖を嵯峨の小倉山の麓に營み、その成るに及んで、菊亭内大臣から「落柿舎」の三字を賜はつた。蕉門十哲の一人として名高い。寛永元年（二三六四）九月十日歿した。年五十四。（二三一一—二三六四）

その死を悼みて、許六が作つた誄に曰く、
（上略）若かりし時より都に居す。弓矢を捨てて十五年と



落柿舎
吟じたるは十五年
先のこと。合はせ
て三十年來大隱士
柿……何の頃よりか
先師蕉翁に見え
て、風雅の名に高
ぶり、京師にかま

へて諸子の頭に座す。……すべて一代の秀逸は、一兩句持てる人さへ稀なるべし。
このをのこは既に數句に及べり。……義仲寺の葬にも肩

衣に鋤鍬を携ふ。死後の城を堅く守り、諸生をなづけ、初心を扶く……今年二月丈草卒す。秋このをのこ去りて、手もぎ足もぎの思ひをさせて、人の腸を断ちけるぞや……
（下略）。と。

各務支考に「落柿舎先生の挽歌」がある。

【ぬれ縁や】 續猿蓑に出てゐる句。

春のまだ浅い頃、明日の七草にと、雪消の畑から摘んで来た薺が、策からはみ出して濡縁にこぼれてゐる。それにはまだ畑の黒土がついたまゝである。

長い冬ごもりの生活から解放されて、新年を祝ふにつけて見た青い葉の色、それにまじつて新しい黒い土の色と香、初春のよろこびがそれらのものから強く傳はつて来るのである。

「ぬれ縁」は、雨戸の敷居の外に作つた縁側。雨に濡れるにまかせてあるから、ぬれ縁といふ。

「薺」（ナツナ）は十字花科の草。下部の葉は羽狀に分裂し、上部の葉は缺刻或は鋸齒を有する。春季白色の花を

開く。實は扁平三角形である。葉は食用に供せられる。春の七草の一。ぺん／＼ぐさ、しやみせんぐさ、かにとりぐさ、などともいふ。

この句の薺は、正月七日の七草粥に炊くための薺である。

降るとても薺つむ日にあすはなし 九 可

七草の總代として薺かな 瓢 水

一と年に一度摘まるゝ薺かな 芭 蕉

などとよまれてゐるのは、皆正月の七草の薺である。

よく見れば薺花咲く垣根かな 芭 蕉

の句は有名である。

「土ながら」は「土と共に」「土のついたまゝで」の意。

【黄菊白菊】 「玄峯集」に「百花を揃へけるに」と題して出てゐる句。

「その外の菊」と言はずに「その外の名」と言つたのが、先づ人を感じしめる。そして實際、赤白黄紫と様々の菊の中にも、やはり菊の清容にふさはしいのは白と黄とである事は、萬人の齊しく感じてゐるところである。嵐雪はかういふ一般向のする考へ方の人であつたのである。

【嵐雪】 ランセツ。 服部氏。幼名は久米之助といつた。

江戸の湯島生れ。一時新庄・井上の兩家に仕へ、又稻葉

家に抱へられたが、後には専ら俳諧を事とした。

はじめ芭蕉に随つた頃は、嵐亭治助と稱した。

「桃青門弟獨吟二十歌仙」

中に始めてその名が見え

てゐる。其角と並んで蕉門の桃櫻と稱せられ、その名が高かつた。寶永四年（二三六七）十月十三日歿。年五十四。

彼の句風はおとなしく尋常で、一面平弱單調の譏は免れないが、幾度讀んでも飽きないといふ味を持つてゐる。

句集には「玄峯集」後に「嵐雪句集」、文集には「續其袋」がある。



【時鳥】 「續猿蓑」にある句。

時鳥が鋭い一聲を残して、湖上を飛び去つた。湖水はいさゝか濁つて、青々とした色がやゝ黄色く見える。時鳥がないたから、湖水が濁つたといふのでなく、「時鳥がな

く」といふことと「湖水のさゝ濁り」といふものとの間に、一味相通するもののあることを發見した作者の驚異の心がこの句の中心をなしてゐるのである。

時鳥裏見の瀧のうらおもて 芭蕉
時鳥大竹藪をもる月夜 芭蕉
時鳥なくや雲雀と十文字 去來
時鳥平安城をすぢかひに 蕪村
時鳥耳すりはらふ峠かな 鬼貫

等はよく人に知られた句である。

【丈草】幼名林之助。尾張犬山の藩士、内藤源左衛門の長子。十四歳の時から出仕した。しかし彼の性質は元來世間的の活動を好まなかつた。はやく靜思冥想の生活にあこがれてゐた彼は、指の傷を口實として、元祿元年、年二十七で致仕し、出家した。中村史邦の紹介で芭蕉に師事し、忽ち、蕉門有數の作家として、



間的の活動を好まなかつた。はやく靜思冥想の生活にあこがれてゐた彼は、指の傷を口實として、元祿元年、年二十七で致仕し、出家した。中村史邦の紹介で芭蕉に師事し、忽ち、蕉門有數の作家として、

邦の紹介で芭蕉に師事し、忽ち、蕉門有數の作家として、

名をなし、芭蕉から推服さるゝに至つた。師の歿後は粟津の龍ヶ岡に佛幻庵を結び、師の冥福を祈つて、三年間その岡を下らなかつた。寶永元年（三六四）二月二十四日歿。年四十三。句集には蝶夢の「丈草發句集」が古くから行はれたが、最近、野田別天樓氏の「丈草集」が出た。吉田絃二郎の「丈草庵の秋」は参考とすべき作品である。

【水底の】「おちつく」は沈んで行つて岩の上にとどまる動作を述べたものでなくて、既に岩の上にとどまつてゐる状態をいつたものである。冬の水が清く冷く澄んでゐるので、川か池かの水の底にある岩には落葉が沈んで、その上に落ちついてゐるのがよく見えるといふのである。いかにも物さびた、また冷く冴えた冬の水の氣分を巧によみ出でた句である。

【春風や】この句は、安永六年の作に係る「春風馬堤曲」といふものの第二句である。第一句は、やぶ入や浪花を出でて長柄川

である。その馬堤曲の作られた次第を知らぬと、實はこの「春風や」の意もほんたうには味はへない。曰く、

余一日問^フ著^ラ於^レ故園^ニ。渡^リ澗水^ヲ過^シ馬堤^ヲ。偶逢^フ女歸^ル省^ノ郷^ニ者^ト。先後^{シテ}行^ク數里^ノ。相顧^{ミテ}語^ル。容姿^{姍姍}。癡情^{可憐}。因製^シ歌曲^{十八首}。代^テ女述^レ意^ヲ。題曰^ク春風馬堤曲^ト。即ち作者蕪村が、一日故郷（攝津東成郡毛馬村）に歸らうとして淀川を渡り、馬堤（毛馬村の堤）にかゝると、偶々歸省する女に逢つた。蕪村はこの女と途々相語つて憐愍を感じ、遂に女に代つて意を述べたといふのである。して見ると、第一句を受けて、この「春風や」の句は蕪村の女の心を吟じたものである。「堤」は前記した毛馬村の堤である。「家遠し」はその女の家がまだ遠いといふのである。「春風が心よく顔を撫でる、それにつけても流石に歸省する身はうれしい。けれども、この毛馬の堤の長いことよ、早く家に着きたいのに、さても家路の遠いことよ。」との意で、まことに餘韻は翳々として春風と共に盡きない趣がある。女の足の随分疲れてゐることであらうに、との同情も起る。

この句は右の事情を考へなくても味はへないことはないが、そして、又生徒に以上の事情の一々を話す必要もな

からうが、取扱者としては、こゝまで頭に入れておく必要があらうと思ふ。

春風に帯ゆるみたる寝顔かな 越人
春風や日影流るゝ麥の上 孤相
春風や人聲うつる三笠山 芭蕉

【四五人に】季は秋、題は踊。よく分つた、印象の鮮かな句である。踊は盆踊ともいふ。盆の前後に、男女が、宮、寺などの境内、又人の庭前などで圓形に列し、音頭につれて拍子をとつて踊り廻る。いはば日本古來の平民舞踏會である。この句には「英一蝶が畫に賛望まれて」といふ詞書がある。

「夜明頃になると、踊りの人数も僅か四五人となり、月も西山に落ちかゝる。曉の月下に、宵の程からをどり疲れた四五人の姿が淡く照らし出されてゐる。」といふ光景を吟じたものである。

【蕭條として】蕪村句集にある句。蕪村の雄健な句風を見るに足る一例である。冬の枯野、その日没時で、それできなくてさへ、物さびし

いながめなのに、枯野の中に横たはつてゐる冷たい石の彼方に日は落ちて行く、いかにも蕭條たる氣分に充ち満ちた句である。

鳥羽殿へ五六騎急ぐ野分かな

江渺々釣の絲吹く秋の風

釣上げし鱧の巨口玉やはく

等の句も、同様の傾向のものである。

「蕭條」はものさびしいさま、又、しめやかなさまにいふ語。



【蕪村】 ブッソ。本姓は谷口氏。攝津天王寺の人。天王寺は蕪菁を以てあらはれてゐる。由つて蕪菁と號したが、後蕪村と改めたといふ。名は寅。又、長庚三菓堂・夜半亭・碧雲洞・紫狐庵等の別號がある。

江戸に出て、俳諧を嵐雪門の早野巴人に學んだ。かつて丹後に遊んで與謝に居たので、與謝氏を稱した。晩年京

都に住んで新俳風を起した。

その句は雄健奇拔、よく蕉門末流の餘弊を脱して、一新機軸を出した。又畫を古今の名墨に學んで、池大雅と並び稱せられた。實に俳壇畫壇に稀に見る天才である。天明三年（二四四三）歿、年六十八。

蕪村の作は、額原退藏編著、蕪村全集（有朋堂發行）に收められてゐる。

【藪入の】 季は新年、藪入の句。

藪入は藪林の故郷に歸る義であるといひ（和訓栞）、つと入りから轉じたものであるといふ（嬉遊笑覽）。元來一月七月の十六日前後に、奉公人が暇を貰つて、一日間ほどその家へ歸ることをいふのであるが、俳諧では新年の人事として、即ち正月の方のみを題とする。「藪入すること」のみならず「藪入する人」をもいふ。

こゝでは藪入した人を指してゐるのは勿論である。男でも女でもよいが、一人の親を郷里に残して、不如意な家計の爲でもあらう、奉公に出たのである。それが藪入で歸つて來て、親の前に寝るといふのは、親にとり子にとつ

て「あはれさ」の限りである。この「あはれさ」には「うれしさ」も「かなしさ」も「いぢらしさ」も籠つてゐる。

蕪村は前掲の如く、馬堤曲の第一句で「藪入や浪花を出でて長柄川」と吟じてゐるが、更に後に、

「君不見古人太祇が句、藪入の寝るや一人の親の側」

と引用してゐる。前の「春風や」の句と結び付けて味は

つて見れば、いかにもあはれが深い。母一人娘一人とい

ふことにでもすれば、惘然のおもひは一人である。尙、

太祇には次のやうな句もある。

藪入の顔けばし草の宿

藪入の土産の菓子や持佛堂

又

藪入に母の戯れやたけ比べ

などの吟もある。時宜によつては讀んで聽かせるもよからう。

李 文

【人心いくたび】 季は冬、題は河豚。

「河豚（ふぐ）は、背は黒褐色で、ところ／＼白茶がとほり、腹は眞白である。水上で空氣を呑み、食道を膨らし

て體を膨大せしめる奇性がある。毒があるといふが、味が頗るうまいので、古來命がけで喰つたものである。諺にも「河豚喰ふ無分別、河豚喰はぬ無分別」といひ、「河豚は喰ひたし、命は惜しし」ともいはれてゐる。

この句もやはり、その「人心」を吟じたもので、「いくたびも洗つたなら、毒も落ち去ることだらう」との考で、喰ひたさに洗つてゐるところを、——恐らく自分自身が洗つてゐるのであらうが——一歩高いところから「幾度

河豚を洗ひけん」と吟じたところに、俳諧氣分或は俳人の餘裕といふものが伺はれるのである。いくたび水で洗

つたとて、姑息はやはり姑息である。命が惜しければ喰

はないが最も徹底してゐる。全く「人心」といふものは

とかく姑息不徹底なものである。その姑息不徹底の裡に

屢、一大事の醸されることを知らないのである。この句

は、さうした人心の弱點を諷刺し、機微を穿つてゐるや

うで、まことに含蓄が深く、幾度吟誦しても趣味津々と

して盡きない。尙、次のやうな句もある。

あら何とも無や昨日は過ぎて河豚汁

芭 蕉

河豚喰ひし人の寝言の念佛かな 太 祇

【太祇】 炭氏、慶紀逸の門人。不夜庵・徳語などの號がある。佐藤紅緑の「俳句小史」に曰く、「太祇は炭氏、江戸の産。後、京に上りて終に京を去らず。……彼は蕪村より七歳の長である。……彼の長所は複雑なる趣向を何の氣もなく十七字に纏め、而して一點無理な所もなく、趣味更に津々たるに在る。無村にも複雑なる句があるが、太祇は殆ど複雑一點張といつてよい。……天然の風景に臨んで毫を取り、一呵して眞率なる句を吐くことは凡人と雖も間々ある事であるが、最も俗に陥り易き危険なる人事を捕へて美化することは、非常の手腕でなければ出来ぬ。太祇はこの方面に於て神通力を有してゐる。云々」と。かくて、天明の新調の蕪村と太祇との力に成つたことを斷言してゐる。明和八年（二四三一）八月歿。年六十三。

【九月盡】

九月の終り、それはまた秋の終りである。こゝ北陸の海岸から眺めると、はるかに能登の岬が長く北へのびてゐる。

る。秋も終り、やがて冬を控へた北國の空は、すでに荒模様の冬空を見せてゐる。その下に横たはつた岬の黒い影には、何ともいへぬ寥寞と陰鬱とが感ぜられる。句はそのやうな情景をよんだものである。

【砂に埋む】

須磨の海岸の小家はあまりに低いので、海岸の砂に埋まつたやうに見える。その小家へ、冷い冬の雨がしとくと降りそゞいでゐる。いかにも物靜かな、ひっそりとした眺めをよんだ句である。

おもしろし雪にやならん冬の雨

芭 蕉

垣よりに若き小草や冬の雨

太 祇

【花の陰】 一茶句集の中に見えてゐる句。

用語の上に聯想の洒落を弄してゐる。即ち花の「赤」と「あかの他人」とである。

春の花見に出かけて、花の下に群る人は、見ず知らずの人も多いのではあるが、いづれも花を見るといふよろこびで和やかな心になつてゐる人ばかりであるから、花見の人同志の間にも、共に酔ひ、共に歌ひ、共に談笑すること

とが出来るので、あかの他人などは一人もゐないといふのである。幼時から、冷い家庭の人となつて、親身の愛に乏しかつた彼は、かうしたところでも、敏感に人の情を見てとつてゐるのである。

【はつ雪や】 一茶句集の中に見えてゐる句。

「はつ雪や」は、修辭上、所謂配合の技巧である。

外にちら／＼と初雪の散りはじめた宵、家の土間に積んである俵の上に、小さな行燈の灯を入れておいてあるといふのである。寒い、寂しさうな陋屋の薄暗い夜景が目に見えるやうに描かれてゐる。

【一茶】 イッサ。小林氏。俳諧寺とも號した。信濃國（長野縣）上水内郡柏原村の人。幼時母を喪つて不遇の裡に人となり、好んで風流に身を委し、はては家督を相續することを避けた。江戸に遊



野縣）上水内郡柏原村の人。幼時母を喪つて不遇の裡に人となり、好んで風流に身を委し、はては家督を相續することを避けた。江戸に遊

8 挿 圖

松尾芭蕉筆

夏の空に出る人道雲の雲の峰、それは、いくつ浮び出てはまたくづれて行つたことであらう。さうした夏の日が暮れて、今は月が出て、雲の峯ならぬ山の上にかゝつてゐるといふのである。

櫻本其角筆

雛祭、體（アマザケ）にほんのりと紅に染まつた顔で、桃の花の側に坐り、詩を考案してゐる。詩人は、桃の紅と顔の紅とで髪が目立つて白く見えるといふのである。

向井去來集

沙千の濱、その潮のひいた砂地に帆をあげたまゝ坐つた船は、いつまでもはるか向ふに淡路の島を背景に負つて、離れぬことであるよ。

服部風雲集

元日の朝はうらゝかに晴れた。萬物皆新らしく、人は皆快さを感じてゐる。雀までも朗かに物語をしてゐる。

小林一茶集

初雪の降る日、まだ雪も積つて来ないのでいそぐと雪駄の音をたてて善光寺詣りをしてゐる。やがて本雪となつて何箇月かは雪駄ばきで参詣は出来ぬことであるから、その雪駄の響が感深いのである。

9 参 考

1 俳諧の略史

◇連 歌

俳諧の起源は連歌にある。連歌はもと、二人して一首の歌を詠んだのがはじまりで、その起りに就いては、日本武尊の御東征の折、甲斐の酒折の宮で、御火焼老人との御唱和であるにひばり筑波を過ぎて幾夜か寝る (尊)

かゞなべて夜には九の夜晝は十日を (老人) に基くといひ、或は萬葉集にある

佐保川の水をせきあげて植ゑし田を (尼)

苜る早飯はひとりなるべし (大伴家持)

を以てはじめとするなど、諸説區々である。

とにかく、連歌は一首の上の句と下の句を、一人が詠じたもので、その勅撰に入れられたのは、後撰集に一句、拾遺集に十六句、續詞花集に十七句、金葉集に十九句である。

後鳥羽院の頃、定家・家隆がはじめて五十韻・百韻の数を定め、後宇多院の頃には連歌の所謂舊式目が定められ、吉野朝時代、京都では、二條良基の命によつて「筑波集」といふ最初の連歌集も出来た。その後、應安年間の新式目、享徳年間の新式追加、文龜年間の新式今案等次第に連歌式目の改訂が行はれ、明應四年には宗祇によつて「新筑波集」も撰ばれた。これらの連歌に用ひられた語・句は優美・艶麗で、恰も多くの歌を羅列したやうな趣があつた。例へば

年毎の花ならぬ世の恨かな

ふりにし跡も庭の春草

山の端の薄雪残る露みえて

羽風を寒み雁わたる群

船とめし枕は秋のうら波に

月を旅寝の袖のかたしき

(紹巴獨吟千句の中)

の如きものであつた。これらの優艶典雅なものの外に、また滑稽機智を旨とした所謂狂連歌といふものもあつた。そして、よき連歌即ち優美なものを「柿のもとの家」といひ、わるき連歌即ち滑稽機智に富んだものを「栗のもとの家」などと稱へた。その狂連歌とは次のやうなものであつた。

かたわにて片輪もなしに見ゆるかな

こゝへくるまもいかがつらん

春にもえ秋はこがるゝかまど山

霞も露もけふりとぞ見る

後に連歌を排して勃興した俳諧は遠く源をこゝに取つたのである。連歌の巻頭の一句を發句といふ。連歌を作る間に、單に發句のみを作ることも行はれた。これはいつの時代から始つたかは明瞭に定めることは出来ないが、御鳥羽院の御時、定家・家隆などの名流の輩出した頃からであらう。例へば、

散る花を追ひかけて行く嵐かな 定家

亂れ藻は角力草にぞ似たりけり 義家

頼朝がけふの軍ぞ名取川 頼朝

月の秋花の春立つあしたかな

宗 祇

涼しさやけふから衣たつた姫

肖 柏

等の如きもので、和歌の上の句十七音が、切字によつてまとまつたに過ぎぬものであつた。併し後の俳諧の發句は全く連歌の發句に胚胎したのである。

◇俳諧の起源

狂連歌として「栗のもとの家」として排斥せられてゐた連歌は、一躍して純正連歌の羈絆を脱し、新に一頭地を抜いて、俳諧となつて世に現れた。これが先鞭をつけたものは、山崎宗鑑と荒木田守武との二人である。

宗鑑は近江の人で、もと足利義尚に仕へた武士であつたが、剃髮して攝津に移つた。當時連歌の流行が頗る盛であつたが、その高尚優雅なる、到底普く世人に親しまれ難いことを思ひ、俗談平話の俳諧に風雅の吟懐を洩すことを創めた。

その連歌は

夢のうちにもいたくこそあれ

花にぬる胡蝶は雨にたゝかれて

うそをふきく花をこそ見れ

軒端なるはちのすはひに梅咲いて

あかつきごとに叩くへうたん

山がらの籠に水雞を入れかへて」

思ふほどこそくらはれにけり

夜もすがら破れ蚊帳の内に寝て」

……

等の如きもので、その形は後鳥羽院以前のものに似てゐるが、その想は遙かに上代の連歌を超えたものである。滑稽あり、諧謔あり、機智あり、しかもそれらは自由自在に使はれた。發句も

梅漬はうぐひすのみのさかな哉

寒くとも火になあたりそ雪佛

風寒し破れ障子の神無月

等の如きもので、古連歌の發句に比して、用語が著しく異つてゐる。連歌の發句は優雅高尚な和歌の用語であつたが、宗鑑は俗語を巧に用ひた。彼に「犬筑波集」の作がある。

宗鑑とは同時代に出た荒木田守武は、伊勢内宮の神官で、正四位上中川平太夫と稱したものである。はじめ連歌に入り、後、連歌の束縛を脱して、その意に適つた俳諧の歌を主とした。その俳諧に對する主張は彼の獨吟千句の跋に「さて俳諧とて、みだりに笑はせんとばかりはいかゞ。花實を具へ、風流にして、しかも一句たゞしく、さてをかしくあらんやうに、世の好士の教

なり……とあるによつて見れば、單なる滑稽でなく、形式・内容とも整ひ、風流で卑俗に流れず、しかも全體にかしみを持てと言ふにあつた。その連句及び發句の一例を示さう。

君が代ははなげ抜くべきものなくて

ながいきするは手にぞ知らるゝ

玉の緒や十色はた色ひろぐらん

心ほそくもをしきげにけり

あす知らぬ火打袋をたのむ世に

口の中にも入るは山ぶし

かねをだにつくれば人ははぐるにて

いかばかりかは若くなるらん

鏡にて見よや／＼のはてもなし」

元朝や神代の事も思はるゝ

飛梅や輕々しくも神の春

花よりも鼻にありける匂ひ哉

かさゝぎやけふ久方の天の川

◆真門の俳諧

天文十八年守武が卒し、同二十二年宗鑑が入寂して、俳諧はその草分けの巨匠を失ひ、將に舊のまゝで萎死しようとした。こ

の危機に際して現れたのが松永貞徳である。貞徳は、はじめ連歌を學び、後大いに俳諧の興味を感得し、壯年に及んでは断然俳諧を以てその專業としようと志した。而して「御傘」十卷を撰定して俳諧の法式を定め、俳道に一大光明を添へた。彼は「俳諧は面白き事ある時、興に乗じていひ出し、人をよろこばしめ、われもたのしむ道なれば、治まれる世のうゑとはこれをいふべきなり。」といつて、單にかしみの外、別に優美と雅致とを具ふべきであることを主張した。

塵の名にもつもやさしの初音哉

植込よりも見ゆる夏山

ふもと田の早稲も晩稲もよりのびて

思ふやうにぞ雨もさりける

十五夜の月にはさはる雲もなし

きつかりきかりわたる雁がね

しちやかた悦び勇む秋なれや

菊千代丸といひてかしづく

等

の連句や

せばくとも御宿申さんけさの春

うましとて口をもたゞく若菜哉

打とけて氷と水や仲なほり

七夕のなかりどなれや宵の月

等の發句を見ると、その形の上にも、想の上にも、宗鑑等と特に異なる點を見出し難い。即ち貞徳の功績は、その作句にあらずして俳諧の法式を定めたこと、及び將に滅亡しようとした俳諧を中興せしめた點にあると見るべきであらう。門人には、野野口立圃・松江重頼・安原貞室・北村季吟・山本西武以下多くの俊才があつた。

◆檀林の俳諧

肥後の人西山豊一が京都に出たのは寛永九年(二二九二)であつた。彼は、名を宗因と改め、和歌・連歌を友として閑寂な生活を送つてゐた。連歌に於ては頗る上手の域に達し、大阪に住んで、天満天神の月次宗匠となり、連歌の判者として暮した程であつたが、貞徳の門人松江重頼から俳諧の風味を吹き入れられてより、頓に斯道に心を寄せ、遂に別流を起して、新に檀林風の俳諧を創めた。

彼が古風の俳諧を排して一新旗幟を樹てたのは、主として發句の方面である。連句には特に著しい新味を見出し難い。その發句は

花に斗樽皆置いて來た有様なり

頭巾寒うして北に峨々たる青山なし

古歌に曰く千とせぞ見ゆるかどみ餅

事初や七十歳攝州住

花むしろ一見せばやと存じ候

柴爺がいへり奥は夕昏けさの秋

などの如きもので、第一に、十七音以上の發句を詠じたことが目につく。字餘りの句は、發句の創始時代に於ても多少はあつたが、宗因は力めて字餘りの句を作つたのである。これは大いなる特色である。第二に、その想に於ける特色は、確かに貞門以上に進んだもので、單に滑稽の着想の外、自然及び人事に於ける機密を穿つたものがある。第三に、發句を修飾する言詞の豊富なことも著しい特色である。前掲のもののみについて見ても、「青山に」「峨々として」「寒うして」「曰く」「候」の如き文字は宗因以前に於ては見る事が出来なかつたものである。この外、

富士は雪三里裾野や春の景

風に乗る川霧輕し高瀬舟

民の家もまた新なり煤掃ひ

などの如き清致飄逸なるものもある。これは芭蕉の句集中にも置きたく思はれるものである。

これを要するに、宗因は新詩形・新言詞・新思想を以て貞門俳諧

の沈滞時代を警醒したものである。門人には井原西鶴・水田西吟・北條園水・椎本才磨・田代松意・松井宗且以下多くの名人があつた。而してその一派には亂調の發句を主とするものがあつた。連句には特に力を用ひ、多く詠み、早く詠んで人を驚かし、所謂俳諧大矢數を争ふやうな風をも生じて、その極、文學の一種としては見る事の出来ない程のものを作爲するやうになつて來たものも多かつた。

◆伊丹風の俳諧

攝津國伊丹に松井宗且といふものがあつた。彼は幼より俳諧を好み、西山宗因の門に遊んだ。これが後世、伊丹風の祖といはれる人である。伊丹風とはその地名によつて名づけたものであらう。後、寛文元年(二三二)伊丹に上島鬼貫が生れ、古風の俳諧を學び、ついで談林風を慕ひ、種々の句を詠んだが、遂に「俳諧は狂句作意をいふのみ心得たるばかり一概にかたよるべき道にもあらず、猶深き奥もやあらん」と悟るところあり、貞享二年「まことの外に俳諧なし」との悟に入つた。彼のいふ「まこと」とは即ち美である。美を捉へずして、徒らに形と言詞とのみに重きを置き、詠み去り詠み來るのみで何等の餘韻をも感得し得ぬ句は上乘のものでないとした。この點に於て、彼は早く蕉風と相通するところがあつた。

春の水ところくに見ゆる哉

草麥や雲雀が上るあれ下る

闇がりの松の木さへも秋の風

吹くからに薄の露のこぼるゝよ

等によつて見られるやうに、一言にして評すれば、彼の句は自然である。求めず、作らず、感得した自然をそのまま描寫したものである。この點は遙かに檀林風の上にあるものである。鬼貫が一家を成した時は、芭蕉が一家を成した時である。鬼貫は初め古風に入り、檀林に遊び、觀破して後、鬼貫風を起した。芭蕉も初め古風を學び、檀林を弄び、竟に蕉風を開いた。その經過が頗る相似てゐるが、二人の間に師弟の關係はなかつた。併し、鬼貫の門人は山下其勢・高橋只川、その他兩三人に過ぎなかつたので、伊丹風は鬼貫の歿すると共に亡び、天下の俳壇は芭蕉の占有する所となつた。

◆蕉風の俳諧

このときに起つたのが、芭蕉である。彼は貞徳・季吟の俳句を學んだ。しかしそれは雅であるが深刻でない。生命に觸れてゐない。又彼は談林風の俳句を學んだ。彼の初期の作、及びその散文には所謂俳味なるものがあらはれてゐる。しかしそれは芭蕉のねらつてゐるところではない。彼は、もつと深刻に、嚴肅

に、生命の根元に掘りさげて行かうとした。彼は永遠な生命、普通の生命、しかも外面に種々相をもち、内面に永久普通の生命を貯へるところのものをねらつた。彼はその生命を自然の内に見出すことができた。彼は自然の囁きに耳をかたむけ、造化の秘を發くことによつて、そこに永久普通の價值と生命とを見出すことができた。

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

如何にも閑寂であるではないか。かく、芭蕉の狙ふところは閑寂といふことである。天下は滔々として、檀林に走せ參じ、滑稽酒脱をこれ生命としてゐるのに、これはまた、何といふ閑寂なことであらう。閑寂とは芭蕉の見た自然の姿である。永久普通の絶対價值はこの閑寂な自然の姿にあると考へたのである。芭蕉は江戸で、佛頂和尚に就いて參禪した。この事は確かに彼が心境を拓いたに相違ないが、單に是のみではあるまい。彼は夙に俗世間以外に、人生の眞趣を味はふべき別天地のあることを悟つた。早く主君に別れて、世を味氣なく觀じ、一度國を去つて、流浪すること數年、江戸で杉山杉風の情によつて、漸く安住の室を得ると、忽ちに回祿の災に罹るなど、この不運の生活が、彼の悟りの原因であらう。加ふるに、西行の高節を忍び、杜子美の風骨を味はふ事が深かつたので、かたゞ靜寂な新趣味を發

見したのであらう。

閑寂とは、人間の問題を離れた、單に靜かな自然現象を見るといふのみであらうか。否々、閑寂の相を自然の姿に見出すといふことは、人間の求めてゐるものを閑寂な自然に見出すことである。自然に見出される閑寂は自分のものであり、自分の閑寂の中に移入するのである。

自然現象を見てゐるといふことは主觀と客觀との對立であるが、やがて主客一致融和の境地に、この閑寂の相が見出されるのである。それは自然そのものでなく、絶對のものである。

又、閑寂といふことは、靜か、眠りといふことであらうか。否否、表に靜寂の相を装ひ、裏に永久普遍の生命力を藏してゐることである。實例に就いていへば、

古池や蛙とびこむ水の音

この句には「とびこむ」といふ動作があるではないか。閑寂といふことは靜止してゐるといふことではない。

旅に病んで夢は枯野をかけめぐる

これにも「かけめぐる」といふ動作がある。しかもその表面には「古池や」「枯野」などの靜かなものがあるのである。

芭蕉には所謂十哲をはじめとして多くの弟子があつたが、芭蕉の歿後は各、その好む所に従つて説をたて、ために蕉門の俳諧

は次第に衰運に向つた。

◇天明の俳諧

芭蕉歿後俗化墮落した俳諧は、安永・天明の頃に至つて復興せられた。これが中心となつたものは、三浦栲良・與謝蕪村・大島蓼太・加舎白雄・加藤曉臺・高桑蘭更等である。その特色は、元祿期のものに比して、題材も華美で、修辭の巧緻も進んだ。但しそれがために、元祿蕉風の特色であつた幽かな寂のある趣が失はれた。譬へば、元祿の俳諧は一脈の香煙のあるかなきかの薫であるが、天明調は香水の鼻を撲つ香の趣である。

梅が香に驚く梅の散る日かな

栲良

山寺や誰もまゐらぬ涅槃像

蕪村

春雨やものがたり行く義と笠

蓼太

三井寺や日は午にせまる若楓

白雄

梅が香の岩にしむ時水の音

曉臺

白蓮に人影さはる夜明哉

蘭更

人戀し灯ともし頃を散る櫻

蘭更

子規鳴くや夜明の海が鳴る

蘭更

桃つら／＼花盡くる所水長し

蘭更

古琴や鼠出て行く春の暮

蘭更

雪消えて麥一寸の野面哉

蘭更

あか／＼と霜水りける蕎麥の莖

これらによつて、その句風を窺ふことが出来よう。

この後、寛政の末、享和の初から、文化を経て文政の初迄は、大江丸・完來・成美・土朗・乙二・道彦・一茶・月居等の諸俳士が各、得意の伎倆を振つて、俳壇を賑やかにしたから、この時代の俳壇は蕪村時代に比して甚だしい差異はなかつた。

名月のさつさと急ぎたまふ哉

一茶

初雪や俵の上の小提灯

大江丸

北濱や水打つ上の初しぐれ

大江丸

萬石の露この萩に置きたらず

完來

若竹や引きたわむれば嵯峨の雨

完來

黒谷の念佛聞ゆる夜寒哉

完來

◇天保の俳風

天保時代には梅室・蒼虬・鳳朗等をはじめ多くの俳人があつたが、いづれも低調俗流の域を脱せぬものである。以後、蕪延・文久より元治・慶應・明治に及んで次第に俳諧の俗了するものとなつた。

◇明治の俳諧

明治に入つても、天保時代からの餘習を受けて、俳風は俗臭紛紛たるもので、何等文學の意義を解しない宗匠等が到る所に蟻

踞してゐた。それらの悪傾向に對して革新の叫をあげた先驅者は正岡子規であつた。彼は在來の幽玄主義・閑寂主義に偏せず、俳句の文學的生命に思ひ到つた。子規の俳句の上に於ける主張は「純客觀の寫生句を作れ」といふことであつた。新しい文學眼を開いて眼の前にある自然・人事を素直に見るといふことが何よりも必要であるとした。そしてその眼に映つたところを、正しく偽らずに藝術的に寫生すべきことを主張した。彼の周圍に集つた俳人中、特に目高つたのは内藤鳴雪・高濱虚子・河東碧梧桐等であつた。虚子・碧梧桐らは、青年氣鋭の士であつたから、舊套打破に全力を注いで、革新の仕事に大いに見るべきものを残した。碧梧桐は純客觀の上に立つて、印象の明瞭な句を、虚子は主客兩觀に跨つて、餘情・餘韻のある句を、鳴雪は雅語・漢語を駆使して、温雅な落着きのある句を作つた。その他子規の門弟には佐藤紅緑・松瀬青々・坂本四方太等があつた。

この子規一派を「日本派」といふ。日本派の外に俳句革新に志した團體に、秋聲會・筑波會などがあつた。日本派が専門の俳人を中堅としてゐたのに對して、これらは俳句を餘技とする傾向を持つた人たちがその中堅となつた。角田竹冷・巖谷小波・尾崎紅葉等は秋聲會を率ゐて、日本派が田園的であるのに對して都會的、一方が書生肌であるのに對

して通人肌といふやうな點が見えた。筑波會は東京帝大派の文士が組織した俳會で、佐々醒雪・大野酒竹等がその中心であつた。

これを要するに、明治の革新は、(一)俳句の内容を一新して藝術的意義を興へ、(二)新取材に力め、(三)格調の奔放・自由を求め、(四)人事・自然に向つて新しい眼を開くと共に寫生本位、純客觀主義をとつたことなどである。それに西歐文學の影響をも受けて、舊生命の殘骸の如く見なされた俳句は、新時代の人々がその文學的新生命の一部を表現すべきものとなつて、復活の光を示した。

2 俳句の修辭について

俳句を解するには、先づ俳句の修辭上には一種獨得の約束のあることを知らなければならぬ。俳句の詩形は最も短い。僅か十七文字である。随つて、自己の感想を残らず文字に現して排列する事はむづかしい。入りたい文字も、勢省く。言ひたい言葉も、やめねばならぬ。詩形の短いだけそれだけ省略の必要を適切に感ずるので、この點に於ては、恐らく俳句ほど文字の極端に省略される詩は他にその例を見ぬであらう。

提燈を消せと御意ある水雞かな

蕪村

この句は、供の者に提燈を持たせてはくく來かゝると、をり

から水雞が鳴きだしたので、供の者に、持つてゐる提燈の燈を消せと命じたところを詠んだのである。句の文字だけを解釋すれば「消せと御意ある」までは誰にも分るであらうが、「水雞かな」だけで「鳴く」を略するのは、かういふ詠み方には普通として一般に用ひられてゐる。

ほととぎす平安城を筋かひに

蕪村

この句は時鳥が鳴いて平安城を筋違に飛行くといふのである。單に「時鳥」と上五字に置いただけで「鳴いて」を「筋かひに」だけで「飛んで行く」を省いたのである。

春雨やものがたりゆく義と笠

蕪村

「義と笠。」この省略法も多く用ひられてゐる。義を着てゐる人と傘をさしてゐる人とが、春雨のしとくと降る中を話しながら歩みつゝ行くといふのである。

以上は句法に最も普通な修辭法として、常に多く使用される省略法であるが、今左に極端な省略の例を挙げよう。

奈良七重七堂伽藍八重櫻

芭蕉

の如き、たゞ名詞を排列しただけで、一つの「てにをは」すらないといふに至つては、いかに省略が甚だしいとはいへ、實に驚かざるを得ない。若し門外漢をしてこれを讀ませしめたならば、たゞに了解に苦しむのみならず、先づげんげんに堪へぬであ

らう。助動詞なく、動詞なく、「てにをは」なく、單に名詞の排列のみを以て俳句なりとしたならば、門外漢で俳句の意味を解するものがあらうか。かくの如き俳句は、省略法を知ると同時に、全く讀者の聯想力・想像力に俟つて、始めて首肯し得るものである。「奈良七重」はたゞ音調の上の掛言葉である。下五の「八重櫻」は上の「七重」を受けて、一きは句調を華やかにしたものである。七堂伽藍の莊嚴なのが、八重櫻の艶麗なものと相反映し相調和した壯觀無比の風光が、かくして詠じ出されたことを知つたならば、僅かに趣味を解する者も、猶一幅の畫に接する思があるであらう。

文字の省略に獨得な自由を有する俳句には、文字の顛倒も盛に用ひられる。これは省略法と共に、また必要缺くべからざる一要件たることを知らなければならぬ。

我が宿の鶯聴かん野に出でて

蕪村

「野に出でて我が宿の鶯聴かん。」とあるべきもので、

鴨おりて水まで歩む水かな

嵐雪

「鴨おりて水まで水を歩むかな。」とあるべきもので、一歩進めて言へば、「鴨おりて水の所まで水の上を歩むかな。」とあるべきものである。即ち鴨がおりて、水のある所まで水の張つた上を歩いた光景を敘した句である。そしてこの句は「水の所まで」

「水の上を歩む」に於て、文字の顛倒と省略とが同時に用ひられてゐる。

蛇落ちて驚く崖の若葉かな

維駒

ふきの葉にこけた手を拭く垣根かな

紅葉

前の句は「崖の若葉より蛇の落ちたるに驚くかな。」後の句は「垣根のふきの葉にてこけた手を拭ひたるかな。」とあるべきところを、顛倒と省略とを同時に併用したものであつて、かういふ句は、得て門外漢に疑問の種を蒔くのである。一讀句意が分るやうで、そして分らぬところがある。即ち「驚く崖の若葉かな」とあるのが第一の疑問になる。つまり、蛇が驚いたのか、人が驚いたのか、ちよつと解釋がつかぬのだ。これは多分若葉が驚いたのであらうなどと、遂には突飛な推測が門外漢に出ぬとも限らぬであらう。「こけた手を拭く垣根かな。」も、同じ筆法の讀者には、垣根で手を拭いた様にも取れるであらう。否大抵はさう曲解する。こは全く俳句獨得の約束を知らぬからである。俳句が以上の如く修辭法の上に特別多大な自由を許されてゐるのは、畢竟その短詩形なるが故である。

俳句は如上の形式のもとに、特別の自由を有する修辭法を以て自己の美的感想を遺憾なく發揮せしめ得る詩であつて、他の詩と拮抗して些の遜色もない完全なものである。故に俳句は時に

(沼波瓊音——俳句の作り方)

抒情的たり、敘景詩たり、敘事詩たる事がある。決してその一
種類に限られるものではない。されば天然を詠ずると、人事を
詠ずると、或は主観に、或は客観に、各自の欲する所に随つて
自由自在である。

一切の詩が理窟を許さないといふ定義は、俳句もこれを破るこ
とが出来ぬ。然るに俳句を理窟的に解釋しようとしてゐる者が
ある。これらの輩は、俳句に理窟をこじつけて、強ひて勿體が
る。かくの如きは、俳句を尊からしめようとして、却つてその
美を穢すものといふべく、妄想も亦甚だしいといふべきであ
る。例へば芭蕉の「古池や蛙飛びこむ水の音」の吟を禪學悟道
の句だといひ、或は人生觀を蛙なる動物の動作に託して吐露し
たなどと、とんでもない理窟をつけて解釋してゐるものもある。
理窟なくては安心の出來ぬ輩は、色々な穿鑿に捏造を逞しくし
て、故人の名句を傷つけてゐるのである。芭蕉は「古池に蛙が
飛びこんで、水の音がじゃぶんとした。」といふだけを詠んだの
であらう。否、必ずさうである。これ以外何の理窟も意味もな
い。傳授もなければ秘密もない。況や人生觀に於てをやだ。か
くの如き曲解者は、謂はゆる俳句を毒する者で、怪しげなこの
屁理窟は、往々初學者を煙に巻いて誤らしめる事が多い。初學
者たる者は須らく用心すべきである。

一〇 奥の細道

松 尾 芭 蕉

1 解 題

「奥の細道」の中から四節を抜いた。
「奥の細道」は芭蕉の數ある紀行の中で最も勝れたものとせられ
てゐる。記すところは、元祿二年(二三四九)三月、門人曾良
を連れて江戸を出で、奥羽を経て、北陸に入り、伊勢に至らう
とするまでである。即ち「彌生の末の七日(二十七日)」に「草
の戸も住み替る代ぞひなの家」の句を庵の柱に懸けておいて出
發してから「長月(十月)六日」に伊勢の遷宮を拜まうと、船に
のつて「蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ」の句を吟するまで、丁
度半年がかりの旅記である。

「奥の細道」の傳本には、「眞蹟本」、「素龍本」、「去來本」、「其角本」
の四種がある。「眞蹟本」は、素龍本の奥書に、「眞蹟の書、門人
野坡が許に有」とある如く、志田野坡の手許にあつたのである
が、今日傳存するかどうか、不明である。「素龍本」は、芭蕉が
素龍(江戸淺草自性院の住職。能書で、「炭俵」の序を書いた
人)に清書させ、表題は自ら書いて、常に携へてゐたもの。そ

の後(多分元祿十二年秋)京の井筒屋から出版した四角(所謂
枳形)の本である。「去來本」は、右の素龍の清書した本を、元
祿六年九月、嵯峨の落柿舎で向井去來の書寫したもの。その後
所在が不明であつたが、明和六年(元祿八年から七十五年目)、
京都の俳僧蝶夢が、伊賀の上野でこれを發見した。
「其角本」は、明治十八年發行した其角堂の藏版本。奥書に、「元
祿十年冬、其角寫於大阪旅舎灯下、校合畢」とあるが、素龍本
や去來本に比して、語句の拙劣不正の處が少くない。
「註釋本」としては、小林一郎著「奥細道評釋」(大同館發行)、大
藪虎亮著「詳解奥の細道の新研究」(東京梅津英吉發行)などが
よいやうに思はれる。

2 作 者

松尾芭蕉 マツヲ ベセヲ。
幼名を甚七郎といひ、長じて忠右衛門宗房といつた。幼時から
穎悟、藤堂良精の臣となり、その長子良忠に仕へて御氣に入りであ
つた。この良忠は蟬吟と號し、北村季吟に歌俳を學んだので、芭
蕉も自然これに倣ふやうになつた。廿四歳の時に蟬吟が死んだの
で、かねてから遁世の志があつた芭蕉は俄に致仕した。しかし、

これは一説で、芭蕉の通世については、諸説紛々として定らない。俳諧の外に詩を伊藤坦庵に、漢學を田中桐江に、書を北向雲竹に學び、又禪を佛頂和尚に學んだともいはれる。寛文十二年九月江戸に下つたが、天和元年深川に庵を結ぶまでは諸處を流浪した。しかし、天和二年に火事で庵が焼けると、また甲斐地方を遊歴した。後再び江戸に歸つて来て、深川に一室を作つて居り、芭蕉一株を植ゑて、その蕃殖を見て楽しみ、以て號とするに至つた。貞享元年京に上つて歸り、その四年秋、鹿島に遊び、翌年大和を巡り、元禄元年信濃に遊び、同じく二年奥州・北陸・濃・勢に旅した。七年秋伊賀に在つたが、大阪から南都へ赴かうとして、十月十三日大阪御堂前南久太郎町花屋仁左衛門の裏座敷に宿り、たま／＼疫を病んで歿した。年五十一。甲子吟行（又野曝紀行）・鹿島紀行・芳野紀行・更科紀行・嵯峨日記・冬の日・猿蓑・炭俵・など紀行・俳諧・俳文の著述が多い。

3 編纂の用意

前課、蕉門並に蕪村門一派の俳人のものした俳句に關聯してその道の祖師と仰がれる芭蕉翁の名紀行文を讀ましめ、謂はゆる俳文の淡雅・勁健・簡潔・輕妙なる趣を味はせたい。

4 要旨及び概説

俳聖芭蕉が東奥・北陸の地理的風物に接し、歴史的舊跡に對して、如何なる觀察を下し、如何なる感想を抱いたか、又、旅といふものを如何に味はつたかについて考察せしめるにある。即ち、

第一節 「出立」に於ては、歲月も旅人であり、船人・馬子は日々旅を栖としてゐる、自分も夙くから漂泊の思がやまず、今また奥への旅を思ひ立つたことであると言つて、門人等と留別・送別の句を吟じかはし、首途の情景を敘してゐる。

第二節 「平泉」に於ては、先づ途中の難儀を語り、平泉に到つては高館の眺望に懐古の筆を走らせ、簡潔道勁の文字を以てしかも心ゆくまで當年の義臣を弔ひ、或は光堂内外の古色を描いてゐる。

第三節 「立石寺」に立寄つては、岩角を攀ちて閑寂の佳景に心を澄まし、

第四節 「金澤」に出ては、商人と宿を共にし、同好の士一笑の爲に追善の句を吟じてゐる。

5 取扱上の注意

凡そ文章の「簡潔」といふことは、この種の文に於てその實を見得るのである。支那詩文の故事を踏まへ、芭蕉一流の含蓄ある俳句を挿入したところは、即ちその簡潔を致さしめてゐるのであるが、この點はまた形式上からも内容上からも、讀者に精讀を要求してゐる。辭句を説いても、作者の心境に到達することは容易ではないが、辭句を疎かにしては尙更作者の心境には及びがたい。よく辭句を説いて辭句に捉はれず、以てその文章の妙味を理會せしめるやうに導きたいものである。

各節とり／＼に興深く、眞に名文たる稱に負かないが、就中出立の節では、芭蕉の旅に關する考がよく窺はれ、平泉の節では、史的懐古の筆が殊に冴えてゐる。立石寺では、直に讀者を驅つて、その寂寞の境に遊ばしめ、金澤の條では「塚も動け」の強い表現が、痛く讀者の胸に應へる。

簡潔には、どうしても文法形式の破格といふことが伴ふが、この文にもそれが多し。例へば平泉の節で「三代

の榮耀一炊の夢」以下夏草の句までの文は之を證してゐる。主語・述語と解剖して行けば、随分無理な文章であることが分るであらう。しかもそんなことには一向差障りを感じしめられず、この部分が、特に讀者の胸にぐんぐんと應へて来るのは、即ち名文の名文たる所以である。文とはいふものの、實は詩であるからである。

芭蕉は、日記などをするのに事細かに定まつた事柄を記す要はない、たゞ折節にふれて心に留まつた事のみを記せばよいといふやうな意味のことを言つた。芭蕉の書いた文章はそのとおりである。日記も芭蕉のやうな氣もちで書いておれば、詩や文章と異なるところはない。殊に芭蕉の文章は生地を持つてゐる。生地といふのは、言ひかへれば心の背景である。芭蕉の文章はその生地の上に一切の物を据ゑて見るこゝろもちがある。

（三木露風—詩歌の道）

ともいはれてゐる。芭蕉翁の文の中で、特に出色のものであると稱せられてゐる「奥の細道」その中でもまた最も名高いこの課の文に於ては、三木氏のいはゆる「生地」

翁の心の背景が殊に鮮かに見えてゐると思はれる。その引締つた文の調子には、實に何ともいはれない一種の「ひびき」がある。かういふ文章に對しては、特に朗